

ります。けれども形式では十遍だけです。

○若樹 其お十念を授ける時に斯う云ふものでせうか。

○鳶魚 さうです。十回言ひます。何時も佛といふ聲は低く切れたやうになる。佛といふ時に南が出ます。南と佛と一緒に聞えない。

○仙秀 嘘の後で、糞喰へといふことは、弘前邊では風邪をひかぬ呪だと云つてます。

○鳶魚 「コン畜生」と言ひます。

○仙秀 そんな事も申しますか。

○鳶魚 東京では「畜生奴」と言ひます。

○若樹 嬉遊笑覽か何かに出て居る。人から呪咀された時に嘘が出る。夫れを呪ひ返す詞だといふ。

○仙秀 東京では一ほめられて二くさ、れ三ほれられて四風ひくといつてゐる。

○鳶魚 和訓栞のクサメ、ハナヒルの條に色々引書して、噴嘘の厭勝に就いて説があります。前回にも「糞喰へ」がありました。どんな事か御話が出なかつたが、鳩巢小説に江戸町奉行の米津勘兵衛是は慶長十七年から寛永元年まで勤役した人ですが、旗本奴の山中源左衛門を糺弾した處に、勘兵衛申候は、其分に仕置候へ、明日は糞問に可仕と申候得者、源左衛門申候者、扱々其方

は是非なき事を申者にて候。士たるもの糞を食候ては如何にしても忍ばれぬ事に候」と書いてあります。糞を喰へといふのは、糞向に掛けることとあります。糞問といふと水問を掛けると同じことで、梯子の上に縛り付けて顔の上から糞を掛ける。苦しくて息が出来ぬ、それを糞問と言ふ。糞を喰へは糞を食ひ候の邊から出て居るやうに思はれる、拷問を典據とするものでありませう。ハツ、ケが磔から来て居るやうに、罵語にはさうした言葉があるらしい。

○共古 尻でもしやぶれといふのと同じ事で、もう些と軽くはありませんか。

○若樹 糞を喰へにそんな故事来歴も要りますまい。

○鳶魚 丁度好い按排に糞を喰へが有つたかも知れませんが、「くつしやみから長郎だ」といふ事は沙彌から長老になるといふ事を濫用したのでせう。

○若樹 「長郎」の郎の字が違ひませう。

○鳶魚 老の字を書いた。

○若樹 さうでない、本文には何十郎の郎が書いてあります。

○鳶魚 それはいけない。

○若樹 「さゝめき」は「さんざめき」でありませう。物のざわ／＼することです。

○共古 「しかつべらしく」、是はむつかしいな。然りツ可きらしきの略か、可然の文字か。

○鳶魚 「鹿爪」でせう、普通に言ふのは……、本當はどうか知らん。

○仙秀 眞面目くさると云ふ事でございませう。掛言葉が先きにあつて後も無理に當嵌めるから、變な唐音が何かで言ふやうになつて来る。

○若樹 口に風をひかせるといふのはどう云ふ事ですか。

○鳶魚 矢鱈に物を言つたから口に風を引かせるといふ事です。

○若樹 意味はどう云ふ事ですか。

○共古 餘計な事を言ふ。

○仙秀 物いへば唇寒し秋の風の意は支那にもありませんか。

○若樹 「あつたら」

○共古 餘計な事を言つて口に風を入れるに及ばぬといふ位なものであります。

○煙屋 桑名の十念寺の縁起中に、或年の頃良忠上人の弟子の譽阿彌陀佛といふのが、或日寅の刻に東方に向ひて合掌し、十念稱名し給ふに、白光來りて一聲毎に口に入り、故に佛光山十念寺と號したとの事があります。狂歌と云ひ、此邊の趣向と云ひ、何だか之に關係が有りさうに思はれます。

かく詠捨て、打興し行程に早くも追分に至る、此所の茶屋饅頭の名物あり、茶屋の女「お休みなさ
りませ、名物饅頭のぬくといのをあがりませ、おぞうにも△りませ、北「右側の娘が美く
しいの、彌「饅屋の小ちよくめらも愛嬌らしいト茶屋には入腰を掛る、女「お茶アあがりませ、
彌「饅頭もやらかして見やう、女「今上げませうトやがて盆に持て来る、此内金比羅參と見へてぬ
のこの上に白き一重のはんてんを引張たる男、同じく此茶屋に休み雑煮餅を食かゝる、彌次郎まん
ぢうを食しまひ、「もつとやろふか、いくらでもはいるよふだ、北「イヤお前も雨風どふらんだ、
いゝ加減にしなせへし、金比羅「貴方がたアお江戸かな、北「左様さ、金比羅「私もお江戸へいた
時本町の鳥飼の饅頭をかけごととして二十八喰たことがありました、又格別な物じや、彌「鳥飼
はわつちらが町内だから毎日茶うけに五六十ヅ、は喰ひやす、金比羅「夫れはゑらひおすきじや、
私も餅すきで御らうじませ、此雑煮をいきなし五ぜんたべました、彌「私やア今此處の饅頭を十
四五も喰たるふがまだ其位はいけるだろふ、ねつからくひ足らぬ様だわへ、金比羅「イヤしかし惡
甘い物はもう其様にはあがられますまい、十四五もあがりやア關の山だ、彌「ナニまだくへやす
金比羅「どふしてくゝあなた口ではそおつしやるが、その様には喰へぬ物じやて、彌「ナニくへ
ねへんことがある物だ、しかし費だから喰ひやせぬが、誰ぞ喰はせるとまだくゝいくらでもはいり

やす、金比羅「コレハ面白、モシ無様ながら何と私がお振廻申ませう、もふ夫れ丈あがつて御らうじませぬか、彌「喰やせうとも、金比羅「若しあがらぬとあなたのおたをれじやがよふふりますか、彌「そりや知れた事さト圖につて饅頭を取寄せ食ひかゝりしが、十ばかりくつて、跡はもふおくびに出る程なれど、おのれ金比羅鼻あかせてやらんと、むりに押込み皆くつてしまふ、金比羅「コリヤたまらぬゑらいくもふく私はないませぬ、彌「お前もやらかして見なせへ、こんな小さな物はいくらでも喰はれる、金比羅「イヤそふはまいりませぬ、しかし私も餘り残念な十ヲ許り喰べてみませう、彌「なに十位、二十喰ひなせへ、其の代り一つも残さず喰ひなすつたならば、饅頭の代は勿論外に百文、金比羅様へお初尾をあけやせう、金比羅「そりや有難い、てんほのかは、やつて見ませうト饅頭二十取寄せ、唯もじくと見てるたりけるがやがてくひかゝるとほつりく十ヲばかりくつてしまひ跡はいやそふなかほつきにてやうくと残らずくつてしまふ、彌次郎兵衛はあてが違ひ、彌「コリヤ恐れるく、金比羅「お約束の通り饅頭代は差し引いてお初尾の百文下さりませ、彌「今あけやせう、しかしあんまり見事だからもふ二十喰ひなせへ、今度はお初尾三百文あけやせう、その代り喰はねへとこつちや二百文取りつのだがどふだく、金比羅「面白く、何も慾徳腹の裂ける迄やつて見ませう、彌「サアく、今度は現金だ、お前も二百そ

こへ出して置きな、ト彌次郎三百文を突きだし、何でもお初尾の百文に利を付けて取るきになりよもやもふ喰はれめへと思ひこんで饅頭を又く二十取り寄せ、金比羅へ進めるやいなや此度は何の苦もなく忽ち二十喰つてしまひ、手早くかの三百文を著服して、金比羅「是は有難い、饅頭の代も宜しうお頼み申す、ハ、ハ、ハ、思がけないおさうさにあつかりましたハイゆるりとこれに、トおみき箱をせなにおひ跡をも見ずして出て行たるに彌次郎は呆れ果て居る、北「ハ、ハ、ハ、大方こんなことに成らふと思つた、彌「いまくしいめにあはしやアがつた、始めの百が欲しくなつて上乗りをした、ごう腹なト此内しもの方より駕籠昇ぶらく来りて、旦那方はお駕籠はいらしやりませぬか、北「かご所じやアねへ、ゑらいめに逢た、饅頭の喰こつこをして錢三百唯取られた、駕籠昇「ハ、ア今の金比羅奴じやな、てきめはあないな風をして歩きおるが、アリヤ大津の釜七といふゑらい手つまつかひじやけな、こんちうも坂の下で餅の喰くらで七十八とやら喰つたと見せて錢は人に拂はせ、餅をばみんな袂へさらひこんでうせおつたといふ事じやが、旦那は一杯はめられさつせへたの、ハ、ハ、ハ、此話の内、伊勢参りの子供兩人饅頭を三ツ四ツづ、手に持て喰ひながら此門口にきたりて、子供「ハイ旦那様拔参りに御ほうしや、北「コレ手前達やア其の饅頭を誰に貰つた、伊勢参り「ハイコリヤこの後で金比羅参りの人が袂から出して呉れました、彌「エ、そ

んなら彼奴めが喰つたと見せやアがつて、おいらをだまらかしやアがつたか、いまくしい、ほつかけて打ちのめそふか、北「い、はなおいらも神参りだ勘忍してやりなせへ、皆なこつちがま抜だからよハ、ハ、ハ、彌「それだつて餘りごうがにへかへる、北「夕の泊りでおれをゑらいめに合せた其の報ひだと思ひなせへ、ほんにい、業晒しだ、

盗人に追分なれや饅頭あんの外なる初尾とられた

彌「エ、面白くもねへしやれやんな、モシ、饅頭代はいくらだね、女「ハイ、このこらすべて貳百三十三文でムります、彌「せうことがねへトふせう、錢を拂ふと、駕籠昇「旦那まん直しに安くめしてくださいませ、彌「いや、駕籠昇「酒手で参りませう、彌「貴様酒を呑むか、駕籠「ハイ酒は好きで一升酒を下さります、彌「また酒の呑つくらしよふと思つてか、もふいやだ、サア北八出かけよふトこれより伊勢参宮の道へはいる。

○二葉 前のやうな狂歌をよみすて、興じ乍ら参りますと、北八が右側の茶屋の娘を見附けて例の通り目を細くしますから、彌次郎も鍵屋の小じよくめらも愛嬌らしいと申します、此小じよくと云ふのは小女で一才愛嬌があるなど相槌がつつて茶屋へ腰をかけると、金毘羅詣も休み彌次郎は小女の持つて来た饅頭を喰つて了ひまだ喰へると云ふと、北八がお前は雨風胸亂だと云ふ。此雨風胸亂とい

ふのは甘い物も辛い物もどつちも行けるとの意味でせうが、當時斯ういふ洒落を云つたと見えます。それから金毘羅詣と懸合ひの自慢話が始まり、到頭喰べくらになりまして散々に鬪弄されて饅頭を喰はれ錢を取られ、金比羅詣は是は難有い、饅頭の代は宜しく御頼み申しますと言つて行つて了つた。此處にある「御造酒函」と云ふのは、金毘羅詣が背中に負つて居る物で御造酒瓶を一對入れである函でせう。跡で彌次郎は呆れた。ブツブツ愚痴を云つてゐる處へ駕夫がブラ、來て今の金毘羅奴はあんな風をして歩いて居るが、彼奴は天津の釜七と云ふえらい手品師だ、此間も坂の下で餅の喰つくらで七十八喰つたと見せて、錢は人に拂はせ餅をば皆袂へさらへて失せ居つたと聞いて呆れる内に、伊勢詣の子供がまた饅頭を三つ四つ手に持つて喰ふのを聞けば、金毘羅詣の人が袂から出して呉れたと云ふので愈々悔しがり、追掛けて打ちのめさうとしたを北八に止められて業を煮やし「盗人に追分なれやまんぢうのあんのほかなる初尾とられた」狂歌を詠みました。是は盗人に追ひます。彌次は面白くも無い洒落だと仕方なしに饅頭代を拂ひ、駕夫が旦那まんなほしにやすく召して下さりませうと云つたは、まんが悪い、間拍子の悪くなつたのを直す爲に安く駕を乗つて呉れろと勧め、酒手ばかりで行くと云ふをまた酒の呑みくらをしようと思つてかと饅頭に懲りて此茶屋

を出て、是より伊勢參宮道へ這入ります。

○鳶魚 「かぎやの小ぢよく」はどうでせう。

○共古 中娘 女郎の小職位の處でせう。

○若樹 かぎやは餓頭屋だつたと見えます。此處の繪にかぎやの看板の有る家に休んで居る。是は茶

を出すから茶屋でせう。

○二葉 小ぢよくはお職でせうか。

○若樹 お職の小さいのですか。

○共古 お職の次に立つので、小さいのであります。

○若樹 小ぢよくと言ひますか。

○二葉 遊女の方で言ふ禿位を小職と言ひます



小ぢよくの圖

のでせう。さうすると是は小女を云ふ位でございませう。

○若樹 「雨風どふらん」

○鳶魚 「どふらん」は革靴であります。

○共古 「雨風どふらん」といふ物が有つたでせう。

○二葉 酒を飲んだり甘いものを喰つたり兩方行くことを雨風と言ひます。

○共古 それぢやさうかも知れせん。

○鳶魚 さうなると「どふらん」は此處ぢや入物といふことになる。尙あの方は雨風だと言ひます。胴

亂は今いまの信しん女にょ袋ぶくろだ。

○共古 「胴亂」は鐵砲の玉薬を入れる爲に和蘭人が持つて來たものと申しますが、後には大きい提

げものになつたのでせう。

○若樹 一體胴亂といふと小さいやうな感じが致します。チョツと提けた物を胴亂と言ひます。そん

な大きなものでないやうに感ずる。

○共古 雨風胴亂は合切袋のやうに何でも入れる物ぢやないか。

○二葉 「どふらん」と云ふ言葉は洋語ですかね。

○共古 イヤ歐洲語ではなからう。それこそ支那か何かを渡つて來はせんか。

○鳶魚 駕は支那の籠といふ字ですな、やはり三國傳來だ。

○二葉 九尾の方だね。

陸栗毛輪講、

○若樹 此時●に雨風胸亂といふ物が有つたかどうか、或は雨風胸亂と云ふ諺だけが有つて、實物はあつたか、無かつたか疑問です。

○共古 何しろ實物らしいね。

○二葉 本町の鳥飼饅頭は有りますか。

○共古 本町三丁目に在りました。

○仙秀 「鳥飼和泉無鳥飼、饅頭日々注文多、唯歡皮薄餡尤好、荷出蒸籠日幾荷」と江戸名物詩にもある位ですから名高いものでしたらう。

○扇松 文政五年版「江戸買物案内」には、

本町三丁目

田安一橋 御用御菓子司

鳥飼和泉掾

源轉房

と出て居ます。又天保十三寅年七十一歳になる孟宗樓竹子と云ふ人の隨筆寫本「むだがき反古染」の中に「本町三丁目とかひ和泉、かせいた、柿餅二品のかんばん、深川親和の書なり」とありま

す。「守貞漫稿」には享保中世事談所載として本町二丁目鳥飼饅頭の名が出て居ますから餘程古くから有つたものでせう。

○共古 「關の山」

○二葉 鈴鹿。

○鳶魚 鈴鹿だらうと思ひます、關から鈴鹿だから。

○共古 さうぢやない、相撲の方から來たのだ。相撲ではより上へ昇れない、關の山だ、それから上は無ゐもの。

○若樹 先生の考はいつも奇抜だな……。

○鳶魚 何か見たら有りませう。多分私は地名だらうと思ひます。だけれどもシツカリ言はれない。

○共古 大關まで行けば立身しないから關だ。

○鳶魚 「おたをれ」といふのは金が横になる、金が寝るといふことは、貸した金、取引の金が取れなくなつたと云ふ言葉で、それから轉じて今度倒れるといふ事になつたのだらうと思ひます。

○若樹 此處は一カ八かと云ふ處だ。

○鳶魚 諸分店處に「江戸侍などは、きる物も、てんほなをすく相の」、雛形ゐいと草に「當世は如

斯にてんほなるもやうをすけり、繪から邊形に有之事けつく貴し」とある、此のてんほが、後の傳法肌の傳法だらうと思ひます。女用智慧鑑に「京、ハレモノ、大坂、てんほ」とある、てんほ儘の皮といふのも腫物の上の皮であるから勝手な處置がされる譯である。儘になるといふ事は、自由といふ事で、一定の極り切つた形でなく、自由な形、自由な模様と斯う云ふやうに轉じて來るのでせう。

○二葉 「てんほ」は皆假名で書いてあります。

○鳶魚 其典據になる可きもの、女用智慧鑑は享保田の物であります。古い言葉でせう。

○共古 入らぬ事をするといふのを天狗の皮と言ひます。さう云ふ事でもありはしないかと思ふが、やはり分らない。腫物の皮をてんほの皮と言ふか分らない。

○鳶魚 それから「みきばこ」ですね。これは畫に描いてあるのでも後向きになつて居る。前はウラなんでございませう。

○共古 是は四角な徳利で二つあります。此位大きいのです。斯う云ふ備前焼の徳利で、それが二つ這入つて居つた。象頭山金毘羅大権現と釘彫りに書いてあります。備前焼で彫付けてあります。大小があります。此には竹の皮の内側、キルク見たやうなものがあります。之を貰つて來る。小さい

のはグツと小さいのを胸へ掛けて來ます。大きいのは掛けぬ。彼方へ參つて御札を貰つて來るものであります。もう一つ象の形になつて居るのがあります。是位のものに象頭山金毘羅大権現と彫付けてあります。是は丸で象が立つて居るやうなものです。一對でせうが、一つしか見ません。

○鳶魚 お神酒徳利ぢやないのですか。

○共古 酒は這入ります。平つたくなつて居ります。

○若樹 此處の計算は「今度はおはつと三百文あけやせう、そのかはりくはねへとこつちへ三百文とりつこだがどふだ」と言ふのは「今度は一ぢやない、今度お前が喰勝つたら前のと合せて三百文やらうと云ふ事でせう。



○鳶魚 さうでせう。

○若樹 今度の賭けは二百文の賭けだ。

○鳶魚 黙阿彌の書いた「霜夜鐘十時辻占」の中に金毘羅詣の繪がある。それは此箱の中に天狗の假

面が二つ這入つて居る。ア、云ふのがありませんか。

○扇松 鳶魚さんの「十字辻占」のお話して思ひ出しましたが、あの金助の臺詞の内に「久しい跡に新富座で高島屋がした金毘羅参り、其奴をフツと思ひ出し、大きな面が小道具に、あつたを無理に賣つて貰へ、急ごしれへに姿をかへ云々」とあります。これは多分江戸時代、市中を金毘羅参りの行装をして歩いた物貰ひを黙阿彌が寫したもので御座いませう。あの天狗の面を背負つた——私は慥か面は一つだと思ひました——金毘羅参りはよく台巻ものの挿繪で見る圖です。

○共古 天狗の假面を背負ふのは納めに行くのであります。

○鳶魚 歸りが徳利になる。

○共古 徳利と丸に金の字を書いた御札があるのが歸りです。

○若樹 行きと歸りと別だ。

○鳶魚 金毘羅詣の金助。

○松更 金毘羅様へは奥州からも一般に参詣したものでせうか。

○仙秀 金毘羅様は無いやうであります。重に船の神の信仰のやうであります。御船で往復の人は金毘羅様の御札を受けても來ます。

○二葉 其頃道中筋にこんな金毘羅詣があつたものと見えまして、葛唐丸の「耕書堂漫筆」に「東海道中筋に廻國巡禮や六部に姿をやつして旅人をなやめる追はぎ、胡麻の蠅など多く成り行きたれば油断ならじ、中にも金毘羅詣にはいろ／＼の悪事に長けたる者あり、切支丹の法を行ひて旅人の胸巻ぐるみ少しも知れずに奪ひ去る云々」と書いてある。葛唐丸は寛政九年六月に歿してゐますから、此隨筆はそれ以前のもので一九が文化三年出版の當時に、手づま使ひの金毘羅詣りをつかつたのも、當時こんな奴があつたのか、またはこんな隨筆などから材料を取つたものと思はれます。



○鳶魚 「霜夜鐘」の金助は悪者で、始終金毘羅詣ばかりして居た。私の親類だけれども放蕩者で仕様が無い奴、私の子供の時によく吉原へ這入つて何とも仕方が無い奴で、金毘羅詣をした、申譯が無い、抜詣りをする代りに最近まで金毘羅様へ行つた。

○仙秀 道樂を止めて……。

○鳶魚 道樂で始末が附かぬと逃げ出して金毘羅へ行つて暫く旅をして居る。僕の家ぢや其人の事を金毘羅様と名を附けた。今ぢや六十ばかりになつたでせう。一時あゝ云ふ風だつたから丁度伊勢の抜詣りみたやうに流行つた。金毘羅詣の流行つたのは何れ文化頃からでありませうから、此時分に抜詣的金毘羅詣は有つたでせう。

○若横 「おちゅうさ」といふ事は。

○鳶魚 「さうさ」は造の字に作の字で造作でせう。雑と書いたのもあります。それから「お初尾」は東京では「お初う」と申します。「初を」とは申しません。處ではお初穂に違ひない。稻の先きに出了た初穂を神に奉るのであるけれども、東京では其事を初穂とは言はない、初尾と言ふ、併し尾でもいけない。どつち道東京の人は尾とも穂とも言ひません。「う」です。

○共古 「ちやくふく」

○鳶魚 身體へ著けるものでせう。著も服も。

○共古 物を著腹するといふと、普通腹の字だ。盗むことになる。

○若樹 江戸の人は「お初う」と言ひますけれども、是は「お初穂」の穂を略して居るのぢやないか。

○靜方 今は「初穂」と言ひます。

○若樹 貴君はさう極めるが、下を略して言ふのでせう。

○共古 「三百文をちやくふく」と言ふのは取るのであります。尙前の字の通り使つて居るから眞面目なことであります。著物に附けることに相違ない。

○二葉 是で見ると掻浚つて行つたやうに見えます。

○若樹 一九が書いた時に、さう云ふ意味で書いて居るのでせう。胡麻化しをすることです。

○共古 「阪の下」は何でせうか、阪の下で餅をくふといふのは關と土山の間の坂の下でせう。

○若樹 五里ばかり先きにあります。

○共古 手品師のことは雲助などに聞込んだ話でせう。前に出ました「まんなほし」であります。私は此間チヨツと思ひ附きました。一體間を直すといふ事ではありますが、私は明治の初年に、近江の方を歩いた時分に、丁度方々の松飾が取れて了つた。松飾が無いのにチラホラ松飾の立つて居る處があります。それを聞きましたら其家は厄年に當る家だから、厄年を越す爲に松飾を特に再び立てるのだといふ話を聞いた事があります。それは疾くに忘れて居つた。それで此間ふとそんな事を思つて居ると成田の側へ参りました。あの先きの下總の香取の方へ行つて松崎と云ふ驛があつた。處

が松崎とは言はない、「まん崎」と言ひます。そこから考へましたね、此「まんなほし」も年に對しての松直しぢや無いか。「まん直し」といふ事はつまり年が悪いから松飾りを直してそれを松直しといふ言葉にして下總あたりで言つてはしないか、尙知りたと思ひます。若し松直しならば此「まんなほし」に能く當ると思ふので途中で考へたけれども、それは夫だけの話で決して確かといふ事は申上げられません。そんな事を思ひ出したから御話の序に申上ります。

○若樹 此處の「まん」はどうでせうか……。

○共古 仕合の直つたことを「まんなほし」と言ひます。普通金が入つた事を、まんが直つたと言ひます。

○仙秀 追分は中仙道と追分で落合ふ處でせうか。

○共古 是は伊勢の追分です。

○仙秀 明日は天津か、どうも氣が早いな。

○鳶魚 けふは難有うございました。御蔭様で……。

淺柄の賣

共古君淺柄は或は麻殻で麻の葉を煙草に代用した物かと疑ひを賣された。予も淺柄果して何の意たるを知れど、麻の葉を煙草に代用は本邦でも有り得る事と思ふ。本草經に麻の穂を多く食ふ人は鬼を見て狂走すと有れば、古來支那人は其の麻酔力有るを知り、投こそ麻酔麻痺の語も出たらしい。印度人は麻葉を乾かしパーンダと名け、雌麻の穂を乾かしガンジャと名け、麻の脂を採てチャラスと名け、孰れも嚼み或は煙草と混じ又混ぜずに喫煙して快樂を取る。土耳其埃及等の人が賞翫するハシシユは水と牛酪でパーンダを煮て作る處で、予之を常用する輩に聞たば、阿片を喫すると何物も小さく見えるに反し、ハシシユを吸ふと何でも大きく見える、例せば煉瓦一個を大山と視誤り其を飛越る連犬に勝を張り倒れ怪我する事少なからずと。古シシア人今のシベリア土人や南阿のホツテントット人何れも麻の煙を吸て醉夢を食るを知れりと云ふ。吾邦の麻は逆も熱地諸國の産程麻酔力に富み居るまいが、麻殻を煙草に雜て聊か其力を助けた位の事は有たかとも思ふ。

(九月十六日、南方熊楠)

夜 這

夜這を夜の字に書いたのは何時頃から始つたかと若樹氏は云はれたがこれも随分古からん、田中大秀の竹取物語解に詳解せり「よばひは古事記に佐用婆比に在た、し用婆比にありがよばせとある、傳によばひは萬葉に結婚と書り、靈異記には伉儷ともあり、言の意は呼より出たらむ、今世の語に婦をよぶと云ふも此なり、竹取

物語にさるときなむよばひとは云けると云らば殊更に興に作て云るなり、萬葉に夜延爲と書るも正字にはあら
ずと云れたり、伊勢大和の物語にはことに多く出たる言也、夜に隠れて遣わたると云意にはあらぬを、此は其
意なりと云なせるが興なり、然に玉葛巻にけさう人は夜に隠れたるをこそ、よばひとは云けれと見え、新猿樂
記に十三娘者云々近來有夜這人と書るは夜延と心得たる也さるは本は呼なれども夜延の意として附々しき事
さまなれば當時はやくしか心得たるなるべし、云々、又松屋筆記にも「夜這、室町殿日記廿の卷廿九丁才狂歌
所望之事條、紹巴、みちのくのしのぶその夜のよばひ」云々とあり、當時夜に隠れて遣わたる意に用あられし
を知るべし。(麥生)

小ぢよく

近松の絶賛脚本地に「親をだしに遣ふは、物どりの奥の手、ヤイ小童今度は是を喰ふかと、杵振上れば」と
あり、と云はれたのは男の子なり。(麥生)

天蓋

蛸を天蓋といふこと、魚の水椀花、雞の鑽籠菜と同じく、僧徒の隠語なり。京鹿子娘道成寺にも、僧が茹
草魚を天蓋といふことあり、又蛸は千手觀音ともいふ由なれば、頭の形容より來りしにあらすして、手の形容

より出でたること疑ひなし。されば此處も虚無僧の被み笠にはあらで「天蓋は誰が野送りぞ百合の花」(其角)
「大きなる葬禮を拵らへて引導の長老、旗天蓋をさしかけ」(西鶴)の天蓋なるべし。(麥生)

アイヌと六の数

静方氏の説に依れば、印度にては六といふ数を尊び具足の意味となす由なるが、アイヌも亦た印度人と同じ
く六を具足の意味とし縁起のよい數となす、シエー・パチエラ氏著アイヌ人及其説話に曰く「彼等の説話中多
く此數を反覆することあり、例せば彼等が祀饗の支度をなすときの如き、六袋の米を以て六樽の酒を醸し、其
の熟するに及んで、之を六器に移し、六人の酋長にて之を飲む、又潔めの禮は産後六日を経て之を行ふ、此他
舟の事を語るに九挺の櫂を以て六人之を漕ぎ、六神を載て航せる等又勇者ありて戰場に赴けるに六雲六霧の下
に六瀑ありて、六酋長之を守り居たり、勇者戦を挑みて其六人を殺せり、此處より進みて六男六女の鐵を著
せるに逢ひ尙ほ進みしに六男六女の鐵の鐵を著けしを見たり、勇者勇を鼓して三男三女合せて六人を殺せり、
云々、無論偶合なるべけれど、亦た奇とするに足る。(麥生)

第十回

五編卷之下

竹清 共古 松更 秋方 仙秀
扇松 静方 若樹 鳶魚

神風や伊勢と都のわかれ道なる追分の建場より左りの方の町をはなれて野道を通り行ほどにむかふより来る農行の馬によこのりしたる男かんばりこゑにて、うた「見てもぬくとそふなヨおかたとねたりやナア手をりぬのこの一まいねつこにつんぬけたア、エ、エ、彌「コウ見さつしアノ向ふからのつてくる馬士をおろして見せよふか、トわきざしをくつとぬき出してさしかつばのそでをまへのほうへおりて刀のつかにもちそへたるていに見せかけてゆくと馬かたやがて馬よりおりて行、彌「ナントどふだく、又向ふよりよこのりの馬士「ばんのとまりにヨいことてやめたナアなんぜいきやらぬ裸でおかたにあはりよかヘナア、エ、エ、彌「こいつもおろしてやろうエヘン、馬士「シツ／＼、トにはかにうろたへおりて行過る、彌「北八どふだきめうか、北「二本ざしを見ると乗打のできねへこたアみなしつてゐらア、彌「それだからよ、おれを侍だとおもひおつて、北「ばかアいふぜ、あとを見なせへ、侍「がふたりくるから、彌「エ、ほんにか、ト

ふりかへるひやうしにこのお侍にばつたり、北「ハイ是は御めんなさいやし、神戸へはもふどれほどござりやすな、此さふらひしゆは此へんの郷士と見へ、ソレ向の堤からつゝとそらへあがらせるともふ半道もあらずにな、彌「ハイありがたふござりやす、北「つゝみからそらへあがれたアなんのことだ、彌「がてんじやうしやアしめへし、ハ、ハ、ハ、時にこの川は何といふ川だ、はしばん「橋錢が貳文ツ、出ます、此川は宇都部川と言ひます、北「ソレニ文ツツ四文よ、

抜参りならばぶさをもうつべ川わたしの錢もかりばしにして

それより高岡川をうちわたり早くも神戸の宿に至る、入口に寶珠山火除地藏堂あり、

安穩に火よけ地藏の守らん夏のあつさも冬の神戸も

○共古 神かせや伊勢、神風は伊勢の冠詞で、これに種々な説があります。伊勢津彦といふ風を吹かせる神様でありまして、伊勢の神風を吹かせるといふ説を和學者が言つて居ります。思ふに伊勢と風との關係はそんなに古い神様のことではなからうと思ひます。それは風の宮雨の宮殊に風の宮の力といふものは偉いもので、蒙古軍が暴風雨に遭つて十萬人の中生きて還つた者が僅かしかないと云ふやうな關係から神の吹せたまふ風と歌にも詠れて多くあります。夫木集に神風のみにしみわたる伊勢のはまをぎ、其外多くあります。それから此「見てもぬくとそふなおかたと寢たら」の馬士唄

は、「ぬく」はぬくとまる温薫と同意で、温灰と同じ暖いといふ意、おかたと寝たら、オカタは倭訓葉に田舎には人の妻を稱する詞とあり、東鑑に大方とあり、女房官品に御方とあり、一體高貴の婦人の稱であつたが、民間でも女を云ふ稱になつたのです。手をりぬのこの一まいねつこにつんぬけた」血温たつぶりありさうなこぶとりの婦人と一ツ寝したもんだからあつくなつて、地太の手織布を「ねつこ」といふのは十分に全く「つんぬけた」ぬいでしまつたといふ。もう一つの唄は泊りに行かうと思つたけれども止めよう、なぜ止めるかといふと、裸で女に逢はれようか、博奕に負けて裸になつたから、裸ではお方の所へ行かれないといふ馬士唄です。この川は何といふ川だと訊いたら「宇都部川といふ川で橋錢が二文ツ、出ます」そこで「抜参りならばぶさをもうつべ川わたしの錢もかりばしにして」此「ぶさ」といふことは不作法といふ「ぶさ」ですが、抜参りであるならば橋錢もなく作法もなく、不作法に渡るのだけれどもといふのを「ぶさ」と言つたのではないかと思ひます。それから仕舞の「安穩に火よけ地藏の守るらん夏のあつさも冬の神戸も」、是は火よけ地藏といふものが安穩に守るといふ所から夏も守るし冬の寒中も守るといふ、寒中のことを茲に神戸と掛けたのです。

○竹清 神戸は字でかけば、兵庫の「かうべ」と同じですが、こゝでは「かんべ」と云ひます。此外

にも伊勢には方々に神戸といふ所があります。太神宮の神戸といふのですが、こゝが一番大きくて本多猗蘭侯の城下です。たしか一萬五千石でした、こゝの追分はまつすぐに行けば京へ行く、左へとつて行けば参宮道です。

○鳶魚 此「さしがつば」といふのはどんなものでせう。

○若樹 「脇差をぐつとぬきだしてさし、合羽の袖を前の方へおりてで、「さしがつば」ではない。

○鳶魚 あゝさうですか、それから二本さしを見ると馬を乗打が出来ないといふのは、是は何か掟かございしましたらうか。

○共古 馬上は馬に乗るだけの格式を有たなければならぬ。馬士は馬の口を取つて行かなければならない。その口を取るべき馬士が口を取らないで馬に乗るといふのを道中法に反して居るのです。

○鳶魚 侍に咎められるから下りたので、別に敬意を表した譯ではないのですな。

○共古 さうです。

○若樹 後に二本さしを見ると乗打の出来ねへこたア、みなしつてゐらアとあるのを見ると敬意を表したと取ることが出来ますが、どういふものでせう。

○鳶魚 それから空へ上るといふのは、處に依ると上に上るとか下へ下りるとかいふことを教へるが

是は何か方言があつたのではありませんか。

○共古 方言かも知れませんね。

○若樹 狂歌の「ぶさをもうつべ川」のぶさうつはどいふ詞でせう、不作法といふ意味でもあるんでせうか。

○共古 あるんでせうが能く知りませんね。

○若樹 不作法といふ意味で「ぶさ」をうつといふ意味がありさうなもんですな。

○二葉 蝮が天上するといふのはどいふ洒落でせう。

○共古 堤の上から上るとか山の上から上るとかといふことがあるから、堤の上から上ると言つたら斯う言つたのでせう。

斯くて此宿はづれなる茶店に寄りて休みたるに、馬士「モシお前方アおまにのつてくだんせんか、彌いかさま、戻りなら乗るべい、馬士「上野迄戻る馬じやわい、荷を付けて貳百五十くだんせ、北「二ほうくわうじん、百五十やるべい、馬士「けふは棒を持てこんわいの、爰から上野迄三里の所じや、白子へ壹里半、代りやつて乗ていかんせ、彌「兩人のられにやアいやだ、馬士「そしたらお兩人とも馬の鞍へくしつけて行まいか、此繩でしめりや氣遣ひはないがな、北「飛

んだことをいふそれじやア煙草も吞まれぬ、彌「そんならかはりく乗ろふが百五十でやるか、馬士「まよかし、やらかしましよト馬の相談出来て二人の荷をつけ此所よりまづ北八が乗つて出かける、彌「おらアそろく先へいくぞ、ソレ北八右の方へかしくよふだ、馬「ヒインく、鈴の音「しやんくく、此内向ふより来る男細綱の洗たくしたる引廻しを著て錢堂貫ばかりさしこの風呂敷に包み肩に引かけ草履がけにて來り此馬士を見つけて、「ヒヤアのしやア上野の長太じやないか、今のしがとこへ行た戻りじや、ゑいとこでいきあふた、馬方長太「ハイ權平次様かいな、コリヤさてわしや面目がないがな、こん「あろまいくある筈がないわい、晦日々に戻すはづをまんだびた錢堂文もいこさんがな、どふしさるのじやソレ聞わい、馬士「マアくこちへ来て下んせ、此馬士借金の斷りと見へてかの男を日あたりのよい所へ伴ひ己れも土手にゆうくと腰打掛けてそないにごうにやらかいてくだんすなマア此處へ掛けさんせ、イヤそこのねきには犬の糞がある、今日おいでるとしりおつたら掃除しておこもの、コリヤく權平様へ茶なと上んか、酒買てこいと云ふ所じやが、こは大道中でそれもでけぬくい、北「コリヤどふする早くやらぬか、馬士「ハテせわしない、ちと待んせ、今大事のお客がある、さてマア聞いてくだんせ、去年の冬から内のかゝめが病氣を煩ひおつて、がき共にはせちがはれる、雜役にさへ出やせん物を何じやる

とこうして下んせ、四五日の内には、ひゆつとこちら持ていこがな、



二方荒神の圖

いそないに云ふても、よふいこしやしよまいがな、大事
無い、もふ三年越と云ふもの貸た錢じや、利に利が
喰て二十貫餘りと云ふもんじやもの、いこすなく、其の
代りあの馬を取ていこかい、ハテまさかの時はのしが馬
を渡そと證文にかいたじやないか、そしたら言分ありや
しよまいがな、サアくもし馬の上な旦那さま今聞んす
通りじや借錢の代りに請取馬じや、どふぞこ、からおり
さんせ氣の青ながら、北ハアおいらも先刻にからじれ
つたくてならなんだ、ひよんな馬にのり合せたはこつち
の不仕合せ、併しまだ錢はやらず、是までのつたを徳に
してドレおりて行やせうかトかの權平に口をとらせて馬
からおりと馬士かけより「モシ旦那お前がおりては此
馬を取られる、マア乗てゐて下んせ、

わい、馬士ハテどないにもするわいの、旦那をおろしては氣の毒な、サアくめして下んせ、
北又乗のか、しつかり頼むぞと北八又馬に乗れば權平やつきとなりて、こん「コリヤく長太ど
ふしさるのじや旦那おりて下んせ、北エ、又おろすのか、イヤ貴様達やア己をい、てうさいほう
にする、下したり上たり足も腰もくたびれはてた、こん「それじやて私の馬じやどふぞかし下り
てくだんせ、北エ、面倒だト小じれがきてぐつと飛おる、馬士「はて扱おりさんせすとよい
がなコレ權平様こうして下んせ、私も途中じやしよことがない、せめて内へいぬまで待てくだん
せ、その代りこゝに此のぬのこを渡すに、こん「そしたらいんでわけ付るか、馬士「もふよいわ
いサア旦那めさぬかい、北「ナニ又のれかもふ勘忍して呉れ、おらア是れから歩いて行ふ、なん
ならせうく錢を出しても乗る事アいやだ、馬士「そふいはずと乗て下んせ、もふよいがな
サアく馬の口を取りてすゝむる故北八又仕方なく馬に乗れば、權平「サア約束の布子ぬごまい
か、馬士「イヤそないには云ふ物の是もうちへいぬまで待て下んせ、權平「イヤおのれもふ了簡
か、もふいやだサア早くやらねへかどうしやアがるのだ、馬士「旦那そう早くおろすとよいに、
權平「イヤおろすとゑいとは何でぬかすトまつ黒になり馬にとりつきにかゝる所を馬士突き退け



て馬の尻を思ふ様たゝき立ると馬はいつさんにかけて出せば北八うへにて直青になり大聲上げて、
 「ヤアアイ、助けてくれコリヤどふする、こん馬を逃しては成らん、チ、イ、ト追駈る、
 北八は後生大事に馬の鞍に取り付ても馬は暗雲に走る故北八飛下りよふとして鞍の繩に足がひ
 つかゝり眞逆様に落て腰の骨を打ち、北ア、痛い、誰ぞきてくれ、アイタ、ト一人もが
 きて苦しむていに馬士一散に駈付來り「モシ旦那おけがはないかな、ドリヤ、ト手を取りて引
 起す、權平は馬を捉へんとかけぬける、馬方は見てそふはさせぬと北八に構はず駈出して行、
 北「チ、イ待ちあがれ、おれをばいどいめに逢しやアがつた、ト小言を云ひながら起き上り股は立
 てども詮方なく、おつかけんには足腰がいたみ、やう／＼のことにて路みしめ／＼そろ／＼とた
 どり行つゝ、

借錢をおふたる馬にのりあはせひんすりやどんとおとされにけり

○鳶魚 「二ぼうくわうじん」を話して下さい。

○若樹 「二ぼうくわうじん」は馬の兩側に杵を著けて兩方へ乗るのでせう。其上、馬の上に一人乗れ
 ば三方荒神になるのです。

○鳶魚 「イマしやうちならんわい、そないにいふてもよふいこしやしよまいがな、その下の文句が是

は活字本には「でんない／＼」となつて居りますがね。

○若樹 原本には「でんない／＼」と書て、側に「大事無」といふ字が書いてあります。

○鳶魚 矢張でんない／＼とありますか。

○若樹 あります。

○鳶魚 尾張三河では「だんない／＼」と言ひます。淨瑠璃なんども「だんない／＼」とあります
 な。

○若樹 伊勢ではどうですか、作者は態々行つたのだから、多少は調べて居るのだらうと思ひますが。

○二葉 京阪では「だんない」と申すやうです。私の國などでもやはり「だんない」です。

○竹清 神戸あたりではどうですか、一九の耳の違ひか、板下の違ひぢやありませんか。

○鳶魚 それから此「てうさいほう」といふのは、名古屋市史に書いてある所に依れば、尾張公何代
 目かにお茶坊主の長齋といふ者があつて非常に氣に入られた。それが甚だ身丈の低い一寸法師みた
 やうな者であつたので、それを弄り物にしておもちやにして居つた。それで尾張方面では人のおも
 ちやになるのを「てうさいほう」と言つたと、名古屋市史で見た覚えがあります。

○共古 「てうさいほう」といふのは調劑坊のことではないか知らんと思ふ。調劑坊といふのは今日の

所謂藥局生ですな。藥局生は先生の命令通りに藥を調劑する。さういふ所から「てうざいほう」といふ言葉が起つて居りませんかと思ひます。併しそれは異説ですから判りませんが、その調劑する者を調劑坊



三方荒神の圖

○若樹 御説ではありますが、その調劑する者を調劑坊と呼んだことがあつたでせうか、私にはどうも……。

○共古 言つたかどうか判らないが、言つたのではなからうかと思ふ。それが我意を挟まれては困る、何んでも言ふなり次第に藥を調劑する様に人に勝手にされる者を云つたことと思はれます。

○鳶魚 それから唐人といふのは是は解らぬ奴のことを言つたのでせう。

○若樹 罵つたのでせう。

○鳶魚 言葉が解らぬから唐人めと言つたのでせうか。或は他に何かありませんか。

○若樹 それもありませうし、むづかしく言へば夷狄といふ意味があります。

○鳶魚 輕侮の念を以て。

○若樹 さうです。此處は斯うだけれども時代が下ると唐人より毛唐人といふ方が多いでせう。

○二葉 すつと初の方の「さしこのふるしき」といふのは普通の刺子でせうか。

○若樹 織が當つて刺してあるではありませんか。

○二葉 私の國などにはよくあるのですが、二枚か三枚ほどの木綿布の風呂敷を十文字とか碁盤の目とかに刺したのがありますが、それを言ふのではないかと思ひますが如何でせう。

○共古 私もさうだらうと思ふ。折返しを所を紺地を白糸で以て縋つてある。

○鳶魚 さうです。

○二葉 それからズット刺したのもある。中にはなか／＼氣取つた麻の葉の刺繡なんかがあつたり何かして。

○竹清 サア約束の布子ぬごまいか。東京語でいへばぬがねエかといふ所で、これは伊勢言葉です。

○共古 引まはしは宜いですか。

○鳶魚 引まはしといふのは坊主合羽のことです。

○共古 坊主合羽とは違ふ。引まはしは此節の外套みたやうなもので、あれが本當の引まはしです。

○鳶魚 さうですか——狂歌を一つ願ひます。

○若樹 貧すれば貧——貧乏すれば貧になる、その言葉を取つて来て、借錢をおうたる馬に乗合せた

のために、貧すりやどんと落されてしまつたといふのでせう。

行程なく矢走村といふに至る、彌次郎兵衛は神戸の宿はづれより先へ來たるが、彼馬のいさくさをば露知す、よほど先になりたるを不思議に思ひ此所に待合せたりけるが夫と見るより、彌「チ

ヤ／＼北八其なりは如何したのだ、北「イヤもふ話にもならぬ飛だ目に逢たと最前よりのいちぶ

しやうを話せば彌次郎をかしく、幸この所は鎌倉は權五郎が古蹟ありと聞て彌次郎兵衛取敢ず

權五郎ならねど馬士のいつさんにおつかけてのくかけとりの海

それより玉垣を打過ぎ白子の町に至り輪徳天王を伏拜みつゝ子安觀音の別れ道にて

風が孕む沖の白帆は親首の加護にやす／＼洶わたるらん

此宿を過て磯山といへるに著く此所に吹矢のいろ／＼飾付たる小見世の親仁往來を見かけて、「サ

ア／＼お慰みにやてかんせ、外題は忠臣蔵十一段續きソレ吹んせヤレ吹んせ、お當なさると忽ち變

る新板の上細工はこれじやく、北「ハ、ア何だ勘半おかる魂膽夢の枕イヤ這奴やらかして、よ

て、ト吹矢筒に矢を入れてフ、、引カチリガツタリ、彌「何だハアゑらい松茸が出たコリヤ可笑

しいハ、ハ、與一兵衛の子故の間の夜は何が出るだらうフツフツ、、引カチリカサ／＼／

／＼ヒヤアみこし入道ハ、、向ふのはなんだ、北八そつちへよりやと引除る拍子に足許に寢て

居たりし犬の足を踏む、犬「キヤアン／＼、彌「此畜生奴、ト吹矢の筒にてくらはしにかゝる、

夫はワンといつて嘔付く、彌「アイタ、、うぬ打殺すぞト追驅るはづみにどつさりと轉けた側

に落てあるは貧人、彌「轉んでも損はいかぬ愛に貧人がト拾ひにかゝると向側にある子供が糸を

引くと貧入はする／＼／／、彌「エ、忘々しい一番はぐらかしやアがつた、子供「阿房よッ

ハ、ハ、北「這奴はい、業晒しだサア行やしやう、ト吹矢の錢を拂ひ出掛る向に又煙管一本落て

有ゆへ、北「ソレ彌次さん又拾はねへか、彌「イヤもう其手は喰ぬアレ跡からくる親爺か拾ひお

るだらうト行過て返返り見れば彌より來る親爺かの煙管を拾ひ、懐に押込みさつ／＼と行過る、

彌「ハアだましでもなかつたさうな、北「ハ、ハ、お前豪氣にまんが悪いぜと打笑ひつゝ、行程に聽

て上野の宿に至る。

○仙秀 彌次郎兵衛が先に行つて居りましたもんですから、この馬士と借錢取のいさくさを些つとも知らなかつた。北八がテク／＼やつて來たもんだからお前それはどうしたのだ、どうして馬に乗つ

て来ないのだ、北「イヤもう話にはならぬ酷い目に遭つた」と最前の馬士と掛取の話をしました。彌次郎兵衛が可笑く此處は鎌倉權五郎の古跡だといふことを聞いて居るから、取敢ず一首詠んだ。「權五郎ならねど馬士のいつさんにおつかけてゆくかけとりの海」是は後三年の戦に鎌倉權五郎景政が烏海彌三郎に射られた矢が左の眼に中つた。その矢を抜かすに敵を追駈けて行つて討止めたといふ話から權五郎ぢやないがかけ取が馬を追かけてゆくの馬士が又追うてゆくのは丁度烏海彌三郎がにけてゆくやうだといふのでかけ取のとりから烏ノ海へ引かけて来たのでせう。それから次の狂歌は千安觀音の別れ道で詠みましたのですが、此千安觀音といふのは有名な觀音でこゝには七不思議があるといふ觀音様でございます。「風を孕む沖の白帆は觀音の加護にやす／＼海わたらん」船の帆が風を孕んで進んで行くのは、觀音様の加護に依て安々と此海を渡ることが出来るといふので、この風を孕む沖の白帆といふことを千安觀音の安産に掛けて、やす／＼と海を渡ると斯う言つたのでございませう。それから磯山に來ると其處に吹矢があつた。是は私には解りませんから抜いてしまひます。往來に煙草入が落ちてあつたからそれを拾はうと思つたら子供が悪戯をして居るのだ。斯んな悪戯はよく子供がするもんでございませう。そんな失敗をしたもんだから子供に笑はれた。其れから其吹矢の錢を拂つて出掛けると今度は煙管が落ちて居つた。北八が「どうだい拾はないか」

と言つたら前の煙草入で懲りたもんだから彌次郎兵衛が拾はなかつた。さうすると後から來た親爺が拾つてしまつた。そこで今日は馬鹿に日が悪いと言つて居る中に上野に著いた。其處までゞございませぬ。

○鳶魚 この福徳天王といふのは何んでせう。

○竹清 これは式内栗真神社の事で勝手明神とも出てゐます。久老のおとつさん橋村正身だの出口延經だのといふ學者が福徳は服織の訛で、吳織漢織を祀つたのだと云つて居ます。クルマは吳津女の轉なり、なんて言つてゐます。車明神なんて云ふのは方々にある様です。福徳天王の外に大寶天王つて云ふのがあります。これは素盞鳴尊とかいてあります。

○鳶魚 この吹矢は私の子供の時にもありましたよ。上に人形が飾つてあつて紐が引張つてありましてね。四角なものが附いて居るのを紐へ引掛けてある。環みたやうなものが附いてそれに中ると外れる。さうすると上から人形が下るので。からくり的といふのですね。

○若樹 中ると是が外れるのですな。すると上からニューツと下るので。

○鳶魚 つまり人形が出るのはお慰みなんでせう。景物を呉れたかどうか、それは判りませんがね。

○二葉 景物は出たやうです。尤も此時代は何うだつたか知りませんが、私の祖母が能く話しましたに



的リクラカ

は、私の家に奉公してゐた仲間の萬藏と申す者が浅草観音に参ると、何時も吹矢で、いろんな景物を取つて來たと申しました、其話では當時中々盛んであつたらしく思はれます。私の家が江戸詰から城附になりましたは安政の初めですから、其頃には確かに吹矢で景物を出したものと見えます。

- 共古 原本の繪が宜いですな。
- 鳶魚 それちや原本の繪を入れませう。
- 若樹 「はぐらかす」といふのは宜いですが、それは前に御議論がありました。
- 鳶魚 さうでしたかね。「其手はくわぬ」は、是は碁か將棋から來た言葉でせう。
- 共古 「いちぶしじう」といふのは。

○鳶魚 成程これは解りません。

○共古 一部始終——經卷か何かの一部始終。

○仙秀 始から終まで。

○共古 さうです、始から終まで——今の吹矢ですが、次に大人道か何か出るのは何んだらう。何か意味がないのですか。

○若樹 闇の夜で出るのではありませんか。

○共古 成程闇で出るのかね。

○鳶魚 無い。今日は大變な時化だ。それちやアどうか御願にお次を願ひます。

○竹清 いや中々不漁ぢやない。幸この所かまから權五郎が古跡ありとき々」とあるが、こんな所に權五郎はをかしい、景清だの景政だのつて目つかちや目くらの舊跡は中山さんや柳田さんの領分だが見逃しちやひどい。こりや矢橋といふ所で、こゝにかまから權五郎の塚がある。又東鑑にも見えてゐるさうですが、權五郎の守佛に大日様があつた、それを祀つた大日堂の迹といふ大日塚がある。小さな池があつて此池の魚がみんな片目だといふ話です。片目の魚は津の四天王寺にも他國にも方々にあります。こりや領分違だからやめます。「風をはらむ沖の白帆をくわん音の加護にやすく」

海渡るらん」これはやす／＼海渡るを産みわたるへかけたのです、此白子の観音は有名な子安観音で、例の子斷櫻つて四季咲の櫻だの人間の様に足を互ひ違ひに運ぶ雀だのつて七不思議があります。先の和尚は中々骨董家で私も一度遊びに行きました。此白子は御承知の染物の型紙が出来る所で、今は其學校もあるさうです。久住といふ姓が多いから大屋の裏任もこゝの出生と考へます。村田春門もこゝの出生です。からくり的は特に春先参宮道者の多いときに出来る店かと思はれます。まだあるけれど、あんまりひとりで饒舌る様だからやめます。

此處に此あたりの人と見へ羽織ばつちにて小野郎を供に連れたる男跡より來りて彌次郎兵衛に近づき「辛爾ながら貴郎方アお江戸で御座升か、彌「アイさやうさ、彼男「私は白子の先から貴郎方のお後に付てさんじたが、みち／＼の御狂詠を承はりまして、及すながら感心致しました、面白くことで御座ります、彌「ナニサ皆出放題で御座りやす、男「イヤ驚き入りました先達てお江戸の尙左堂俊満先生など當地へお出で△り升た、彌「ハア成程左様／＼、男「あなたの御狂名は、彌「わつちや十返舎一九と申やす、男「ハ、ア御高名うけ玉はり及ました、十返舎先生で御座升か、私し南瓜の胡麻汁と申ます、扱々よい所でおめに掛りました此度は御参宮で御座升か、彌「左様さ彼膝栗毛と申著述の事に就て、わざ／＼出かけました、こま汁「いかさまあれは御妙作でござります、

是へお越なさる道すがらも吉田岡崎名古屋邊御連中方御出會で御座升たるふ彌「イヤ東海道は宿々残す立寄所がござれども、参ると引止られまして饗應に逢まするが氣遣でござるから、皆直通に致しやした、夫故御覽の通りわざと僦服を著いたして、矢張同者の旅行同様に心安く何でも氣任に風雅を第一と出かけました、こま汁「それはお楽しみでござり升、私し宅は雲津でござります、どうぞお供致たい、彌「思召ありがたい、こま汁「まことに御珍客近所の社中共へもお引合せ申たい、いづれ御一宿をお願ひ申ませう、マア／＼不思議な御縁でよいところでおめにかゝつた、時にこゝが小川と申所、饅頭の名物一ふくあがりませんか、彌「イヤ饅頭には懲果た、直に参りませうト打連て此所を行過るとして、

から尻のうまい名代をたび人にくひつかせんと賣れるまんぢう

是より行程なく津の町に至る、前に高田の御堂右の方に見ゆる石井殿と云これなり、

おまな板なをしに鯉のひれふるはこれ佐用姫が石井殿かも

津の入口左の方に如意輪觀音堂あり、又かうの阿彌陀と云るもあり、此所は上方筋より参宮の人落逢所にて往來殊に賑しく中にも都方の若き人々小袖の上に揃へのゆかたを引ばり、つゞら馬を引ならべ、うた「チ、ト、ン、／＼、エイ、／＼、引ござれ都のなごころみせん祇園清水やれ音羽山

ヤア、とこなアヨウいやさア、ありやさこりや、コノなんでもせエ、引チ、チン／＼エ
 イ、引、ぢしの櫻に暮うちまはし霞がくれに物思はするヤアとこなアヨウいやさアありや
 ムこりや、コノなんでもせエリ、彌コウ北八見や、ごうぎに美しいたほが見へる、こま汁「アリ
 ヤ省京都の衆じや、あないに、立派にしてお出やつても、ねから錢は使やせんがな、京の人御無
 心ながら火一つ貸ておくれんか、こま汁「サア／＼お付なさいトくはへた煙管を差出せば京の人吸
 つけにかゝり、京「バツ／＼／＼、こま汁「まだ付んかいな、京「ハツ／＼／＼、こま汁「何
 じや御前の煙管にや煙草がついて無がな、ハ、ア聞へた吸付る振して人の煙草を呑のじやな、モよ
 さんせ／＼ノウ御江戸の先生、京の衆はあないにしわひのねつこじやわいハ、ハ、ハ、時に先生も
 ふ／＼ぶく下さりませ、彌「京の者をしわいと云がお前もさつきにから私が煙草ばかり呑でる、
 こま「イヤ私は煙草人を持やせんもの、彌「忘れて出なかつたのか、こま「ナニ忘もせんが、あり
 やうは全體が無のじやわいな、そのわけは私はるらい煙草すき、一日に十匁では足ぬ位じや故コ
 リヤ自分で買て呑ではたまらんと思ふて、それから煙草入は止て煙管ばかり持あるきおります、
 彌「そこで人のばかり呑なざるのだな、こま「左様じやわい、彌「そりや京の人へふくりんかけて
 御前があたじけねへと云もんだ、こま「ハアそふかいなハ、ハ、ハ、時にいかう遅なつた、ちと急ま

しよかト足を早めて行く程なく月もとに至り、此へんより烏の宮へ参る道有と聞て、

照わたる秋の月本ならば今うかれ参らん鳥御前に

○鳶魚 「ばつち」といふのはつまり絹で作つた股引といふことですね。別に他の意味は無い。あの言
 葉は仰やる通り舶来もんでせう。

○若樹 舶来もんか朝鮮語か知らないが、何しろ舶来語でせうね。

○鳶魚 舶来語ですな、日本語に「ばつち」といふ言葉は無ささうです。

○仙秀 此邊では一般に斯う言ふのでせうか、特に「小やらう」と書いてありますが。

○鳶魚 何でせう、地方では申しましたが、しよつちうの言葉ではない、どうかする機会に此青二才
 といふ場合に小やらうと言つたやうですね。——先生、俊満先生といふのを願ひます。

○共古 俊満は名高い狂歌よみで、窪氏、通稱、兵衛と云ふ、書を魚彦又重政に學び、尙堂又南陀迦
 紫蘭と云つて文政三年に死にました。

○鳶魚 是は繪を描く人でせう。

○共古 さうです、繪を描く、それから狂歌もやつた。

○二葉 狂歌は南陀迦紫蘭といふ。

○若樹 「南陀迦紫蘭」といふのは狂歌名で、天明時代の狂歌師といふ狂歌師を殆ど網羅した蜀山人所持の判取帳にも「南陀迦紫蘭」と出て居る。繪の方は俊満で名高い。

○二葉 俊満は山中先生も仰せられましたが、初め南畫の楮取魚彦に就て學び、後浮世繪師北尾重政に就いたのです。魚彦より春滿の畫名を與へられた。當時勝川春章の門弟と云はれるを厭ひ、春の字を俊に改めたと云ひます。

○竹清 俊満は元來塗師で沈金彫が得手で、それが本業です。此事は江戸趣味へ詳しくかいた筈です。

○若樹 「俊満先生は先達て當地へおいでございます」と書いてありますが、是は時代が合ふやうです。それは米庵先生の日記西征日乗、即ち先生が享和三年の八月に江戸を發足し長崎に遊ばれた歸路、翌文化元年十一月十日、四日市滞在中の條に、

十。(十一月)五山、原生來。余又揮筆。日暮高尾招レ余。與主人共至。初更俊満、五山來話。三更酒酣共歸。

十一。未牌後主人命レ與令レ乘レ余。與池五山、源八共送來。至橋邊爲レ別、欲レ過當田、日已沒。初夜至桑名。投宿逆旅。二更寐。易兵エ來。自四日市共宿。

十二日。曉色發レ舟。日午著宮驛。經鳴海宿池鯉鮒。此行與俊満共行。

とあります。文中の易兵衛といふのは俊満の通稱です。かういふ風に俊満は四日市から米庵先生と同行して居ります。此時米庵先生は廿六歳、俊満は四十八歳に當ります。時は文化の元年の十一月で一九の伊勢に遊んだのは翌二年の十月であるから、文中の「先達てお江戸の尙左堂俊満先生など當地へお出で御座りました」といふのも事實である。夫れを思ふと、此後の處に一九の眞似をして彌次郎兵衛が咎められたといふのも、一九の名を騙つた奴が事實あるのだらうと思ふ。それを一九が聞いて此趣向が出たのだらうと思ひます。

○鳶魚 是は作者部類の東西庵南北の所に南北の贗ものもあつたし、京傳の贗ものもあつたし、馬琴の贗ものもあつたし、種彦の贗ものもあつたといふ事が書いてあります。後の一九の話が贗種彦の事によく似て居るやうです。それから俊満も矢張事實談なんでせう——それから此狂歌は林君どうでせう。「から尻のうまい名代をたび人に」この狂歌は解らない——先生(山中氏に向つて)是はどうでせう。素敵に解らない。

○若樹 「から尻のうまい」といふのは馬に掛けたのでせう。たゞ其馬から喰付くとか何とか掛けて喰付かせんために賣れる餵頭。

○鳶魚 餵頭の看板に荒馬を描いてある、あれかな。

○若樹 それにしても可笑しい。

○鳶魚 マアそれにして置くか。

○竹清 虎屋の饅頭ッて有名なのがありましたが、はてな、ありや上野だつたか、小川と云ふのは上野より津に近い所です。

○扇松 高田のはどうか知りませんが、淺草で正月の十二日に鯉の料理をやる。

○共古 淺草の本願寺のと同じかね。

○扇松 昔は下總の方で鯉の「まないた」といふ事をやつて居つたのですね。それが高田の方へ行つた。

○若樹 どういふ事をやるのです。

○扇松 烏帽子直垂で廻で鯉の生作をする。

○共古 淺草の本願寺に飯沼の天満宮から献することにした。それが此方の淺草の本願寺ですよ。是はそれでせうか。飯沼の天満宮の神告で鯉を本願寺に上げろといふ御告があつたので御手洗を拵へて——全體御手洗でなくして鯉の生を買つて上げたところが、それはいけないといふので後に小さい御手洗を拵へて上げることにした。それで本願寺で式をしてやつた。

○扇松 つまり天満宮から親鸞上人様へ上げるのですか。それは江戸のでせうか、同じでせうか。

○共古 「おまな板なほしに鯉のひれふるはこれ佐用姫の石井殿かも」此狂歌は、宣化帝の二年大作狹手彦が詔を承て任那に赴くの時、船將に肥前を發せんとするや、彼の妾佐用姫別を惜み山に登り其船を瞻望して悲傷に堪ず、遂に領巾を脱してこれを麾く、見る者流涕せざるなしと、此山をひれふる山と稱し此所に佐用姫が石となりし石ありと、此傳説より佐用姫の領巾を鯉の鱗にかけ、姫が石に化せしといふ傳説より石井殿の石に縁語をとつた狂詠です。

○竹清 アツハツハ、こいつも好加減ですね。三代實録以來一身田です。いつ石井殿と改めたでせう。第一津から一寸見えやしません。一身田といふのは地名、そこに田山専修寺といふ真宗の一派の本山があるのです。

○扇松 なまじつかの事を言ふよりも宜しくお頼み申すより仕方がない。

○共古 雲津といふのは私は歩いたことがないから知らんけれども、この雲津といふ處は雲津川とて北伊勢南伊勢を此川にて定むと申します、此川口の村を雲津といひますときゝました。

○扇松 別段此處にはありませんな。

○若樹 このチ、チン、チン、は、やはり三味線を弾いて行くのですか、

○扇松 口三味線ではありませんか。

○仙秀 「揃へのゆかたを引ぱりつゝ馬を引ならべ」とあるから馬に乗つて大勢で唄ひながら三味線も弾いて来たのかも知れない。

○鳶魚 弾いて来るかも知れないね。お花見の格だから。

○共古 三味線は無いでせう。口三味線でせう。

○二葉 大阪から京都邊は、伊勢参りといふものが大變流行つたもので、随分大家の内儀や娘でも出懸け、途中も思ひ切つて洒落れのめしたものだと言ひましたがね。

○仙秀 従つて色々の失敗話があつたでせう。お半長右衛門なども此伊勢参りの時に石部の宿に泊つた事からアンナ芝居になつたのです。

○鳶魚 それはさうでせうな。この唄は音頭かね。「みやこの名どころ見せんぎをん清水やれ音羽やま」といふのは。

○仙秀 ヤアトコセは。

○鳶魚 あれは住吉踊だな。

○仙秀 全體のうたは大さう優美なもんだ。

○鳶魚 住吉踊の方はもつと荒つほい。住吉踊ですな。

○共古 音頭といふのは一體城普請の唄なんでせう。

○鳶魚 音頭といふのは色々な場合がございますな。きやり音頭もあるし地形の時の音頭とか、つまり仕事をやる場合に音頭を取る。

○共古 城普請の時に人足が材木を引張るときに音頭をやつた。

○仙秀 秋田音頭などは地方のきゝにくい言葉を直すために、上方言葉を移す目的で態と習はせたものだ。秋田邊では言つて居ります。

○鳶魚 川崎音頭は餘程古いもんでせう。兎に角伊勢に川崎と云ふ處がある。それから出たのでせう。――扇松さん、狂歌を願ひます。

○扇松 是は照わたる秋の月は鳥が浮かれて来るといふので、鳥御前といふ下の句が出て来たのでせう。

○共古 雲津には鳥の宮があるから出て来たのでせう。

○扇松 その前に月があるから「照わたる秋の月」と来て、秋の月から鳥が浮かれて来るといふので下の句が出たのでせう。

○共古 ちよつと地理が妙だが、今の狂歌は雲津の處に來てゐるやうです。雲津村から津へ入るのではありませんか。今の道中は斯んな處を知らませんから判りませんがね。

○若樹 高田から津に入つて津から雲津に行くのでありませんか。それは道中記を見ると判る。津の手前に雲津といふ處はありません。

○竹清 さうです。今の汽車で行つても一身田、津、阿漕、高茶屋、六軒、松阪、とくるので、雲津はこの高茶屋六軒の間です。それから月本といふと雲津の先になる。香良洲へ來るには津のはづれの藤枝から分れる。若し山田から歸りならば六軒から這入る。そりやどつからでも行けるでせうが、若し彌次郎が行くとすれば藤枝から行く筈です。月本は伊賀越の分れ路で大和街道とか何とかいふ大きな石の杭があつたかと思ひます。それを一九先生覚えてゐたのぢやないか。それから津の入口左の方に如意輪觀音堂ありとかいてあるが、觀音寺は町の真中で一番繁華の處です。國府の阿彌陀も同じ境内にある。

かくて雲津にいたり南瓜の胡麻汁己が家に案内するに是も旅籠屋と見れど折節相容もなく奥の間に請じ入れ彼是ともてなしければ彌次郎兵衛はあらぬ名をいつはりかゝる目に逢ふも一興なりと北八諸共心の内に可笑く變て湯にも入仕舞ひ怒々と坐しるたるに亭主胡麻汁出で「コレハお草臥

でござりましよ、ようこそお入下されました、併し折悪く此頃は時化で何もお肴がござりません、夫れ故何も御馳走がでけぬくいが、當所は至つて蒟蒻が宜ござりますから、マア是でも上げましょと存じて申付置きました、彌もふお構いなされな、イヤ御主人、此者は未だおちかつきにならぬけな、胡麻汁いかさまあなたは、北、私は十返舎の祝藏弟子一片舎南嶽と申します、不思議な御縁で御厄介に預ります、胡麻「ナニサとつとねからお構い申さんじやて、イヤ先生ちとくつろぎなされまいか、女御膳がござります、胡麻「早うあけんかい、ごゆるりと召上りませト亭主勝手へ立て行く、女膳を持出、彌次郎へ拒へて行、彌「満更でもねへの、北、美しい女だ、しかしこゝじやアお前も先生株だ、大人しくせざアなるめへト此内十一二斗りの小婢膳を持、北八に据へる、兩人箸を取、食かゝり見るに膳の向ふに平めなる皿の中に大福餅の大ききの如き黒き物を乗せ出せり、平には蒟蒻を盛り、味噌は別に小皿にあり、彌次郎小聲にて「ナント北八此皿にある丸い物は何だらう、北「されば何であらうかと箸にて突き見るに至つて堅く抉めども動かすよくみれば石なりけるゆへ膳を潰し、北「コリヤア石だ、彌「ナニ石なものかノウ女中、女「それは石でござります、彌「夫れ見なせへ、女「蒟蒻をお換なさります、彌「いかさまもふ少しト平を出して女の立て行を待かね、彌「コウ何と馬鹿々々しい、どふして石が食れるものか、北「イ

ヤ夫でも食れる仕法がありやアこそ出したであらふ、さつき當所の名物を上げませうと言つたア何でも此石のことだ、彌「それだとしてついで話にも聞ねへ、北イヤ待なよ江戸で團子のことをしていし」といふから大方コリヤア團子であらう、彌「ハ、ア成程其處もある、よもや本當の石じやアあるまいト又善をもつて突き見るに矢張右なり、これは不思議と煙管の雁首にて叩き見ればかつちりく、彌「どふでも石だく、コリヤどふして食ふものだと聞も業腹だが、どうもねつから合點がいかぬ、此内亭主勝手より出」是は何もござりません、宜しう召上りませ、イヤ石がさめは致しませんか、コリヤくぬくとい石を換へて上げ申せと言われて、二人共愈々よつとせしが、如何しても此石の食ひ様知らぬと言れんも業腹と、彌次郎兵衛これを食べたる貌にて「イヤもうお構ひなさるな石も最早宜しうござる、扱珍しい物を賞翫致しました、江戸表などで折節小砂利を唐辛子醬油で煎付るか、又は煮豆などのよふに致して食ふ事がござります、それに又、石塔杯も嫁を虐る姑婆などに食せたが薬だと申て食まするが、私も随分好物でござります、今度府中に逗留いたした時馬蹄石を齧ふにして振舞われましたが、ツイ私四ツ五ツ食ました所にお聞なさい腹が重くなつて立ふした所が一向立れず、仕方なしに兩方の手を棒縛のよふに致して擔いで買つてやうくと手水に行やした、御當所の石塊は格別風味もよふござりやすから又食過たらば御

厄介になるだらうと存じてお氣の毒でござりやす、胡麻汁「ナニその石を食りましたか、彌「食ました段か、胡麻汁「イヤそれは滅相かいな、石を食がるといふは怪からんお齒のお達者なことござります、併し火傷はなさりませんかいな、彌「それは何故な、胡麻汁「イヤあの石は焼石でござります、總て蒟蒻といふ物は水氣の取れぬ物でござりますから彼焼石にてお叩きなざると水氣が取れて格別風味が宜ござります、其爲の焼石でござります、食るのではござりませんわいな、彌「ハ、ア成程く聞えました、胡麻汁「マアそうして食つて御覽なされ、コレお鍋よ石が煖となつたら持來んかい、早うくと此内皿に石の焼たるを載て女持出引替て行く、彌次郎北八亭主が言葉の如くして彼蒟蒻を挟み件の石に打付見るにシウ引といふて水氣取れたる處を味噌をつけて食ふに風味格別軽くして言ん方なければ大きに感心して、彌「誠に珍らしいお料理御仕法感心致しました、そして斯様に同じやうなる石が早速によく揃ひました、胡麻汁「イヤ夫は豫ねて蓄へ置ます、お目にかけてませうト勝手に断入、吸物椀を入るやうな箱を持出「御覽下されませ此様に二十人前は所持致しておりますト彼箱を見するに二人は可笑く其箱の横のほうに何か書付てあるゆへ讀みれば、蒟蒻の叩き石二十人前と書付たり。

○鳶魚 二人は狂歌の先生のつもりで田舎の狂歌師に案内されてごま汁の家へ泊つた、其ごま汁の言

葉の中に「折あしく此頃はしけて何もおさかながござりませぬ」此頃は雨が多くて魚が獲れないといふのを「しけ」といふ。天候の加減といふことでせう。

○共古 濕氣のことをいふ。風雨が續いて漁がないことをいふ。

○鳶魚 その次の所で今度は北八がごま汁に挨拶をするのに「私は十返舎の秘藏弟子で一片舎南鯨と申します」と言つて居りますが、この一片舎南鯨といふのは本當にあつたやうでございます。それは此本に依つて十返舎の門人であつたといふことが確かめられる。他のものには一片舎南鯨といふのは私は浅見でして在つたといふことは存じませんが。

○若樹 何かに見えるのですか。何時頃の人で何かの著述でもありますか。

○鳶魚 それで一片舎南鯨は字が違つて居ります。著述の方は龍といふ字になつて居ります。その著述は寛政十二年に「間合俗物暨問答」といふ二冊ものがある。青本年表の中に書いてございます。その南龍の著述の一番仕舞に「なべて世の見る人ゆるせ今年より拙き筆に染める言の葉」といふ狂詠がありますから、多分これが初めての著作でせう。之を調べて見たら北八のモデルがよく分るであらうと思ひます。是は皆さん御存じであらうと思ひますから、どうか御教を乞ひます。私は唯それだけしか知りません。それから此處に先生に化けて這入つたことは、先刻林君が米菴の日記をお

話になつたときに、私がお提灯を致した所で申しましたから申しませぬ。さうすると其次にある事は此「やけ石」ですけれども、是はどうもお目に懸つたこともなし、聞いたこともないから分りません。其他には何も見付りません。宜しく諸君お願ひ申します——それから一つありました。北八の言葉の中に「イヤまちなよ江戸で團子のことをいしく」といふ、是は女の言葉で、倭言葉なんといふ本にございますから此處に書いてある。是は女の言葉だといふことが書いてあります。

○竹清 焼石の話は一向知りません。川喜田君に尋ねたがやはり知らぬといひます。唯私の叔父が松阪の者で、宮川あたりでさういふことをしたといひましたが、果して伊勢の風でしたか。

○共古 女が膳を持って出て来ると彌次郎兵衛が「まんざらでもねへの」、是はどうです。

○鳶魚 意味は分つて居りますが、どう云ふ所から出て来たか解りませぬ。

○共古 意味はどうです。「まんざらでもねへ」といふのは悪い方が含んで居りますか。

○鳶魚 イヤそれ程でもないといふことに使ひます。

○若樹 十人並。

○鳶魚 十人並といふ程でもない善い方でもない。悪い方でもない。それ程でもない。

○共古 少し打消が附いて居りますかな。

○鳶魚 さうです。どうしてもさうですか。

○若樹 「先生かぶだ」是はどうです。

○共古 それから秘藏弟子といふのは。

○鳶魚 秘藏弟子といふのは大事な弟子といふのですな。

○共古 それは自分で言ふのですかね。自分から自分が可愛がられて居るといふことを。

○鳶魚 普通は自らさういふ事を言ふ者はありませんな。

○仙秀 けれども地方へゆくと可なり法螺を吹く先生がありますね、某先生の高弟だなんて。

○鳶魚 けれども秘藏弟子とは言ひますまい。それでは餘り味噌臭い。

○若樹 それは言はない。推薦状には書くけれども——一片舎南鏡といふのは年表に書いてあります

か。

○鳶魚 書いてありません。

○若樹 さういふ事に關係が無いではないかと思ひます。

○鳶魚 さうかも知れません。

○若樹 さういふ事に關係無しに唯筆の拍子にヒョット書いてしまった。

○鳶魚 偶々類似の名前があつたといふことも知れませんが。

○仙秀 一片舎南鏡といふのは前の十返舎一九といふ事から何となしにヒョット此處に出て来たので

はありませんかな。

○鳶魚 そこになると唯想像だから、さうかも知れません。

○若樹 一片舎南鏡の歌があつても、それは架空の人物で、實際にあつたかどうか、それは考へもの

ですな。

○鳶魚 さうです。あつてもそれが弟子であつたかどうか分りません。

○若樹 まだ類似な名が澤山ありさうですね。

○鳶魚 さうですね。

○若樹 「今度府中に逗留した時」といふのは何處の府中でせう。

○鳶魚 やはり駿河でせう。——どうかお次を。

此内近所の狂歌詠追々に來りて、「御免下さりませ、胡麻汁」ヤこれは小鬘長元成様、サア〜
どなたもこれへ〜、「ハイ〜」是は十返舎一九先生始めてお目に掛りました。私は富田茶賀丸
と申ます、次は反齒日屋呂、水鼻垂安、金玉の嘉雪、孰れもお見知下さりませ、こま汁「時に先生

お八釜しうは御座りませうが、へおむつかしかろふと云ことをおやかましかろふと云國言葉也。扇面短冊などお願ひ申たいが何なりともお持合せのお歌をおした、め下さりやせト扇短冊をつきつけられ、彌次郎しかつへらしく取上げて、何の出版題やらかして呉れんと、いろ／＼考へてもわが詠し歌には是ぞと云歌もなく、早速に思ひつきもなければ、これまで聞き覚えのたりし人の歌を書てさし出せばごま汁これをいたゞき見て「これは有難ふ御座りますお歌は、ほとゞぎす自由自在にきく里は酒屋へ三里とうふやへ二里、ハ、ア成程どふか聞た様なお歌じや、きぬ／＼の情をしらば今ひとつうそをもつけや叩六ツのかね、イヤこれは千秋庵大人のお歌では御座りませんか、彌ナニ私しがよみ歌、しかも江戸中大評判の歌、誰知らぬ者はごさらぬ、ごま汁「イヤ左様じやあるが先年私しお江戸へさんじた時三陀羅大人、芍薬亭大人などにもお目にかゝりまして、即ちお短冊もいたゞいて歸りましたが御らんなされ、其屏風に張つて御座りますト云故彌次郎振返りて見れば成程屏風に三陀羅と書て右の歌あり北八おかしく氣の毒なれば、「イヤ私の先生はそゝつかしいが癖で人のうただの、わが歌だのといふしや別は一向御座りやせぬ。コウ彌次さんイヤ先生是まで道中筋でよみなさつた、御前の歌を書なさればいゝにトきを付られて彌次郎面目なけれどおしのつよい男なればいけしやア／＼として跡の短冊へは道中筋の歌をかく、此内北八も手

持なければ張交の屏風を見て「ハ、ア戀川春川のゑがある、モシあの畫の上にある讀は何で御座ります、ごま汁「イヤあれは詩で御座ります、北「こちらの布袋の上にある詩は誰が致したので御座ります、ごま汁「イヤあれはごでござります、澤庵和尚のト言故、北八心の裡に、こいついま／＼しい奴、賢かと云はしだと云ふ、詩かと云へば語だと云、何でも今度は一ツよけいに云てまごつかせてやろふと、そこら見まはし、北、モシおかけものゝ畫の上に書てあるは、おはかた六でござりませうな、ごま汁「六か何か知りませぬが、あれは質に取たのでござりますト此うち勝手より女たち出「ハイ髭つら様からお手紙がさんじました、胡麻汁「ドレ／＼何じやあろなト此手紙を開きて、たか／＼と讀て見れば「鳥渡申上候只今東都十返舎一九先生私宅へ御著有之候勿論名古屋連中并に吉田大獄よりも書狀参り申候早速貴公御噂も致し置候事故追付貴宅へ同道参上可致候 間右御案内申入置候以上

○鳶魚 林君、千秋庵といふのは誰です。
 ○若樹 是三陀羅法師のことです。頭の光の弟子です。
 ○竹清 短冊などには三陀羅とかいてあります。
 ○鳶魚 ほとゞぎすの歌は三陀羅ですか。

○共古 「きぬぐ」の情をしたらば今一つうそをもつけよ明六ツの鐘」今の鐘では面白くないが、昔の鐘だから面白いね。

○若樹 明六ツの鐘をもう一つ打つと七つだ。七つは今の午前四時だ。そこで、きぬぐ」の情を知らばでせう。

○共古 さうです。きぬぐ」のなさけなんて面白いね。

○竹清 三陀羅は知りませんが、此芍薬亭長根の門人は津松阪に多かつたやうです。煩はしいから名はあけませんが大分あつた。

○若樹 富田茶賀丸は「とんだ茶釜」から出て居る。それから反齒口屋呂は三番叟の拍子から出て居るのだらう。

○鳶魚 金玉の嘉雪は。

○共古 雨が降るときに。

○扇松 犢鼻褌が濕つたときに。

○鳶魚 雨が降ると犢鼻褌が濕つほくなる。

○扇松 是は「いんきんたむし」でせう。

○鳶魚 僕は「はなの雨いんきんたむしかきこはし」といふ名句を持つて居らアね。

○若樹 「こちらのほていのゑのうへにある詩」といふのは是は狂詩でせうね。

○共古 是は何か落語にある。

○扇松 天明頃の小話にありますな。

○竹清 こばなしはいやだね、落語でわかつてるるぢやないか。

○鳶魚 現在でも落語家がつて居りますな。

○共古 「名古屋屋連中並吉田大獄よりも書状参り申候」とありますが、この吉田大獄といふのは何でせう。

○鳶魚 吉田は吉田でせうか、大獄は何でせう。

○共古 遠くへ持て行つて言つたので大獄は近江の比叡でせう。

○若樹 是は吉田の大獄連中とか何とかいふのではないのですか。

○竹清 無論人の名でせう。

○鳶魚 あゝいふのは両方から来るでせう、送る方と迎へる方とは、さうして打合せをして何月幾日先生は何時といふことを言つてやる。

○共古 名古屋連中も来るし近江の方からも来るし是は分らない。吉田邊には大獄といふ處は無い様に存じます。戀川春町、是は松平丹後守の留守居で倉橋壽平、狂名酒の上の不埒といつて小石川春日町に居たから戀川春町といつた。

○若樹 この「戀川春町」はこひかではなく、こひしかははるまちと讀むのが正しいのでせう。
○鳶魚 繪も小説も春町。

○若樹 さうです。
○共古 春町は勝川春章の弟子ですか。

○扇松 さうです。
○共古 それから春を取つたといふ説があるんだな。

○扇松 何かに書いてありました。
○若樹 三陀羅の「きぬく」の狂歌は旨いが、「ほととぎすじゆうじざい」の方は餘り名歌とも思へませんな。

○共古 さうです。兎に角段違ひですな。
○仙秀 それから芍藥亭大人、これは菅原長根のことで通稱は次郎右衛門、本阿彌光悅七世の孫で、

幕府の腰物奉行支配腰物鑑定をやつて居つたさうで、別號を潛亭といひ、また下谷三枚橋に住まつてゐた所から三樹とも號した。狂歌は岡持の弟子で淺黄の裏成の狂名をゆづられました。後に芍藥亭菅原長根とよびまして、二代目喜三三の戲號で小説類をもかきました。弘化二年二月十日に歿しました。年七十八、墓は谷中の三崎町妙法寺にあります。三陀羅法師、千種庵などに比べますと、此人は後輩ですが、一九が特にその名を入れたのはどういふわけか、私と思ひますには此芍藥亭は膝栗毛の四篇ノ上と五篇追加の序をかいてをります所から、或は一九と親交があつたらう。恐らく序文をかいてくれたおうつりのつもりで、其人の名を本文の中に入れたんでせう。

○鳶魚 二葉先生、次を願ひます。
胡麻汁「コリヤどうじやいな、頓と合點のいかぬ、ノウ先生唯今朋友どもから斯様に申越ました、が、定めて這奴尊公のお名前を騙つて参つたものと見へる、幸ひ追付これへ参るとあればナンとお逢ひなされて慰んでやろじやござりませぬか、彌「さて、大變なことだ、いやはや横著な奴もあればあるものだ、しかし私は逢ひますまい、胡麻汁「なんぜ、彌「イヤどふか先刻から持病の疝氣が起りました、左様でなくば其贋者致方がござるものを、さて、困つた物だと思ひ掛なく此仕儀に及び流石の彌次郎情氣かへりてゐる、亭主胡麻汁を始め皆々先刻より彌次郎が振

舞台點ゆかずと思ひし所、扱はと心付這奴化の皮をあらはしてくれんと互に袖を引合ふて、ちやが丸「何と先生コリヤ面白」ことができました、御不快ではござりませうが、是非その贋物にはお逢なざるがようござりませう、彌「ハテさて困つたことを仰しやる、たれ安「イヤ時に先生のお宅は江戸表では何處許でござりますな、彌「されば何處でござつた、ヲ、それ／＼鳥羽か伏見か淀竹田、かゆき「山崎の渡しをこへて與市兵衛とお尋ねあれか、おきやアがれハ、ハ、胡麻汁「イヤたしか貴客方のお笠に江戸神田八丁堀彌次郎兵衛と書付けてありおつたが、その彌次郎兵衛様といふは誰さんの事じやいな、彌「ハア聞たやうな名だが誰であつた、ヲ、聞た筈だ俺が實名を彌次郎兵衛といひやす、胡麻汁「ハ、ア常にやまいらぬ、ちよつ／＼とまいらぬ彌次郎兵衛でござるといふは貴客のことであつたか、彌「さやう／＼、ちやが丸「時に彌次郎兵衛先生其贋者の一九を今に連れてこまいかい、彌「イヤ、俺はもふ出立致そふ、胡麻汁「何故今頃何時じやと思ふてもう四ツじやがな、彌「さればの事、俺が疝氣は變つたことで此様に畏まつて斗りおると段々悪くなる、何時も夜分戸外を歩いて冷さへすりや直に宜なるから、胡麻汁「ハ、アそれで今立ふと云ふのか、そふさんせ／＼假令此方さんがるようと云ふても此所にやもう置やせんのか、早う出ていかんせ、ようも人の名を騙つてだまさんしたの、彌「ナニ騙つたとは、胡麻汁「ハテ騙

つたわいな、ほんまの十返舎先生は名古屋の川並連中から狀がついて来てありや違ひはないがな、たれ安「始めから此方さんの不都合たら／＼、此様なことであるふと思ふた、此方からほからかし出されぬ内に、ちやつ／＼と出て行かんせ、彌「何だほかし出すコリヤ面白、北「コレサ彌次さん力んでもはじまらねへ、全體お前の思付が悪い、サア爰を出て何處ぞ木賃にでも泊りやせうコリヤアどなたも重平御免なさりやしト北八が段々の詭言に亭主腹は立ども可笑さも半分、皆々この二人がほう／＼の體にて、そこ／＼に支度し出行態を見送り、家内の者ども手を打叩きどつどつと笑ふ、彌次郎は始終膨面して力味返り出行可笑さ、北八あとに随ひ、

いとほまじとほり一べん旅の恥かきすて、ゆくあふぎたんざく

○二葉 ども別に無いやうでござりますが、此中に「ちよつ／＼とまいらぬ彌次郎兵衛でござる」といふのがありますね、是はどうも分りませんが、何かチョツ／＼と泥坊でもしさうなやうな言葉に使ふのですかな。

○扇松 なにか物貰の詞でせう。

○鳶魚 「ヲ、それ／＼鳥羽かふしみか淀竹田」、是は確か淨瑠璃の忠臣藏五段目か六段目かにある文句ですね。

○扇松 こゝです。六段目の勘平が昨夜舅與市兵衛にあつたといつたからお婆アさんに問詰められて「烏羽か伏見か淀竹田」と曖昧な返答をしたのを取つたのです。

○仙秀 それから其次の「やまさきのわたしをこへて與市兵衛」是も五段目の文句で神崎彌五郎の出會の時に勘平の宿所を尋ねられた、其節に勘平が斯う答へた。是は兩方へ組んだのでせう。

○共古 何でも猿曳か何か来たのでせうな。——それから「ほうくくのてい」といふのはどうです、
○鷹魚 太平記などにもやはり這うくと書いてあります。是は唐人踊の影響でありませんか。

○共古 私の説は大名や貴人などが人を制するときホウく〜といふ。此ホウく〜といふのは人を制する言葉で、制された人は路を避けて逃げて行くんですな。それが當り前だ、それから出た言葉な

んで「ほうくくのてい」といふのは大名からホウく〜と言はれたときに路を避けて逃げて散るといふ言葉から出たのではないかと思ふ。

斯く詠て後は笑を催し出かけたれども、はや亥の刻過ると見へ家並に戸を閉てひそまり返り、いづれを旅籠屋とも見へ分たず、宿るべき方もなくして、うか〜と辿り行く程に、あはや軒の下の犬共が起立て吼かゝれば、彌次郎兵衛きよろ〜して「エ、この畜生めらア、わるくふさきやアがるト石ころを拾ひて打付れば、なほ〜犬はおこり立て取まく、北かまいなさんな、犬迄が

馬鹿にしやアがる、チャ彌次さんおつな手つきしてお前何をする、彌イヤ犬に取まかれたときは宙へ虎と云ふ文字を書いて見せると犬が逃ると云ふことだからさつきから書てゐるがねつから逃やアがらぬ、こいつらア皆な無筆の犬だそふなシツシ〜トどふやらこうやら追ちらかして行ともなしに思はずこの町を出離て、彌コリヤつまらね者だ、まよ北八夜どふし歩こうじやアねへか、きついこたアねへ、やらかせ〜、北お前とんだ事を云ふまだ九つにやアなるめへ、又どこぞで泊りてへものだ、彌夫だとして今頃に起てゐる内はなし、イヤ有ぞ〜はるか向ふに火が見へる、アノ火を自當にいつて宿を頼まふ、北ヲ、サ夫がい〜、しかし挑灯の火じやアねへか、彌とんだことを云ふ戸の隙間より洩る火だ物を、北ほんに家の内でたく火だ、何でも是非あそこを頼んで宿りやせうト足に任せて急ぎ行、やがてそこに近づきたるにかの目あての火はおのつとだんノ、先へあゆみ出して行體に驚き、彌ヤア〜、あの家がどふか歩いて行よふだ、北ほんになアこいつはおかしい、彌イヤおかしくない、氣味がわるい、どこの國にか家があるくといふは只事じやアねへ、北ナニサこれも赤坂の泊り位で皆な狐めがすることだろ、弱味を見せると尙つきあがりをする、構う事アねへさつ〜とあよびなせへ、ト態とりきみかへつて足早に、くだんの火に追付、くらまぎれにすかしみれば、いざりの車なり、小屋の内

には火を焚、茶を湧しながら車を押して行のなり、二人はおかしくこゝをすぎ行に折ふし月は出たれども、草木も眠る真夜中のうそ淋さ、跡にも先にも只二人、上邊は我慢につよ張ても、心は至つての臆病者、こはく、通り行跡より一人来る者有、彌次郎振り返り見れば小山の如き大男長脇差を腰に横へ来るは唯者ならず、われ、をめぐり付来るならんと北八にさゝやきて彌、コウ後からおかしな奴が付てくる、ちといそひでやらかそふト足早に走れば跡の男も又走る、北、待なよ春口がはづれそふだト小便をすればその男も立止り待てるゆへ彌次郎聲をかけ、彌、モシお前今頃どこへお出なさるトこはく、云へば、かの男ぞんじの外やさしき物云にて「ハイ、わたしは松坂へ戻る者じやがな夜さり一人こはふて、モどふしよいなと、思おつた所へお前方が通らぬす故、コリヤよい連じやと後からお二人を心便りに参じたわいな、北、イヤお前なりには似合ぬ弱ねを出しなさる、そしてそんな長い奴を差てるながら、かの男「ハ、ア是かいなコリヤ後で拾ふて来た竹切じやわいなト腰から抜いて杖について行、彌「ハ、ハ、脇差ではねへの、私らア又お前がこわくて、先刻にからコリヤひよんな奴に見込まれたと思つたが、マアお前臆病者でわつちらも落付た、北、もふく、これから三人と云者だから大丈夫だ、男「イヤ、此先にとつとゑらいことがあるがな、彌「なにがゑらい、男、聞んせ、私や今日江戸橋迄いかへりに、きつうおそな

つてな、いんまのさきこの松原にきおつたところが、なんじややら向ふに大きな白い物が立てるおつて、それがあつちへいたり、こつちへきたり、ぶうらりくもうくく、私やこはふて、コリヤ死かと思たわいな、そじや物をどして向ふへいかれる物で、コリヤならんわいと後戻りして、どふぞよい連がほしいと思つた所へお前方にいき逢たのじやわいな、彌「エ、其白い大きな者がゐたと云はどこらに、男「イヤぢつきに此先じやわいな、北「エ、なにが出る者だ、おいらが先へ行ふ、おれについて来なト打つて此松原を一丁ばかり行たる時、男「アレ、向ふにア、コリヤたまらぬ、トがた、ト、慄ふ、二人もあやしく、はるか向ふを月明に透し見れば、何とも分らぬ白き物およそ一丈ばかりも高く街道一杯にひろがり立てる様子、是は何だろふと、先へも進まず立止り見れば又消るよふにばつたりなくなるかと見れば、又すつくり大きくなつたり、ちいさくなつたりその形わからず、彌「マア何だろ、北「すそがねへから亡魂に違はねへ。

○扇松「犬にとりまかれたときは宙へ、虎といふ文字をかいて見せる云々、是は安永五年版風來作の落語鳥の町に無筆の犬と題して書いてあります、これとそつくり同じ言葉があります。

犬のほへるとき虎といふ字を手に書いて握つて居れば、ほへぬと貴様に聞いて大きな目にあつた「何んとしたぞ、ゆふべ夜更けて歸るとて、何が犬めがほへかゝる所へ、にぎつた手を出したら

それ此様にした、か喰ひ付かれた「ム、そりや無筆の犬であるふ。

○共古「ひよんなやつに見こまれた」といふのは。

○若樹 是は前にありましたな。

○共古「とつとゑらい」といふのは、斯んな事よりもつとえらいといふことですな。

○扇松 江戸ばしといふのは何處らです。

○竹清 津のはづれから東へ行く所に架かつてゐる橋です。橋を渡つて行けば白子、左へ行けば一身

田橋本關の方へ出ます。

○若樹「呑口がはづれそふだ」といふのは古い言葉でせうか。浮世草紙あたりにありますか。

○鳶魚 どうですか知りません。

○若樹 江戸言葉でせうね。

男「ア、アレあれじやものどふして先きへ行かれましよいな、彌「正體が分らにア猶ほ氣味が悪いコリヤ行かれぬ跡へ戻ろふ、男「俺もお前方を便りに又參じたが、どふも怖ふて行かれんわいな、跡へ戻つて又連の人が出来おつたら、又爰迄來うわいな、二三度もそないに往たり戻つたりしおつたら丁度夜が明けよふわいな、彌「何でも白装束だから何ぞの亡魂に逢へはねへ、北「ア

レ、青い火が見へる、男「エ、どふか此方へ來おるよふじや、彌「コリヤどうしよふととも先へは往れぬ、ト三人乍ら色青さめてがたくとふるふ折柄、向ふより人の來ると見へ、彌「戀の重荷をナ積だらおまにへ幾駄あやら知れぬくひナアエト唄ひ乍ら來るは助郷の人足四五人、彌「モシ、お前方ア何方から來なかつた、人足「ハア俺ら此の近在じやが役に當りおつて津まで行きおるのじやわいな、彌「ソリヤアい、が此所へはどふして來なかつた、人足「ハテ此な人は其役で津へ往くのじやといふのに、彌「但しお前方も幽霊じやアねへか、どふも人間なら此所迄活て來よふ筈がない、人足「何言はんすやら根から葉から分らんわいな、北「イヤ向ふに化物があるのじやしてお前方ア其前を通つて來なかつたといふ事さ、人足「コリヤ此方さん達は三渡の藤九郎狐がいこいたのじやなハ、北「ナニサ向ふを見なせへ、人足「向に何がゐるぞい、北「アノ白い物がアレ、人足「白い物とは、彼か、ありや、道中で馬の沓や草鞋が燃ておるが其煙が月にうつて白なつて見へるのじやわいな、彌「ハ、アさうかハ、ハ、コリヤ有難ふござりやすと人足に別れて三人共ほと溜息を吐き打笑ひつゝ、聽て其所に辿つき見るに成程草鞋沓杯を積重て火をつけ燃したるにて其煙白く立昇り見へたるなり、此處を過ぎて松坂に至りまだ夜深ければ道連の彼男を頼み寝る斗りのことなればあたりまへの旅籠を出すも費なりと、

町の入口に木賃宿を世話して貰ひ、其處に泊りて一夜をこそは明しける。斯て月落鳥なきて時の鐘、明六ツを告げわたる。彌次郎北八早くも起出此所を立出るとて

鷹も輪になりて舞ふ日ぞたび人のおどり出たる松坂のやど

右のかた小山の薬師を打すぎ櫛田と云に至る、茲におかん、おもんといへる二軒の茶屋あり、餅の名物なり。

旅人はいづれにこゝろうつるやとおもんおかんが賣れる焼もち

○共古 此處にも別に何もございませんな。「三波の藤九郎狐」といふ話も知りません。是は何か此邊の狐の事を言つたのでせう。

○仙秀 天明年間の道中記を見ますと「雲津から松坂へ行く道中の左に狐の森といふ松の森あり、藤九郎狐と云ひて古き狐あり」と書いてあります。此處では大分有名なコンノさまのやうですから此處から出たのでせう。斯て月落ち鳥啼ての語は唐詩選の楓橋夜泊の第一句から引いたので、その寒山寺の鐘で今以て苦勞をしてるやうな、してないやうな俗仙があらまア……。

○鳶魚 この「鳶も輪になりて舞ふ日ぞ云々」の狂歌は鳶が輪を描いて空を舞ふこと、松坂に泊つた旅人も天氣の好いので踊り出たと、兩方掛けて歌つたので「おどり出たる松坂のやど」

○若樹 伊勢踊りの古い文句に「松坂越えて」といふのがあります。これへも幾分かけて居るのでせう。けれども此松坂は此處ではない。京都の日の岡の傍に松坂といふ處がありますが、どうも、あそこを歌つたものゝ様です。

○鳶魚 さうでせうかな。——先生次の狂歌を一つ。

○共古 是はおもん、おかんといふ二人の女が居たんでせうな。何も面倒はないでせう。此處におかん、おもんといふ二軒の茶屋があつた。旅人が何れに心が移るか、おもんの方に心が移るか、おかんの方に心が移るか。何れにしても焼餅を焼くといふ所から出て来た。

○若樹 つまり女の方が焼餅を焼くのでせう。兩女が列べて焼餅を賣つて居るから、何方を買つて呉れるかといふのでせう。

○共古 それから女の方に心が移るといふこともかけてありますね。

○若樹 さうでせう。

それより被川を打渡り彌宮を過て明星が茶屋に休みたる時、こゝに上方者と見へて、はでな大綱の引廻しをきて帳面と風呂敷包を背負たる男馬のねを付けてるたりけるが、馬士「モシ、お前方ア其荷を付けてお一人、此旦那と二方荒神に乗んせんかいな、上方者」お前方もおほかた參宮じやあ

ろ、私も古市まで掛取に行さかい、一所に乗なされ、話してもてゆこわいな、彌「いかさま昨夜の夜道で大疲だ、北八おらア乗て行くぞ、北八そんなら此荷を付て貰ふト此所にて馬の相談ができ上方者と彌次郎と二方荒神にて出かける、馬「ヒイン、上方者「お前方ア江戸衆じやあろな、彌「左様さ、上方「江戸は悪い所じやが、わしは去年いて、悪いめに逢たがなアノ江戸に似合はん、どこへいても手水場が、とつと、もふふらいむさくろしうて、私や百日程おる内頼と手水にいたことがないがな、夫から江戸を立つて鈴が森たら云とこへ来てヤレ嬉しや、此處でこそ小用してこまそと海の中へためくた小用を、いつきに三斗八升ばかりしおつたが、ゑらふよかつた、あしこは奇慥でゑらいおつきな小用擔であつたわいなハ、ハ、ハ、彌「京では小便と菜とつけへこにするト云事だから小使も大切な物だにお前、海の中へ惜い事をした、その三斗八升で取替たら菜が馬に五駄や六駄はくるだろふに、其だから京では屁をひるにも出そふになると、ちやつと裏の畑へ駈て行てはへてある大根や菜の上へ屁をひり掛るといふことだが成程、是もこやしになるだろふ、上方「そうじやわいな、其屁をひり掛た菜をよふ刻んで土に混て壁を塗おるがな、京では其上をへな土と云ふわいな、彌「そうてへ京と言ふ所はあだじけね所よ、前度わつちが行た時分は三月で花見の最中てん、幕を打て結構な高蔭繪の重詰なんどを取散した所はい

ムが、その重の内に何が有と思へば、かくやへの香の物にきらすの煮たやつはおそれる、上方「イヤ其よりかお江戸の衆が吉原の櫻はゑらいと、いこう自慢せらるゝさかいで、わしやわざく吉原へいて見たが、何の櫻は有やせんがな、彌「夫やお前何時ごろいきなすつた、上方「私がいたは儘か十月時分、彌「何の十月櫻が有てたまるものか、上方「ハアそふかいな、夫でも京の小室や嵐山には年中櫻がちやんと有がな、彌「そりやア木ばかりだろふ、花は年中ありやアしめへ、上方「さよじやわいな、イヤ又江戸衆は長唄をよふ唄ふてじやが、京の宮園や國太夫は又格別な物じやわいな、彌「國太夫と云はどのよふに唄やす、上方「國太はこうじやいなトまじめに聲を張上て國太夫、上方「やがて私が年明て、御前とめうとに成ならば肩を裾へはまだな事足を耳にかけてなり共そひませう、チン、チン、チン、チン、チン、彌「イヨ、面白へ、ナントわつちにひとさくり教てくんなさらねへか、上方「そりや易いことじやわいな、私に付てやりなされト此内北八は細長き竹一本拾ひて上方者が餘に高慢臭い事を云ゆへ、つゝき落してやらんと馬の後から、ねらつてくることをば知らず、上方者は夢中になり又國太夫ぶし、上方「チンチリツン、チンチン、ほんに女子は執念のふかいと云はうそじやない、死でも呵責の夜叉羅刹杖ふりあけて、てうど打ト云所にて北八手を延しかの竹にて上方者の頭をびつしやり、上方「ヤアコリヤド

奴じやい、人の頭へ磔打おるがな、彌「ハ、もふ一遍今の文句を、上方」ほんに女は執念の深
いと云はうそじやない、死でも呵責の夜双羅刹杖ふりあけて、北八後より又びつしやり、上方「ア
イタ、どやつじやいどめつそうな、ゑらふつぶて打くさるがなト振歸り見れども北八はちや
うど彌次郎がのりたる方の馬の陰に隠れて一向見へず、彌「面白いがどうもふしがむづかしい、も
う一遍やつてくんせへ 上方「ソリヤ何ほでもやるはやるが、又つむりを打やしよまいか、彌「ナ
ニサ私が見てるよふ、上方「そんなら、ま一度やりましよかい、死でも呵責の夜双羅刹杖振上て
てうどうつト今度は北八うろたへて彌次郎が頭をびしや〜〜、彌「アイタ、北八俺
だがコリヤどふする、上方「ハア先刻から私が頭を打んしたのもござんじやな、何として打んし
た、北「私は打た覺へはない、上方「ナニ無とは言しやせんわいな、北「ハテおいらア知ねへ、
いけしつこい野郎めだは、上方「野郎とは何じやいなござんゑらい、おとがいた、かんすな、
北「何だ此籠棒め、先刻からそうてへ氣に喰ねへ野郎めだ、餘りたはことつきやアがると、引づ
りおろすぞ、上方「面白いサアおろして見やんせ、北「チ、眞さかさまに落としてやらふト馬の
尻をびつしやり馬驚ひてはね上り、上方「ヤアコリヤたまらん何するのじや、彌「おれもたまら
んコリヤ〜どふする〜、馬士「エ、畜生めドウノト此内新茶屋あけの原を打過小ばたにつ

く。

○共古「かくやへの香のもの」といふのは。

○扇松「かくや」といふ小姓が香のものを刻んだ。それで「かくや」といふ名前を附けたといふ。

○竹清 といふ小話ですか

○仙秀 この明星が茶屋といふのは、織留の伊勢参りの中にかいてありますからぬいてきました。

「又明野が原明星が茶屋こそおかしけれいつとも振袖の女赤根染の裏付たる木綿著物を黒茶に散
し形付かぬは一人もなし扱日本の爰の女ほど白粉をつける所又もなし同じお茶屋の女の風俗住吉と
は是各別の事なり所によりて伊勢難波の替りあり」としてこゝには二人の比丘尼が居つて往來の旅
人の國所を言當て、「違ふこと千度に一度なり」としてある、京傳のお杉お玉二見の仇討にもこゝ
の所がわづかに記してあります。

○鳶魚 松屋筆記に「香物にさまゝの漬物をあつめて細にきざみ酒醬油を加減してかけたるを世に
カクヤといへり、こは神祖の御時岩下覺彌といへる料理人が調じて奉れるを御感ありてやがてそ
の名をカクヤといふべきよしのたまひしに起れりとなん、そは岩下氏の家傳説のよし、屋代弘賢も
のがたれりき」とあるのを、扇松さんが云つたのでせうが、柳亭記には「或老人の話に高野山に隔

衣堂といふあり、二人の僧夜おきに守るが故の名なり、此所を守るは老僧の役にて多くは齒のわろきが故、隔夜料とて香の物を坊よりきざみておくる、きざみたる香の物をかくやといふこゝにおこれりと、按に和州長谷寺に隔夜堂あり、大和名所圖會に見ゆ、彼老人の高野といひしはおほえたがひか、又高野にもあるか知らず」ともあります。覺彌か隔夜か、孰れも慥でないやうに思はれます。尻をたれて肥料をするといふのは今でも落語家がやる。裏の畑に出て尻をひりかけて云々といふのがありますが、是も何かにあるでせうな。

○扇松 宮園は宮園と書きます。蘭八節のことで初代蘭八は鸞鳳軒と號して京都の人です。初めは宮古路と云ひました。豊後節が禁制後宮園と改めたので、もと豊後節の門から出たもので一時行はれたものであります。天明五年蘭八が歿してから三十年ばかり中絶して居りましたが、宮園春太夫の門人で山城屋清八といふ人が再興して宮園千之と云ひました。天保五年に死んで門人の千壽この業を傳へ明治元年に歿しました。明治十七年に大槻如電翁の盡力に依て二世千之、二世千壽と共に再興して今日に至つたのです。それから國太夫の方は豊後節の事を指して言つたものと思ひます。豊後節又一に國太夫節とも云ひました。これは豊後掾が始め一中節から出て宮古路國太夫と云つたから、それが傳つたのでございませう。

○若樹 國太夫は違ふだらう。この時代の文化の初あたりに江戸に行はれた豊後節と京都のとは餘程違ふのでせう。

○仙秀 國太夫は一中の門人になつて居るのだから、江戸に下らぬ前は、その節廻しも一中節に近いものだつたらうと思ひます。

○扇松 この豊後節は一時止められたのでせうな。

○鳶魚 彼方では何んともないのでせう、是は國太夫節に何かありませう。

○若樹 今も此等の歌が傳つて居ますか。

○鳶魚 まだ富本はあるけれども、それより少し前のものは無い。僕の所へ来るお婆さんで富本を習つたといふ自慢のお婆さんがあるのです。それはあるけれども、それより少し前のものはありませんからな。

○若樹 今が一番初めの「大じまの引まはしをきて帳面とふろしきつゝみを背負ひ、斯ういふのはやはり始終掛取に来る。

○鳶魚 掛廻りなんでせうね。

此所より馬を下て三人共茶屋に休む、上方者北八に向ひて「コレお前は何としてわしがつむりを

打んした、彌「もういゝにしなせへ互に旅じやア種々なことがあるもんだ、了簡しなせへわつちが一杯買やせう、モシ女中何ぞ着があらば爰へ一杯出してくんなどこれより酒盛となり、上方者も一つなる口ゆゑ段々酔が廻りて「コリヤえらふ酔たわいな、コレ彌次さんとやらわしや御前がゑらふ好じやが此和郎はいかんぞや、頓といかんけれども、お前の連じやしよことがない、斯しよじやないかいな、これから山田の妙見と一緒に泊て古市を驕ろかない俺やあこではゑらふ切るがな千束屋の鼓の間柏屋の松の間わしが案内するさかい行んせんか、どふじやいなト矢鱈に大風なこ

と斗り云ふゆる彌次郎這奴を煽上げて遊ぶ積に胸算用して、彌「奇妙々々どふぞお供致してへの、上方、是から世古の松坂屋で支度して妙見町の藤屋としよじやないかいなサア、もふ往わいな彌「ドリヤ出出やせうと此所の酒代を拂ひ立出る此町の出ばなれた宮川といふ舟渡に至りて

宮川や神に御縁をむすばんとすくへる水のかげのしらゆふ
是より中河原をうちすぎ堤世古を打越えて山田の町に差掛りける。

○仙秀 何もありませんな。この「千束屋の鼓の間柏屋の松の間」といふのは古市の女郎屋のことでこの後篇に古市の女郎屋も妙見町の藤屋も出て来ますから、其時にお説を伺ひませう。それから宮川といふのは外宮の手前にある大きな川で、此處で「嗽手洗をして、さうして外宮へお詣りをする

といふことです。今は汽車で通つてしまひます、それで此狂歌の「宮川や神に御縁を結ばん云々」といふのは、宮川の水を手で掬うて、即ちむすんで身を清めて、神前に参詣して神様と縁を結ぶといふのと、水をむすぶといふのにかけて、その結ぶから白木綿が出て来たのです。それから山田の町に這入りましたといふのでございませう。

○扇松「しらゆふ」といふのは。

○若樹 ゆふしでを懸ける……。

○鳶魚 榊葉にゆふして懸けてなんで鹿爪らしい顔をする奴。

○仙秀 中河原は外宮の山田の入口でございませうから、茶屋が多かつたやうであります。是から外宮まで二十九町あります。

○共古「やたらにおほふうな」このやたらといふことは此前出ましたか。

○鳶魚 出なかつたでせう。

○共古 やたら拍子とか何とか出ましたやうにも思ひます。

○鳶魚 何かの拍子ださうです。

○若樹 やたらに敲くのですな。

○鳶魚 さうでせう。いや皆さん、お暑いのに大きに御苦勞様。

虎の字を書て吠犬を卻く

此咄し安永五年より百五十年程前成た鼠鹿笑巻一に既に出居る。云く「人吠ひ犬の有る處へは何とも行れぬと語るに、去事あり、虎と云字を手の内に書て見すれば吠はぬと教ゆる。後ち犬を見虎と云字を書濟し、手を擴げ見せけるが何の詮もなくばかと嘆たり、悲しく思ひ或僧に語りければ、推したり其犬は一即文官に有た物よし」と。嬉遊笑覽八に此咒本漢土の法也、博物類纂十、遇惡犬、以左手起自寅、吹一口气、輪至戌指之、犬即退伏（指宜作捏、字書に爪捏也と有てつかむ事也）と有る。幸田博士の狂言全集下に在る大藏流犬山伏の狂言に、茶屋の亭主が山伏と出家の争論を仲裁し、人吠ひ犬を祈らせ、犬が懐いた方を勝と定めよう云ふと出家愚僧が負るは必定と因却する。亭主竊かに、あの犬の名を虎と云ふから虎とさへ呼ば懐き來る、因て何ぞ虎と云ふ語音が入つた經文を唱へ玉へと教へる。南無きやらたんのうとらや〜〜と唱へるや否犬出家に狎れ近づく。山伏祈れば大吠掛り咬付んとするので出家の勝利と決す。犬より強き虎の字を書て犬を制し得てふ支那説が本邦に入て、犬の名の虎に通ふ音の入た經文を唱へて其犬を懐柔する趣きに變つたのだ。又田邊近村の人より戌亥子丑寅と唱へ乍ら順に五指を折固めて犬を伏せる法を聞き郷土研究一卷八號へ出し置たが、上に孫引した博物類纂所載に似て居る。（一月廿九日、南方熊楠）

伊勢音頭

禁短氣三編卷一（明和二年刊）總じて川崎おんといふ事、近年のはやり物にて、川崎に文句の作者あれ共、さみせんの手をつける事は奥山何がしにて尾勢兩國専らにうたふ事と成、上方にてもはし〜うたはぬにてはなけれ共、さのみ賞歌にはおよばず、是をうたわせておどる時は、かべぬりにてんかんのおこりし時のやうなる手つき、臨終きわなどにおもひ出さば空をつかれまじき所作なるが、此里の女郎は是になれておどり帷子の趣向を楓橋大盡に相談せしかば……とあり、上方にてさのみ賞歌せずといふは明和度の事か延享四年版、自笑樂日記には「京へつきたれど……毎日妾もの舞子を集め、伊勢風波の川崎音頭に騒ぎたて」とあれば、早く已に流行せしを知るべし。さて川崎音頭の作者は梅齋といふ俳人にて、加賀の千代が門に入たりたと幸野若談にあり、梅齋の時代を考へて伊勢音頭發生期を知るべし。此の邊の事は竹清君に明解あらん。（鳶魚）

第十一回

五編追加

二葉 霞山 松更 扇松 筑波
仙秀 若樹 靜方 共古

川崎首頭に伊勢の山田と唄ひしは和名抄の陽田といへるより出たるにや此町十二郷ありて人家九千軒ばかり商賈をならべて各質素の莊嚴濃にして神都の風俗おのづから備り柔和悉鎮の光景は餘國に異なり参宮の旅人絶間なく繁昌更に云ふ斗りなし彌次郎兵衛北八は彼上方者と打連れ此入口に至ると兩側家毎に御師の名を板に書つけ用立所といへる看板竹葦の如く茲に袴羽織引掛けたる侍何人となし馳交ひて往來旅人の御師に至るを迎ふと見えて一人の侍彌次郎兵衛に近づき、御師の手代「モシ貴客方は何れへお越でござりますな、彌次郎知れた事太神宮様へまいりやす、手「イヤ太夫はどれへ、彌次郎太夫は竹木義太夫殿さ、手「ハア義太夫と申すは何處許しやいな、彌次郎の義太夫といふはな大坂道頓堀、北「京は四條お江戸は貴屋町河岸において永らく御評判に預りましたる、手「不具者はお前方であつたかいな、北「謔言叶すと引殿こそ、手「ふらいあこじやなハ、ハ、ハ、上方者「ちと休んでいこかない、北「此邊は汚ねへ所だ、皆御師の雪隠と見へて用立所

と書いてある、彌「おきやアがれハ、ハ、ハ、三人共或茶屋へ這入暫く休む此内向より上方道者大勢揃の装女交りに聲張上げ、唄「ござれ夜見世は順慶町の通り筋からソレ瓢箪町をヤアとこさアよいとさアチ、チン、素見ぞめきは阿波座の鳥ソリヤサ可愛々々もヤアレ格子先ヤアとこさアヨウいとなアありやりやこりやりや、コノなんでもせチ、ンチ、ンチン、と此一群通り過ぎたるあとから太々講と見えて二十人斗り何れも御師より迎ひの駕に打乗來るが御師の手代先に立て「サア、是じやく、先誰方様も是で御休足なされませト駕残らず茶屋の門に下す此太々講は江戸と見へて何れも小袖ぐるみに短いお刀をきめた手合銘々駕を出て座敷に通る此内一人の男彌次郎を見付て「イヤこれはどふだ彌次殿、貴様も参宮かト聲かけられて彌次郎吃驚し見れば町内の米屋の太郎兵衛なり江戸を立とき此米屋の拂をせず立たる事なれば何となく彌次郎情氣返りて「ハア太郎兵衛様がよくお出掛なさいました併し爰で貴方のお目に懸つては面目ない太郎「ナニサ、俺も中間の太々講で其辯講親といふものだから、據なく出掛ましたがよい所で逢つた旅へ出ては兎角同國が懐かしい奥へ來て一杯やらつし、彌「有難うございます、太郎「連は誰だハア満更知ぬ願でもないナント貴様達幸ひのことだ太々講拜まぬかそれも飛入と言やアちつと斗り金が出るから無駄ながら俺等が供になると一文も入らず大分馳走になつて拜まれるといふ

ものだからどふだらう、彌「それは願つてもない有難い事でございやす併しそれが出来やせうかね、太郎「ハテ俺が講親だものどふでもなるマア何しろ奥へ来さつし、彌「ハイ左様ならモシ上方のちと此所に待てくんせへ、連の上方者「よいわいの往てこんせ、太郎「サア、二人共来さつし、此太郎兵衛に誘はれ彌次も北八も草鞋をとつて奥へ行と上方者は一人見世先に酒など呑て待てる内奥は太々講の事なれば御師よりの馳走にて差いつ押へつ大駈の最中又表に一群の駕十四挺斗りこれは上方の太々講と見へて御師の手代先に立つて、駕「ホウよい、ゑつこらさつさ、これと同じく此茶屋にはいる、手代「サア、御案内々々、茶屋の女「お早うござりませ、奥へお通りなさんせなと此内皆々駕より下て奥へ通ると直に酒肴を持出し太々講二組の大駈ぎ、座敷の洒落色々あれども餘り管々しければ略す馳て奥の酒盛も了りてサアお立といふと二組の太々講が一緒になりどさくさして奥よりいづると江戸組の御師の手代いちばな立て奥よりいで「サア、幾の衆これへ、どなたもサアお召なされませト彼方此方を駆廻り駕にのせる此内又上方組の御師手代も同じく断廻りて「此方のお駕はこれへ、と横附にして皆々を乗せる米屋の太郎兵衛生酔となり彌次郎が手を取り、太郎「コウ彌次公貴様俺が駕に乗ていかねへか、彌「イヤ飛だことを仰しやる、太郎「ハテ俺はこれから歩くは慰みだ貴様洒落に乗て往かつし、彌「さ

やうならへ、こりや奇妙々々ト駕に乗ばサアお立じやと兩方の駕が一時に昇上混雜して彌次郎が乗たる駕の人足飛だ間拔と見へて上方組の駕の中へ紛れ込みたるに氣も附さつさつと擔いで行掛るとさくさ紛れに人もそれと心附ねば段々と急ぎ行程に山田の真中筋達といへる所にて江戸方の一組は内宮の御師なるのゑ左の方へ別れ行上方組は外宮の御師にて此所より右の方へ別れ田丸街道の岡本太夫の方に著く。



(袋の本原)

○共古 一體川崎音頭に伊勢の山田

とかいふ明があると見えますね。三村君が川崎音頭の本場へ問合せたさうです。川崎といふ所へ、



(間山の参宮の名所)

しかも音頭をうたひ出したと云ふ人の名前まで知れて居るさうです。三村君が生憎居ませんから申上けることが出来ないうです。此處で唯私がそれに關せず申上げたことは、川崎音頭と、伊勢音頭と名稱を違へて三四ヶ所に記してありますが、川崎音頭と伊勢音頭と別のものではなく、同じものだと思はれます。元來は間の山節といへる唄がありました。是は天正以後参宮の便利の爲に古市尾上坂と宇治浦田の間に兩神宮の中山に路を通じたところから民屋櫛比せしより阿杉阿玉の如き歌比丘尼の流れこゝに出で参宮人に無常をうたひしてありしと、吉田東伍氏の大日本地名辭書に京傳の二見

の仇討といへる書に僅に一首を載せてあるのを引いてあります。我に涙をそへよとやのうべあしたの鐘の聲じやくめつ爲樂とひびけどもきいて驚く人もなし野邊よりあなたの友とては血みやく一つに数珠一連それが冥土のともとなる。是が間の山節といふ唄といへば、起りは決して浮いたものではないと記されてあります。それから彌藤月峯が聲曲類纂に「伊勢音頭勢州古市に行はる、伊勢参宮名所圖繪に云ふ、古市も間の山のうちにて丸の山節を唄ひし物なるにもあはれなる節ゆえ、いつの頃よりかうつりて川崎音頭流行して、これを伊勢音頭と稱し都鄙とも花街の唄物となりたれど此地の調は普通に越たり」と出て居ます。如何にも間の山節といふものは憐れほく佛臭いものだらう。川崎音頭なるものが之に代つたのは當然のことであると思ふ。川崎の地は度會郡で宇治山田町の北に接し漁船の埠頭で、小溝を以て神社港、大湊、汐合川、二見浦等に通ずるのに各一二里に過ぎませんけれども、西宮神郡の海漕は一に此口に由る故に出人の舟多く繁華の地だから舟乗などの快調な情歌が、此所に起つて一般に流行したこと、見えます。是は餘程古いことであつて、既に紫雲の一本に「延寶五巳の年より伊勢音頭はやり云々」とあり、江戸にも古くよりはやり伊勢音頭と稱されて居りました。斯ういふわけで元來は間の山節なるものがあつたが、彼の間の山節の代りに川崎音頭といふものが出来まして、是等は何れも伊勢の地より流行し出したので伊勢音頭の稱を得たの



(會圖所名宮參) 樂神々太

であるらしいです。他のものは小唄節と申しまするものに、是は音頭といふ稱を使つたことは、此唄は多人數合唱のもので、丁度住吉師が傘を立て之をたゝいて音頭をとる如く、此音頭といふは音頭取りを要するので、音頭を司る者一人あつて唄ふ故に此稱があるので、即ち伊勢音頭も其起りは船頭の合唱小唄より始まりしことであらうと思はれます。それから伊勢の山田とうたひしはと云ふのですけれども、是は大方川崎音頭の唄に伊勢の山田とかいふことがありはしませんか。それを一九は知つて居つて書いたのですかね。京傳も知つて居ると見えて二見の仇討に一つあるといふことが東



藤系毛輪講

(畫挿の頭音勢伊紙表黃作九一)

伍先生の辭書に出て居りますから、何かありませんか。此處に和名抄の陽田といふこととですね。和名抄には陽田とは書いてないです。和名抄では「ようだ」とは讀ませない「ヒナタ」と讀ませた。それは和名抄の卷の六に「度會郡陽田」(多)となつて居りますから「ようだ」とは讀ませなかつたのです。

○二葉「山田」といふのを「ようだ」と讀ましたのがあるやうですが……。

○共古さうでございます。後にさうなつたやうですね。今の内宇治郡を合併して宇治山田町と稱して居ります。古くは「ようだ(山田)の原」と稱して居つたことがあり

ます。それが「ようだ」でございますよ。

○竹清（追記）私も伊勢にて十年程居りましたが、それは津でございます、山田とは大分道のりも遠い、一年に、一度か二度参宮をする位で一向詳しい事は分りません。お恥かしいが古市の踊お杉お玉も見た事がありません。お杉お玉は今では見世物になつてゐるので、往來しただけでは見えないのです。私の母の話ですから五十年も前の事ですが、お杉お玉は紫の木綿、金紙などを切りぬいて貼りつけたもやうのきもので、白粉を役者さんの様につけてゐたと申す。都新聞のつゞきものにいふ様なおべべではない様です。お杉お玉の唱へるのが間の山節ならばちつとも聞えない口のうちにグヂグヂ云つてゐるものさうです。この歌が何を云つてゐるのか分れば天と地と逆様になると母が子供の時には聞かれたといふ事です。行基菩薩が傳へたとかいふ事はかういふ種類の人にえである傳へて歴史ではありますまい。吉田東伍さんの地名辭書は拜見した事はありませんが、神様でない以上かういふ浩瀚なものが完全に出来る筈はありません。伊勢の篤學者大西源一君などは大さうその杜撰を論じてゐた事がありました。京傳の二見の仇討云々は神都名勝志の孫引でせう、古市の女郎やで唄つたといふのは伊勢参宮名所圖會の臆説と思はれます。神都は昔から學者好事家が多く、長袖の處でしたから色々な書物があり色々な説が出て、随分むづかしくこね返してしまつて

却て分らなくしてしまつたと考へられます。思ふに古市は古市場でさかり場でしたから茶汲女から發達した遊女もあり、唄比丘尼、芝居、なども出来たのでせう。玉川某といふ役者もこゝが在處の様に西鶴の永代藏でしたかに見えたと思ひます。山田宮後居られる立田紅於君が備前屋のこのみで近々伊勢音頭考をかゝれるさうですから、これが出たら大さう詳しくからうと思ひます。同君の説では神風館梅路が川崎音頭を作つたのが伊勢音頭の始めださうです。梅路の事は俳家奇行傳、幸野若談にも見えてゐますが、紅於君の話では中森氏延享四年丁卯二月二十二日に死んで居ます。神風館五世になります。伊勢音頭も間の山節も住吉踊も最初は一ツであつたといふ説は私は避けます。川崎音頭も由来なく梅路が作る筈ありませんでせう。併し今日では全く別なものと御承知を願ひます。伊勢音頭といふのは古市の女郎屋で唄つて大勢の女らを踊らせるもの、間の山節はお杉お玉の口の裏でうたつてゐるもの、踊さん紺さん中のりさん淺黄のバッチの膝ぬけさんほとかんせうといふのはお杉お玉の近くに女房さんがさゝらをつつて子供を踊らせてゐるそのものが唱へる文句これは通行人の服装をいふのが餘程熟したものでどれ程の人でも皆いひおほせるなど云つてゐますが、こゝへ一九の伊せおんどのさしゑと名所圖會をおめにかかけませう。それから和名抄陽田郷の事、これは其道の學者の説がやかましい事でせうが、今の山田は沼木郷ださうです。比奈多は豊夷

語のベナタで川の上といふ事ならばもつと宮川の上かもしれません。併しもとは山田とかいてヤウダと申たさうです。現今は決して宇治ヤウダ市とは申しません。ウヂヤマダ市と申します。

○筑波 此處に「兩側家ごと」に御師」といふのですね、此「御師」といふのを私は能く存じません。

○共古 私も能く存じませんがね、如何でせうね。

○霞山 御師といふのは私も能く知らんけれども、私は伊勢の津ですが、十六で東京へ来たですから斯ういふことの疑問を挟む時分には東京へ来て居つたかも知れませんが、山田へ行つたことがありますが、御師といふのは何々丈夫といふのがありますね。御祓を持つて廻るです。又地方から來ると自分の家へ泊めるです。だから自分の所の家は大きな宿屋のやうにして、宿屋とは風が違ひます。泊めるです。さうして平素の商賣は札を持つて日本中を廻るです。だから何々大夫といふ、此處で竹本義太夫とうたつて居りませう、是は洒落たのですな。何々大夫と澤山ある。

○二葉 御師といふ名前は何處から出たのですね。

○霞山 私等の國では御師々々と云つて居りますがね、御師といふのはとういふ所から出たのでせう。

○仙秀 伊勢では御師と云ふと川喜田久太夫さんからも聞いたことがあります。外の地方では成程おしといひますね。

○霞山 今でも出來て居ります。御師の舊い家が五六軒ありました。私等行きましたのは今から三十二年ばかり前でございますがね。まだ其時分に五六軒はございました。なか／＼大名の家みたやうに家は立派なものでありました。

○二葉 御師の家から出て居る手代ですな、袴羽織ひつかけたる侍」とありますね、御師の侍といふことを云ひますか。

○霞山 左様々々、是は風が違ふです。さういふ風にして御師の家でも皆烏帽子を冠つて居るですから、だから萬歳がありますね。ア、いふ風に始終御祓を持つて行く時は行くのです。

○二葉 侍といふと侍の格があつたものでせうか。

○霞山 それはやはり寺侍のやうなものではありませんかね。

○竹清 私は近頃ですから御師の家構などは存じませんが、今でも其面影の見える家もあります。大かた旅宿に代つたのでせう。僧尼重軽服及び月水の輩入る可からず、など、門に掲げてあつたらしい。御師といふのは御詔刀師の略だといはれてゐます。

○仙秀 御師などは是は三村さんに伺つたら何軒あつたかと云ふことが分りませうね。地方に得意を有つて居つてそれか講中のやうにやつて居つた。それで時々彼の講中の御師から時候見舞のやう

なものが来て居るやうです。私の藏品に龍太夫の時候見舞狀の摺物があります。

○共古 それから用立所と云ふのは……。

○仙秀 それから「よいとさア」是はやはり音頭とでも稱するものは、上方では始終斯んなものを唄つたのでせうね。

○共古 知りませんね。ござれよみせは順慶町。是は大坂でせうね。是は實際知りません。

○若樹 文政十三年の御蔭参りの時に出来た笠亭仙果の作の「同行百人一宿大どさくさ」と云ふ本があります。此中に歌唄ひ様とあつて「よしこの節でもえつさ節でも何んでも無暗に唄ふかよし、併しとつくり考へて見れば矢つぱりやあとこせの方が伊勢路には能くのるべし」とありますから好い加減のもので、何んでも宜いのだと見えますね。

○筑波 それから先生「太々講をあける」と云ふこととございますね、是はどういふ組織ですか。

○共古 太々神樂といふ、アノお神樂でせうな。唯それだけのことではありませんか。太々神樂をあけるといふ其お神樂をあけるところの講中を太々講と云つたのであらうと思ひます。

○筑波 此太々講の中に「ハテわしが講親だもの」といふことがありますから、講親とか何とかいふものがあつてやつたのですか。

○共古 さうでせうね。それは講元でせう、金を集めるとか世話人です。是は今でもありません。

○若樹 やはり懸念をして何年目かに御参りに行くといふ斯ういふ譯ですか。

○共古 さうでせう。

○仙秀 太々神樂のことに三養雜記に「太々神樂といふこと何時の程よりか始まりけん都鄙をいはす押並べて太々講といふこと盛んに行はるれど、元と太々神樂は既にも云へる代神樂（代詣代参の類にて神樂を奏すべき人に代つて奏する心）と同じ心ばえにて彼の講中の人に代りて神樂を奏するからに代神樂なるべきを、尙一際なみならず取行ふ由にて重ねて太々とたゝえて云へる稱なれど曾て分らぬことなりし」とかいてあります。

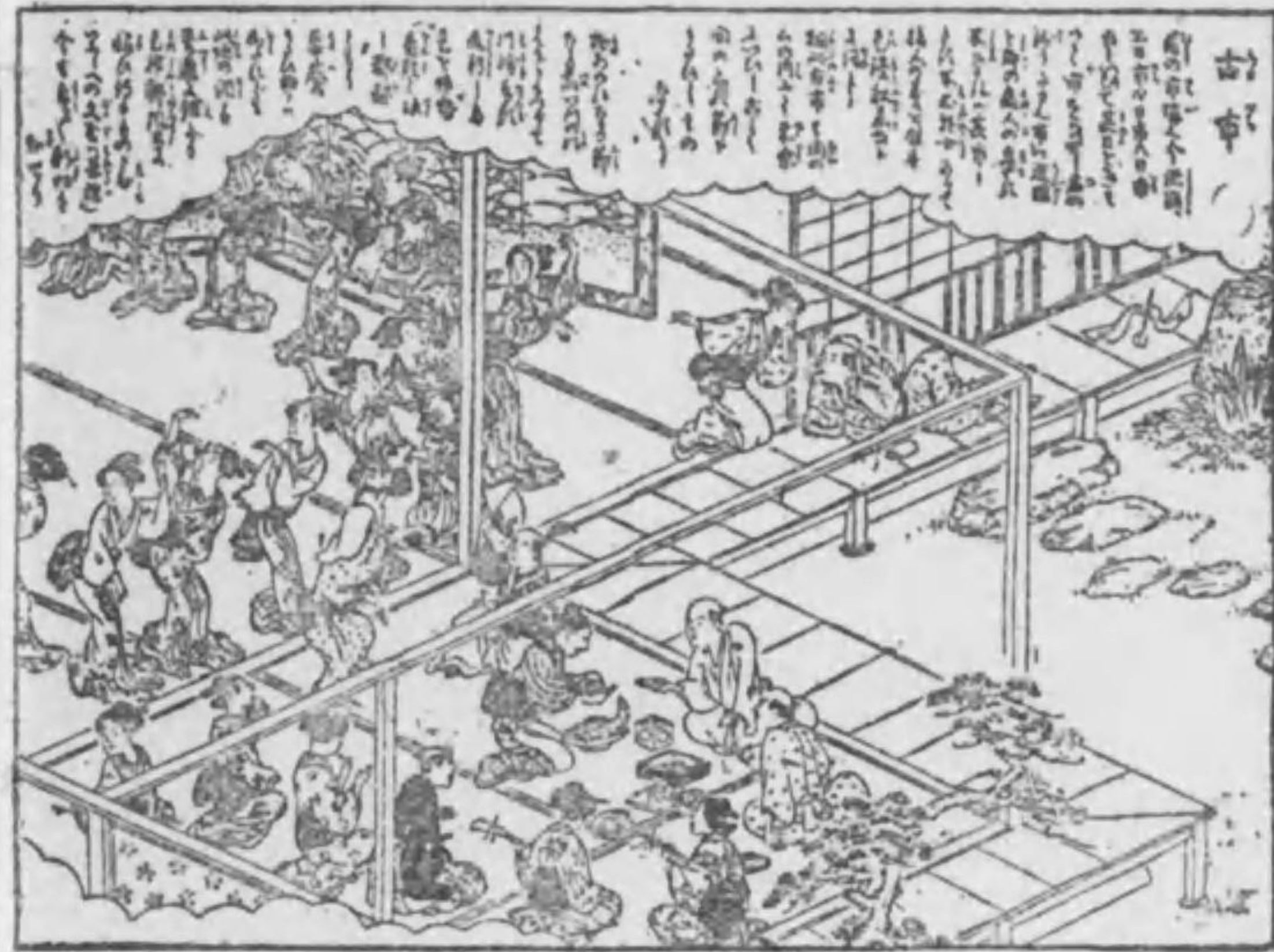
○共古 代参の意味で……。

○仙秀 代参の意味ですな、神樂を奏する人に代つてするから代神樂といふこととございますが……。

○共古 大きい方の意味でせうね、大代神樂でせう。

○仙秀 さうでございませうね、それを殊更に文字を替へてやつたのだらうと書いてございますね。

○竹清 元來大神宮様は皇室の神様であつて庶民が奉幣する事はならぬ。尤も今でも賽銭箱などはありません。御神樂を上げると云つても皆御師の家に一室あつてそこで上げたのです。御神樂の圖が



(會圖所名宮參) 市 古

一枚摺でよくあるものです。今は神域内に神樂殿があつてこゝで上げて頂くことが出来るのは有難い事です。

○共古 それは前の義太夫といふのは大阪京都に——「かたわものはおまい方であつたか」といふことは此時何んでせうか、私は知りませんが、葺屋町河岸とか道頓堀とかいふ所には不具者の見世物などが澤山出て居つたのでせうか、江戸もさうでせうか、私は知りませんが……。

○若樹 見世物が澤山あつたのでせう。

○共古 だから片輪者はお前方とか云ふ、永らく御評判に預かりました片輪者はお前方ではないかと云ふ。

○若樹 唯嘲弄した意味でせう、御評判にあつた片輪者であるかと云つて、其實其時分にさういふ片輪者が出たかどうか分かりませんが、不斷さういふ見世物は始終絶えなないであるのだから……。

○共古 さうでございませうね。竹本義太夫さんとか太夫さんばかり立派なものが居るらしいけれども、其處には間々にあつたでせう。すけんぞめきは阿波座のからす」といふのはどういふことですね。

○仙秀 是は古くからございませうが「すけん」は「素通り」といふことで、「ぞめき」はザワ／＼して来る。「阿波座のからす」は矢張り大阪の事で「阿波座」といふのが新町の廓の通りの名で「阿波座のからす」といふのはのらくらく素見して居る者ばかり、鳥の啼聲で「かはう／＼」と言つて揚つたことがないといふわけで、攝陽落穂集にも「あはさがらすが新町に行てかねもまたすにかをかをといへる事人口に残れり」とみえて居り、此頃は古くより有つたものらしく近松の上るりなどにもあります。紀海音の元祿十一年にかいた新百人一首にも「廓四筋を毎夜さめくとかくけんくわをしよざいにぞする夜の目もあはざの鳥」とあり、つまり旅鳥といふの類で阿波座に馴れてるといふ意でせう。柳亭筆記にも「難波にて新町をぞめく者をあわざ鳥といふとぞ」とも見えます。

それから「すけんぞめきてかへらりよか」など、清元などにもございませうが、「ぞめき」は金山言葉だといふ、墨水銷夏録の卷二に元禄二年版、本芳原然々草に「ぞめき」は金山言葉なり、役に立たぬ金の出るときを「ぞめき」と謂ふとございませう、兎に角何んだか「ぞめき」と云ふとザワ／＼して来るやうな氣持が致します。役に立たない奴のことだと此本にはございませうがね。——「神主」のことを何故「太夫」と云ふのです。

門前のはうき目もり砂に水打清め玄關にまく打廻して、馳走のやく／＼羽織袴に向へば講中皆皆かごをおりて玄關より打通る、此時彌次郎も駕かきのそ／＼にて上方組の中へ紛れ込み茲に來たれど、十四五丁もあるかご、どれがどれやら判らず、彌次郎かごを出て同じく座敷に打通りそこらを、うろ／＼見廻せども皆知らぬ顔許なれば、彌「ハテがてんのかぬ、モシ／＼米屋の太郎兵衛様はどれにお出なさいませう、そばにいた男、何じやいな太郎兵衛さんとは、こちやしらんわいな、そしてお前はねから見ん顔じやが誰さんじやいな、彌「ハイ俺はソレ太郎兵衛さんの町内の者じやが、ハテどふか、ちがつたよふな、北八はどふしたしらんとむしようにうろ／＼きよろ／＼とまごつきあるけば、皆々膽をつぶし、互に袖をひきあふて荷物など片寄、さ／＼やきあふ内此こう中の内二三人立むかひ「コレ／＼こなさん、見慣ぬ人じやが、誰じやいな、彌「ハイ／＼、

「こう中」ハテこなわろは何をきよろ／＼さんすぞいな、誰じやと云のに、彌「イヤわつちは米やの太郎兵衛様におめにかゝれば判りやす、こう中「ハテそないな人はこちの講の内にはないもせぬもの、何じややらきみの悪い人じやわいな、御師手代「ハテこな人は、あなた方のお連ではムりませんかいな、こう中「左様じやわいな、手代「イヤそれはどした物じや、とつと／＼出ていかんせ、ゑらいへけたれじやな、こう中「道中盗であろぞいな、ほり出してやらんせ、あたけたいな、彌「エ、そんなに云なさるこたアねへ、ほり出すとはなんのこつた、途方もねへ、こう中「ハ、アお前の物云はお江戸じやな、夫で讀たわいの、今のさきお江戸の太々講と一所で落合たが其時お前乗らした駕がこちの中へ紛れ込でござんしたのじやな、彌「成程左様、そんなら俺の行く御師殿はどこでございやすな、手代「ナニお前の行所を誰がしろぞいな、こう中「めん／＼のゆく御師殿を知らんと云ふことがあろかいな、コリヤわりさまは、わざとこちのなかまへすりこんで、太々講を喰倒ししよふでな、こう中「みな／＼「エ、けたいな奴じや、のうてんどやいてこまそかい、彌「イヤわるくしやれらア、手前達のだい／＼講丸つきり喰倒した所が、たか／＼知てある、餘り安くしやアがるな、江戸ッ子だは、おれ一人て太々講打て見せよふとどつさりすれば、おしの手代膽をつぶして、手代「ナニお前が一人でかいな、こりやできた／＼、美事お前が、彌「知

れたことよ、多少にやアよるめへ、是で頼みますトうちかへの錢二百文、紙に包み出せばおしの手代二度びつくり「ハ、ハ、ハ、太々講は安うて金十五兩も出さんせんけりや、でけんわいな、彌」ナニ是では成やせんか、手代「さよじやく、彌太々講がならずば、是で蜜柑講でも頼みます、講中「ハ、ハ、ハ、べつかこうにさんせハ、ハ、ハ、手代「イヤおどけたお方じや、ハアよめたお前のいく所は儘に内宮の山莊太夫殿じやわいの、さつきの手代があこのじやほどに是から妙見町をすぐに古市の先へいて尋ねさんせ、彌「ハアそふかコリヤ有がてへ、ほんにお八釜敷ございやした、こう中「ゑらいあほうじやハ、ハ、ハ、ト手を打笑ふ、彌次郎腹立ども詮方なくしほくと、この所たちいづるとて

鉢植のだい／＼こうにあらねどもちうにふらりとなりしまちがひ

○共古「えらいへけたれぢや」とは何ですか。

○若樹「へけ」は「ひけたれ」ぢやないか。上方では「髭」のことを「へけ」と云ひますね。と云ふやうな處から來たのではないですか。

○共古 静岡の方言では「へぐたれ」といふ言葉がありますが、「へけたれ」はないね。「へこたれ」の轉訛ではないか、氣の利かない奴といふことでせうね。

○若樹 所謂どじだね。

○共古 それからもう一つ「あたけたいな」

○仙秀「けたい」は「奇態」の轉訛でせうかな。

○共古「アタケタイ」、アは助語、ケタイは怪體でもありませんか、タはアについた後の詭言でせう。

○仙秀 さうでせうな。——「道中じら」と云ふのは上方の方では斯う云ふのですか。

○二葉 此「道中じら」と云ふのは旅人と道連れになつて枕探しをやる、彼の「護摩灰」のことを云ひます。

○仙秀 太々講はやすくても十五兩も出さなければ出来ないと云ふ、是は格式がございませうな。幾らからの位といふことが……。

○若樹 それから御師と所謂普通の人民との間の不斷の交渉ですね。是は元は御師の方から抱へ代官と云つて御師から扶持米を貰ふものが直接に往つただけけれども、其代官が雇代官の請負になつて兩方で割に合はぬと云つてこぼして居る所が明和の太平國恩俚談にありますぜ。

○仙秀「山莊太夫」といふのは、是は洒落て言つたのでせう。岡本太夫と云ふのは是はありさうな名前ですね。それから此狂歌ですが、是は太々講を「鉢植のだい／＼」に掛けて、自分が江戸の太々



(會圖所名宮勢伊) 橋 治 字

講で来たけれども、上方の太々講へ紛れ込んでしまつて中途へブラリと下つたのが、丁度鉢植の橙の實がブラ下つて居るやうな鹽梅だと云ふだけのこととせうな。——それでは此所はおしまひでせうな。

夫より彌次郎兵衛は元の筋違に出、妙見町を指して行く道次、北八は如何せしや米屋太郎兵衛と打違て御師の方へ行しか但しは上方者と妙見町に泊りしかと思ひ詫つ、辿り行程に廣小路に至ると、此所の宿屋「モシお泊りかいな、宿を取てかense、彌コレ妙見町といふは未だ餘程ございやすかね、宿屋の女、イエ今少し此先じやわいな、彌ソノ妙見町に、ア、

何屋とか言た、道連の上方者が泊るといつたはア、それよト、いろ／＼考へても藤屋といふを忘れて、さつぱり思出さず「ハテ口へ出るやうな、何でも棚から吊下つてゐるやうな名であつた、モシ／＼妙見町に吊下つてゐる宿屋はございせんか、「ナニ吊下つてゐる宿屋は此方や知んわいな、そないなこといふては知りやせんがな、彌成程こゝらで尋ねては知めへ、もちと先へ行て尋ねやせうトそれより此所を過て急ぎ辿り行程に、此處に萬金丹の看板、妙見町山原七右衛門といへるを見て、さてこそ此所が妙見町ならんと思ひ往來の人を呼止め、彌「モシ此邊になんでも吊下つてゐるやうな名の家はございせんかね、往來の人不思議そふに、「何じやいな吊下つてゐる家とは何じやいな、彌「宿屋さ、往來「その家名わいな、彌「家名を忘れたからのことさ、往來「イヤそれ言てかんせにやア知れぬくいわいの、何じやると吊下つた家といふては、ハ、ア向ふの角に人の立てる家へ行て問て見やんせ、彼所は去年首縊りがあつて吊下つた家じやさかい彌「イヤ其様もの、吊下つたのぢやアございせん、往來「ハテまあ行て問て行んせ、彼所も宿屋じやあるわいな、彌「ハイさようならト走り行く内、彼の家門に立てる人も何處へかついと行つてしまひ一切知れなくなり、まご／＼して成家の前に立ちて、彌「モシ／＼ちと物が尋ねたうございやす、去年首をおく、りなさつたは貴方でございやすか、此家の亭主居合せ膳を潰し飛

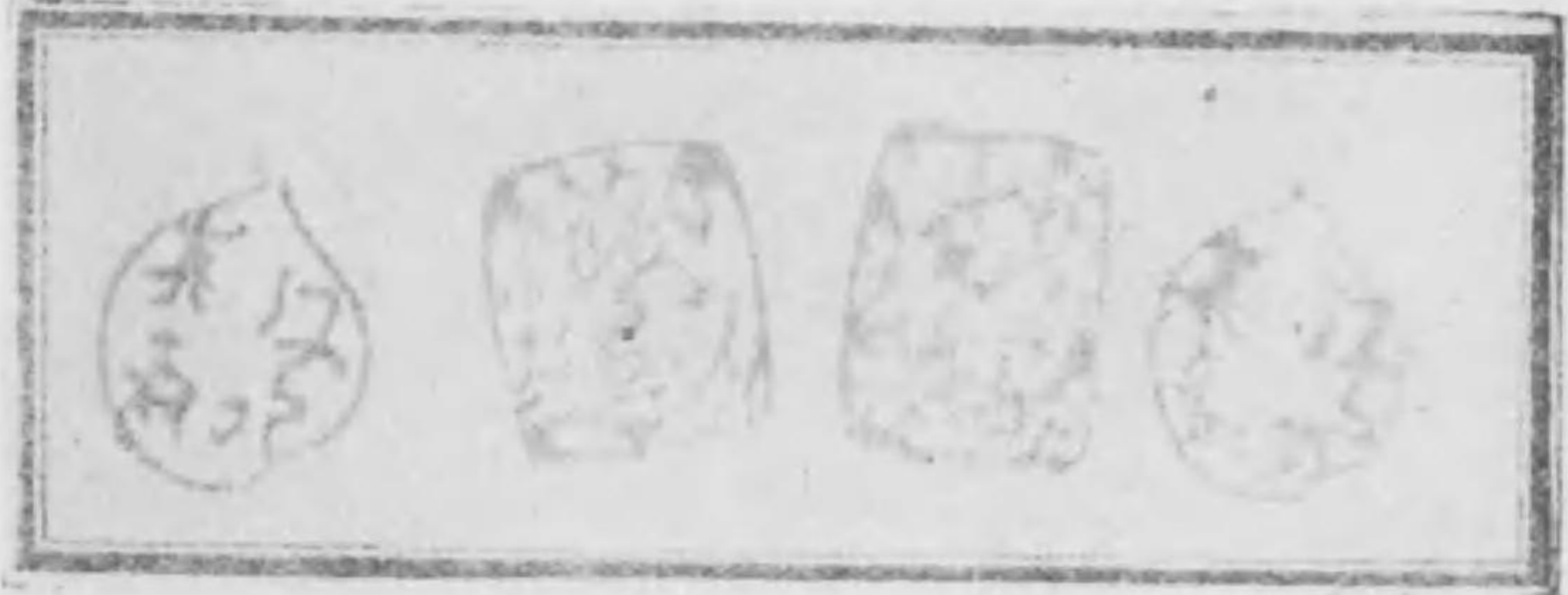
二九六
で出て「イヤ俺首つツたことはないがな、彌そんなら何處でございやす、亭主此邊に首緘ッた家は知らんがな、此二三軒先に柵から落た牡丹餅喰て咽を詰て死だ家があるが、もしそれじゃないかいな、彌「いかさま柵から吊下つたよふな家であつたト又二三軒先へ行き、或家の門にて「モシ柵から落た家はお前じやございせんかト飛だことをいふ、此家の女房と見えて「イヤ、エナ妾が家は元から爰でついしか柵へあけて置たことはおませんわいな、彌「ハア外にはござりやせんか、女「ソリヤお前間違ひじやあろぞいな、山から落た内じやおませんかいな、それじやと相の山の奥次郎の小屋が、此間の風で谷へ吹落されたといふことでおますがな、大方それじやあろいな、彌「イヤそれでもねへが、コリヤア困つたもんだ、何だか彼だか藤張分らなくなつて元も子も失つたよふだ、俺も先刻から尋ね倦で、もうくがつかりと草臥やしたとふぞ一吹喫して下さりやせト此店先に腰をかける、亭主氣の毒さうに眞盆を提て奥より立出で「サア一ぶくあがらんせ、一體お前は何處を尋ねさんすのじやいな、参宮じやあろが、お一人か但しはお連でもおますかいな、彌「さやうさ道連共に三人の所、俺は其連にはぐれて、こんな困つた事アございやすん、亭「イヤ其お二人のお連はお一人はお江戸らしいが、今お一人は京のお人で、目の上に此位な痰瘤のあるお方じやおませんかいな、彌「さやうく、亭「それじやと此方の内にお泊りなさ



藤屋の印

藤屋の印

二九七
れたさかい、直にお前様のお迎ひを出しましたわいな、彌「そりやほんたうにかヤレく感しや、そしてお前の處は何屋と言ひやす、亭「アレ御覽なされ、掛札に藤屋と書ておますがな、彌「ホンニそれく柵から吊下つたやうだと思つたが、その藤屋よ、そふして連の奴等は何處にゐやす、亭「ソレ奥へお連様がお出たといふていかんせト此聲を聞くより奥から出る道連の上方者飛で来る「コリヤよふごんした、定めし其邊うち尋ねさんしたである、此方も蒸らう尋ねまふたこつちやないわいの、マァく奥へ、彌「これはお世話になりやすト直に奥へ行く。
○若樹 こゝに出て来る藤屋といふ旅人宿です。是から藤屋が大變名高くなつて、彌次喜多の泊つた家だと云つて、是を看板に近年までやつて居りました。近年は稼業を廢したものと見えて、いろいろな物が賣物に出て、其一つは三村さんの所に徳利が来て居ります。其徳利は下り藤が書いてあつて、彌次喜多樓と書いてある。藤屋へ



藤屋の印列

泊ると其徳利で酒を飲ましたのでせう。

○霞山 此前私は藤屋に泊りました。しかも彌次喜多の泊つた座敷だと云ふ室だつたのです。さうして彌次喜多と書いた打物の菓子が五つ位出ました。それで子供の時だから彌次喜多が泊つたのだと思つた。

○若樹 私が考へますには是は儘に一九が泊つた家です。彌次が妙見町の宿屋を聞いた萬金丹の山原七左衛門と之ふのは、此時分の文藝の趣味を有つて居つた實際の人物で、文人や何かが来たら屹度世話をしたものに相違ない。斯ういふことがあります。宿屋の飯盛即ち雅言集覽を書いた六樹園石川雅望が文化元年に京都へ行く爲に、丁度文化元年四月九日に江戸を立つて東海道へ出て行つた所が、途中近江の日野で病氣になりました。二ヶ月ばかり其處で療治をして、漸く快くなつたけれども上方へ行つてもつまらぬ、歸らうと云ふので歸途に伊勢へ寄つたときに、餘程身體が弱つたけれども辛うじて

伊勢へ寄つて参宮して歸つたときの紀行、書名を草枕といふのがあります。其八月二日の條に内宮へ参つて歸るさに妙見町なる山原七左衛門を訪ひそれより向ひなる藤屋利兵衛なる宿屋に泊る、とありますから、此人が山原七左衛門といふ此處に出て居る萬金丹の看板のある家ですな。此人が非常に文人墨客と交際があつて、其手引で藤屋に案内したものだと思ひます。馬琴も享和二年の十日に「山田妙見町小倉屋長右衛門てふ旅店に宿る、此地の友人佳水(通稱山原七左衛門)來りていと深切にもてなさる」と其著釋旅漫録に書いて居ります。

○霞山 右側に藤屋があつて、左側に萬金丹屋があります。それが朝熊の萬金丹屋だと思ひます。

○竹清 朝熊の萬金丹は野間氏で、これも朝熊山の上に店があります、参宮道中に澤山萬金丹屋があるのは、皆違ふんださうです。

○仙秀 それから「棚からぶらさがつた」と之ふ趣向は「鹿の巻筆」にこんな話が出てゐる。「田舎者のどう忘れ」といふ標題で、「とほり町三丁目」としごろなる男きたりて、わかきものにむかひ、ちとものたづねましたといふ、なに事ぞととへば、ここらにたづねたき人ありと云、名はなにととへば、わすれましたと云、いる名はととへば、是もわすれました、さてとほうもない事をいふ人じや、それではしれぬといへば、わたくしははるくどほき水戸からまいつたものでござる、をし

へてくだされねば、二日ちのみちをかへります、さりとはといふ、此おとこもきのどくにおもひてせめて、かたしろでもおほへたまわらぬかとへば、名も家名もみなさすやうなと云、しばらくかんがへて、さてはむかひの上下やどにまつば屋有介が事であらふ、まつばもありもさす物じやほどにといふ、いやそれではござらぬ、さてはかゞみやはりまのかみかるとふに、それでもござらぬ、まつきつくさすものじやといふ、いまおもひつけた伊賀屋の八兵衛かるとへば、それ／＼といふてたづね逢た」と云ふ、丁度これに似たやうな話がございますが、是からでも出て来やせぬかと思ひます。——是は生田可久君が藤屋へ泊つたときに捺して貰つた判です。

○竹清 私は山田へ泊つた事はありませんが、西芳菲さんに藤屋の印を捺したのを貰つた事はあります。

上方者と北八は江戸組の太々講について、御師の方へ行しが、彌次郎見へざる故知らぬ人ばかりにて手持なく色々聞合てもわからず、せん方なく其御師の方を出たづねたくもあてどなく、かねて妙見町の藤やへとまらんと云たる事も承知の事なれば大方たづねてくるであらうと、扱こそ此所にとまりて待うけしなり、彌次郎は太々講の駕間達たるいちぶしやうを物語、大笑となりける、北八はかみゆひを呼にやりひけをそりていたりける、「まあ／＼おたけへに別條なくて目出度／＼、

いやもふ飛だ目に逢たといふはおれが事よ、時にかみのひさん、其跡でわつちも一つやらかして呉んなせへ、北「お前マア湯に這入つてきなせへ、彌「そんならそふよト彌次郎はゆに入りに行、北八はひけをそりかゝりて、北「時に髪結さん俺らが髪はぐつとねをつめて、いつて呉な、何だか此方の方の髪は、たほが出て髷がおつにながくて飛だ氣のきかねへあたまつきだ、そして女の髪もごうせへに大きくいつて何のことはねへ筑摩の鍋かぶりと云ものだ、かみ「そのかはり女子はとつとゑらい綺麗でおましょがな、北「綺麗はいゝが立て小便するにはあやまる、かみ「イヤお江戸の女中もおつきな口をあかんしてあくびさんすには、ねから色氣が醒るがな、北「それで女郎は又江戸のことだ、江戸はいき張が有から面白い、こつちのは誰が行ても同じことで、ねつからふると云ふことがねへから信仰が薄いよふだ、かみ「イヤこちの方ではお前の様なお方がいかんしてもふらんさかい、夫でゑいぢやおませんかいな、北「貴様おれを安く言ふな、コレほんのこつたか、かみ「ラットあをのかんすと切ますがな、北「イヤ切らなくてもごうせへに痛へ剃刀だ、かみ「痛いはづちやわいな、此の剃刀はいつやら研だ儘ぢやさかい、北「エ、めつそふな、なぜ剃る度毎に研ねへの、かみ「イヤそないに研ぐと剃刀がへるさかい、ハテ人様のつむりの痛いの、こちや三年もこらへるがな、北「どふりこそ痛くて／＼、一本ヅ、抜様だ、かみ「な

んほ痛いとして命に障ることはないがな、北「エ、そりや知たことよ、もうくさかやきは、いゝ加減にしてくんな、かみ「お前さかぞりは嫌ひかな、北「エ、そのかみそりで逆剃にやられてたまる者か、頭の皮がむけるだろう、もふそこはいゝからぐつと髪をつめていつてくんな、かみ「ハ、いゝコリヤ蒸らいふけぢや、此ふけのとれることがおますがな、北「どふするととれる、かみ「ほん様にならんすとゑいがな、北「エ、いめへましいことを云、かみ「ねはこないでよおますかい、北「イヤくもつとひつめて呉な、兎角こつちの方へくると髪はへた糞だ、ねをかたくつめていふことを知ねへ無器用な、かみ「さよならこれではどふでおます、トかみのひ、是みたかと云程ぐつとねをつめると、さかやきに三ツ程ひだできて目は上の方へひきつる位にかたくひつめられ、北「八かみのけが抜ける程痛けれどもまけおしみにてかはをしかめながら、北「これでよし、ア、いゝ心持だ、かみ「ナントそれでよござりましょがな、北「あんまりよすぎて頸が廻らぬ様だト此内彌次郎ゆよりあがりくる、かみ「ゆひ「サアあなた髪なされませんかいな、彌「イヤどうか湯に入たら、ぞく／＼して風でも引いた様だ、わつちはマア明日の事にしやせう、かみ「左様ならご機嫌よふと出て行、此内、女膳を持出名々へ直す、上方者は先刻よりねころびいたりしが起直りて、上方「ドレ飯くをかいな、女「今日はしけてお者が何もおませ

んわいな、彌「これは御馳走サア北「八どふだ、北「彌次さん、わつちが箸はどこにある、彌「エ、此男はソレ膳に附て有ア、北「取て呉な、どふもうつむく事がならねへ、彌「なぜならねへ、チャ／＼手前の顔はどふした、目がひきつって狐つきを見るやうだぜ、北「あんまり髪ゆひめがごうぎにねをつめていやアがつた、アイタ、首を動す度に、めり／＼と髪の毛が抜るやうだ、上方「ソレお前のお汁が溢れるわいの、アレお飯の上にお汁椀を置かんすさかい、アレこぼれたわいの、コリヤもふとつとやくたいぢや、北「彌次さんどうぞふいて呉な、彌「いめへましい男だ、そしてマアうつむかれぬ程に、なぜそんなに、かたくいわせた、もふちつと緩くすればいゝに、手前大かた髪結をいちめたるふから、上方「そじやさかい、そないなめにあはんしたのじやあるぞいな、北「イヤもふ物を云さへ頭へひけてならぬ、彌次さんどふぞ、この難儀を助かるしよふは有まいか、彌「ドレ俺がゆるくしてやろウト髪のを持ていやと云程ぐつとひつたてる北「アイタ、どふする／＼、彌「これでよからう、北「ア、ちつと頸が廻つてきた、エ、とんだめにあわしやアがつた、

あなどりしむくひは罰があたりまへのだんのならぬいせのかみのひ

○二葉 此處も格別ないやうに思ひますが、唯「筑摩の鍋かぶり」を一す——何か他にございますか

一 筑摩は近江國坂田郡入江村大字淺沼筑摩、此筑摩の「鑼祭」「筑摩祭」馬琴歳事記には「近江國筑摩の庄は大膳職の御厨の地にして此地に御食津の神を祭るこの神は稻食を掌るに依つて、里女婚を爲す時は祭禮に必ず釜鍋を戴きて神に奉ず、不幸にして少壯の間に寡となるときは再び嫁する女あり、かゝる輩は其鑼二枚を用ゆ、三たび嫁する者は三枚を戴きて神幸に使す云々」と斯ういふことがありますが、さうして其歳事記には「四月一日或は四月午の日」とあるやうですが、明治の初に出来ました「日本奇風俗」といふ本には「今は五月八日なり」とございます。其「奇風俗」には斯ういふことがござい、午後四時拍子を相圖に行列の供一同北端の御旅所を集る、左の順序にて本社へ繰出す」御祭の行列の順がございます。第一番神劍十本、第二番太鼓四個、第三番金棒曳十五人、第四番上多良村山法師五人、第五番中多良村山法師五人、第六番下多良村山法師七人、第七番筑摩村山法師十二人、第八番神女八人、第九番踊り奴二人、第十番鍋冠り八人、是が御祭の本尊様、第十一番伶人、第十二番鳳輦、第十三番神官、第十四番曳山とございます。山法師は各氏子より七八歳の男子にて勤む、襦袢布子に白縮緬の十字襷、白の手覆、紺の脚半、重ね草鞋、手に長刀又は錫杖をつく、顔は面の如く白粉を塗り、青髭、黒髭、奴髭、向鉢巻で母衣を負ふ、この母衣は縮珍緞子などの女帯二筋を交叉し白縮緬の腰帯で結付けたもの、之れに猶一本の旗、紙製の花

枝數本にて組織してある。神女は御神子のことで、俗に「しんでう」と稱へて居る、踊奴は兩掛持ちである。二人並び奇妙な足取りして行列するが、是は近世のもので古き行列にはないさうである。鍋冠の女は昔はお嫁さんに行けば必ず出たものであつて、二度目のは二枚冠り三度目のは三枚冠るといふやうになつて居りましたが、近世は少女がそれを代理することになつて居ります、此村の少女は八歳になれば必ず鍋女に出る習慣が貴賤ともにあつたさうです、其扮装は昔は白小袖に白縮子の前帯で鍋を冠つて居る。今は赤小袖に萌黄の水干、緋縮模様の裾袴、手に扇子を持つもの八人、冠る鍋は四人は角のないもの、四人は角のあるものを冠つた、是も今は眞正の鍋を用ゐず、鍋は張子になつて居ります。毎年四月八日になると鍋冠に出る子供に神主が玉串を神前で捧げて其人の人名を指名する、其指名された子女は此日より神聖犯すべからざるものとして、父兄でも之を神様の如く扱つて非常に尊び、家の者とも皆別居して居つて湯を沸して齋戒沐浴させるのにも必ず此子女のみをさせて、一切精進料理を供したと云ふことが書いてあります、それから又行列は本社へ著いても別に變つた式もなくして唯それで解散してしまふとあります。

○若樹 どうして鍋を冠るのです。元はどう云ふのです。

○二葉 さういふことは些つとも書いてないです。

○若樹 鍋を冠るといふことは婦人の仕事である。炊事を代表する、其炊事は俗に一釜とか二釜とかいふ一ト世帯を現はすものではありませんか。二ツ鍋を重ねれば二タ世帯、即ち轉じて二度亭主を代へたことを示したのではありませんか。歴史地理でしたか、日本の人民には釜を使ふ人種と使はぬ人種とがあると云ふことが出て居りました。現今でも鍋は使つて居るが釜を使はない者があると云ふことです。若しさうするとこれは釜を知らない方の人民に當りませう。

○二葉 馬琴の歳事記には「鍋釜を戴き」といふことが書いてありますね。

○若樹 畫なんかでは釜を冠つたのはない様です。

○仙秀 つまり上方の人が、鍋でも冠つたやうに、髪を鬢でも張出して、大きく結ふといふときに鍋冠りを持出したのでせうね。それから馬琴の著作堂一夕話にも鍋祭の古い繪が出てをります。たしか貞享此のものでした。

○二葉 上方のは鬢つとが張つて居ますから、あれで言つたものではありませんか。

○若樹 「立つて小便するにはあやまる」江戸でこそ女の立小便はないが、今でも東京近在へ出れば立つてやつてをりますね。だからどうも關東者として威張る譯には往かんですね。それから「信仰がうすいよふだ」といふのはどういふ所から轉じて來たのでせう。

○仙秀 張合がないといふことを云つたのでせう。面白くないとか有難くないとかと云ふのでせうね。

○二葉 侮つた報いで罰があつたと云ふを伊勢へかけて綴つた迄で深い意味がないやうに思ひますが、何かございますか。

○若樹 唯罰があたるを「あたりまへ」と掛け、「伊勢の神」とかみゆひと掛けたのでせうね。

○霞山 伊勢の神よりも、伊勢の神風に掛けたのではありませんか。

○若樹 神様でせう。

○霞山 此「くびがまはる」といふのはどういふのでせう。斯う廻るやうになつたと云ふ意味でせうね。

○竹清 喜多八の髮結で思ひ出しましたが、死んだ晴風さんが細君と伊勢から京阪をまはり、細君のお里の飛驒へ行かれた時、私の家へ泊つてゐるの時に、晴風さんが若い時、初めて友達と上方見物に出かけた。何でも大阪で知人の家に泊つてゐる時に、上方のわさびはチツとも辛くねへつていふんで、大さうオツけなしたさうです。さうすると宿のかみさんが、あなた方はそばをたべるかといふので、くふといふと出立の前の日にもりをくはせてくれたさうです。箸でそばを持上ると一かば下は一面に山葵が布いてある、辛い辛い辛い顔をしてたべても、涙

がほろ／＼こぼれて弱つたと話されました。江戸ッ戸にはえてかういふ失策の實譚もあつたのでせう。それで序だから餘談を申しますが、何でも江戸ッ子の旅に雨なんかふるもんけへといふ勢で、雨具をもたなかつたさうです。するとその大阪のおかみさんが土産だつて二人に包んだものをくれなさうです。動かして見るとから／＼音がする。まあなんでもいゝからつて貰つてきた處、大津の先で俄雨にあつて、雨やみをして居ると、腹がへつてきて困つて、其包に何か食物でもあるだらうとあけて見たら桐油が一枚宛とはじけ豆が一袋あつて助かつた。それから山越しに伊賀へ出た處、山道で大勢の犬に吠えられて、何でも犬の眞似をするといゝといふので、四ツン這ひに這ふと犬の奴が鼻をなめにくる様で仕方がないので、連れの男が這ふ、晴風さんが手頃の棒をもつて犬を追拂つたさうです。それから伊賀へ出て古市でおやま買ひもし、神社から船へ乗ると、連れの男が懐から何か出してはひとり／＼笑つてゐる。氣味のわるい笑ひかたをするので、とつつかまへて見ると、おやまさんの文なんですとさ、あすこぢやアきつとあとで宿へ文をよこす習慣で、文をかく人が雇はれてゐるので、上の方へ紅のついた半切れたとか聞きました。併し本ものは鼠半切でなくは、幅がきかぬといふことです。何でも其船がシケをくつて蘆州へ著いたさうです。まだ江戸まで大分珍談をききましたが、餘談ですから此位にして置きます。

自から斯よみて打笑ひつゝ支度仕廻、早や膳も退たるに何れも打くつろぎて話の序でに、上方「ナント今宵これから古市へ行こかいな、彌「未だ宮廻りもせぬ先に勿體ねへやうだが、儘の皮やらかしやせう、上「いて見やんせ、俺やあこで年々捨た金が千や二千のこつちやないさかい、何程なと俺が請込みじや、サア早う行かんせんかいな、彌「エ、そんならおれも髪月代すればよかつた、上「御亭さん／＼ちよと来ておくれんかいな、此宿の亭主「ハイ／＼御用でおますかいな、上「お江戸のお客がこれから山へ登るといな、妙見町の通言に古市へ行くを山へ登るといふ、亭「宜ござりませう、お伴して参りませよ、上「アノ牛車樓か千束亭にしよじやないかいな、北「太鼓の間とやらは何屋にありやす、亭「太鼓のやおません鼓の間の事かいな、ソリヤ千束屋でおますがな、上「その千束屋がよござりませよト皆々支度する内早や日も暮る時分は宜と亭主を案内として三人共出掛け行程に此妙見町の上は直ぐ古市にて娼家軒を並べ彈立る伊勢音頭の三味線勇ましく、浮れ／＼て千束屋といへるに至れば女共皆々走り出、「よふござんした、直に御二階へ、藤屋の亭主「お連れ申ても宜かな、サア御案内致しませよト亭主を先に各々二階へ上り座に付と、上「時に彌次さんかうしよじやないかいな、お前方をお江戸でゑらい大きな店の番頭衆にしよじやないかいな、藤屋「そないなことがよござりませよ、上「併し誰らんしてはあかんわいの、

上店といふもんじやさい、京談で遣んせにや工合が惡かろがどふじやいな、彌「そんな事は持てこいだ、すつぱりとわつちが上方でやらかしやしやう、コレ〜女子衆〜、ちよと来てお呉れんかいの、わしや何じややらとつともふはやえう咽がかわくさかい茶々一つ持て来てお呉んか、女「ハイク、彌「ナント京談ゑらかい〜へ、畜生奴が、上「イヤきよとい〜、できた〜、ト此内女酒肴を持出勸める、藤屋初めて段々に廻すと京の人引請て「コレお仲居、女郎さんはどふじやいな、お江戸の豪いお店の番頭さんじやさかい、何んじやあるとおやまさんのありたけ出さんせお氣に入ると百日も二百日も御逗留で、お金の入事は根から英から頼とお構いなお方じや、藤「さよじやわいな、私が去年お江戸へ参じた時、お店の前を通りましたが成程ゑらひ大家じや、あなたの御支配なさる方は兩替店と見へましたが、これもおつきなお店でおますわいの、彌「ナニサ格別ゑらい店ではないわいの、間口がやつと三十三間あつて、佛の数が三萬三千三百三十三人暮じやさかい、ゑらい賑かなこといな、藤「京のお店はたしか六條数珠屋町であつた、彌「さいのわたしがとゝさんかゝさんはさぞや案じてるやさんすじやあるにこないに女郎斗り買ふて、とつともふゑらいやくたいじやく〜、女「これいし皆お出んかいなト呼立る聲に四五人立出「どなさんもよふござんした、彌「ハ、アどれもゑらい出来じやな、上「番頭さん盃をちとあつちやへさゝんせ

彌「アイもし一つあけふかいト其中で一番美しいやつへさしてにこ〜してゐる。

○共古 牛車樓といふのば備前屋ですな。備前屋が此牛車樓と云つて近頃まで伊勢音頭をやつて居つたのですけれども、大正四年六月三十日頃に備前屋が伊勢音頭を廢しました。それは三村さんから聞いたです。伊勢音頭をやつて居つた家は洲屋清五郎、杉木屋彦十郎、備前屋即ち牛車樓、それから千束屋、是は三村君が御出でになつたら悉皆分るでありますけれども生憎今日は御出席でありませんから後で入れることに致しませう。——家に依つて伊勢音頭が少し宛違ふさうです。

○竹清 天明のこんにやくゑ物語を見ますと「そんならむかひの丸にちきりののふれんの有るやたいに致しませふ、あそこが爰で第一ゑい内でございます」とあります。こゝで伊勢音頭をやつてゐます、後の様にせり出しなどにならぬ前は、どこの女郎やでもやつたので、且つ其女郎屋に興廢もありません。或はこのちきり屋が千束屋のもぢりかも知れません。

○若樹 其時分に考へて見ると備前屋には「伊勢名物通神風」といふ五丁物の草雙紙の配物が出来て居ます、式亭三馬の作です。是は文化十五年です。斯ういふ配り物が出来て居つた。編中には藤屋の主人も繪入になつて出て居ます。若し此藤栗毛の文化元年あたりに備前屋と懇意だつたら、此彌次喜多を千束屋へ持つて行くことはなかつたでせう。やはり備前屋へ持つて行つたでせうが、備

前屋は此時分には藤屋とは懇意でなかつたと見えますね。

○霞山 此初めの方に「まだ宮めぐりもせぬさきにもつてへねへよふだがまゝのかはやらかしやせう」と云ふのは、何か掛けて居るのでせうか。



(藏清竹) 利徳の樓太喜次彌

○若樹 やはり「まゝよさんどかさ」の「まゝ」でせう。
○共古 もう斯うなつたら、やつつけてしまひませうと

云ふ意味でせうね。

○仙秀 宮めぐりの所はつまり太神宮様の末社をめぐつたのでせう。

○若樹 内宮外宮のことが本義ではないか。

○二葉 きよとい(氣疎)ものだといふ意味でせうね。

○若樹 さうでせうね。

○二葉 間口が三十三間、京のお店はたしか六條数珠やまち、これを引掛けた所はどうです。

○筑波 それは梅川忠兵衛の……。

○仙秀 さうぢやないでせう。新口だけの文句ですな。あれは新口村は自分の故郷で二人一緒に死ぬのが本望だと忠兵衛が云つたら、それは嬉しうござんせう、去りながら私ごと、様か、様は京の六條の数珠屋町嚙ぞや今ごろはせんぎにあうてゐやんせうと梅川がいつた、それをもつて來たので、前の三十三間堂は關係が無いのでせう。

○筑波 三十三間堂で案内する人が佛の数が、三萬三千三百三十三とやつて居ませう。それを六條数珠屋町と掛けて來たのでせう。

○仙秀 此間赤坂の或る古道具屋の店に、備前屋の一枚摺がありましたけれども、それは橋本周延の描いたので、櫻洲樓としてあります。牛車樓といふ古い所を棄て、しまつて、櫻の間とかといふ所から引いて來て採つたらしうござんせう。樓名をさうかへていつたこともあつたのでせう。それにも伊勢音頭の唄がござんせう。

○共古 大正四年六月三十日に備前屋の家がしまつて第二が興つたといふ。

北「おいらは太鼓の間が見度がどふだ、上「又太鼓の間と言はんす鼓の間にやわいな、女「鼓の間には是れもお江戸のお客様方が子共衆寄て踊せてじや、アレ聞かんせト此内の奥鼓の間に踊り始めると見へて三味線の音聞へる、チテチレ〜チ、〜、トテチン〜、伊勢音頭、唄「涼風や塵も拂ふて木隠れの池に浮べる月の顔化粧は廊のいろ〜にヨイ〜ヨイ〜ヨイ〜よいやさア、上「アイヤア奥で踊を始めおつたそふじや、こちもコリヤ面白なつて来た、ちと大きなもんでやろわいな、彌「そふさ飛だ乙に浮れて来た、もう京談も何も面倒になつたヨイ〜ヨイ〜ヨイ〜よいやさア、上「ヨイヨイトテチン〜、又奥の唄「目立つ浮名も面白き和らぐ唄や三味線に足もしどろに立廻り亦も今宵の約束はヨイ〜ヨイ〜よいやさトテチン〜、上「コリヤゑらい〜、時にと下拙の私めが相方の女郎さんはコレお前、名は何といふぞいの何じやお辨有難いの、誰あるふ勢州古市千束屋のお辨女郎といふ美しい可愛しい女の辨才天女様は忝なくも尊くも京都千本通り中立賣ひよいと上ル邊栗屋與太九郎様の相方じや、ちと側寄せんかいのト手を取り引寄せる、此京の人は酒に酔と何でも町噂にくどくいふことが辭にて段々管を巻かける、彌次郎は始に我盃を差たる女郎故、自分の相方と思ひるたりしに、京の男我相方の様にいふ故躍起として、彌「コレ京のお客、ソリ

ヤわしが相方の女郎さんじや、京「イヤ何いはんすぞいの、コレ女中のお仲居、お前、名は何と云ふてじや、女「ハイきんと云ふわいな、京「ソレ〜勢州古市千束屋の仲居おきん女郎に京都千本通り中立賣ひよいと上ル處邊栗屋與太九郎が先刻内々引合ふて置た、アノ美しい可愛らしい辨才天女のお辨女郎といふおやまさんは則京都千本通中立賣、彌「エ、喧しい千本も百本もいるものかへ、何でも斯う初天邊におれが盃を差して置たト云ふは江戸にては女郎の座敷に直るとす〜に盃をさして相方を定むれども此邊にては左様の事はなく唯だなく〜にて茶屋の女房或は女などに囁きて、彼は誰、此れは誰と相方を極めて置ゆへ、京の人先刻仲居に渡りて此中にていつち上代物を自分の相方と定め残を彌次郎北八と己が作略して極めて置しゆへ彌次郎は其事一向知らず、江戸の格にて盃を差たる女郎を我相方と思ひるたりし故、扱こそ此いさくさ起りたり、仲居彌次郎を宥めて、仲居「これいしアノ女郎さんはな此人さんの相方、お前さんは此島田備さんじやわいな、彌「馬鹿アいふな、此中でアノ女郎が目付たからそれで俺が盃を差したに違ひはない、其處でわしが女郎かいな、京「ハテ悪い合點じやわいの、此方さんはアノ江戸は何處じやいな、彌「江戸は神田の八丁堀板面屋彌次郎兵衛様と言ちやア、ちとひねくつた奴様だア、京「其のお江戸の神田八丁堀板面屋彌次郎兵衛といふひねくつた奴様が京都千本通中立賣ひよいと上ル所邊栗屋與

太九郎が相方の女郎、勢州古市千束屋の、彌「エ、何を吐しやアがる、邊栗屋與太九郎も呆れら
 ア、京「イヤ此所なお江戸神田八丁堀板面屋の彌次郎兵衛殿、京都千本通中立賣、上ル所邊栗屋
 與太九郎を京都千本通中立賣上ル所邊栗屋與太九郎殿といへばまだしも、それを京都千本通中立
 賣上ル所邊栗屋與太九郎と呼捨にさんしたの、そこでもつてからに京都千本通中立賣、彌「エ、
 喧しい、よく饒舌る野郎だ、北「おらア其様事より太鼓の間が見てへ太鼓の間はどくだく、女
 「太鼓の間とは何じやいし鼓の間の事かいな、北「ヲ、其鼓々々、京「イヤ鼓じやあるが、何じや
 あるが、此邊栗屋與太九郎が相方じやわいの、藤「コレ悪く洒落るな、何でも鼓の間は、俺がの
 だ、悪い敵役じやアねへが厭でも抱て寝る、藤屋「ハ、ハ、ハ、彼廣い鼓の間をかいな、彌「ヲ、廣
 くてもせまくても頓著はねへ、俺がものだ、京「イヤくくくくそりやさ、んわい、彌「ナニさ
 んんことがあるものか、誰が何といつても京都千本通中立賣板面屋彌次郎兵衛様が相方だは、
 京「イヤ此お江戸神田八丁堀上ル所邊栗屋與太九郎の買ふたのじや、北「ハ、ハ、ハ、お前方は何を
 言ふやら、どつちがどふだが薩張分らなくなつた、女「そして此お方は京のお方じやと言んした
 に言語が何時の間にやらお江戸じやわいな、彌「筥棒奴、この忙しいに京談が遣つてゐられるも
 のか、女「餘りお前さん方がいさかふてじやさかい、ソレ見さんせ女郎さん方は皆逆て行かんし

たわいな、彌「忌々しい、もふけへるべい、女「マアようおますがな、藤屋「モシ斯うしよかい
 な、これから柏屋の松の間をお目に掛けふわいな、但し麻吉へお供しよかいな、彌「厭だ、
 俺アぜひけへる、藤屋「ハテ宜ござります、彌「イヤ留やアがアるな忌々しいトすと立ち
 歸らうとする、中居共立掛りていろく、挨拶し留ても留らず、振放し出掛る處へ相方の女郎初江
 立出で「これいし何じやいし、彌「留るなよせへく、初「お前さん斗りそないになア歸るく
 と言んすがな、妾がお氣に入んのかいし、彌「イヤそふでもねへがこゝを放せく、初「妾や厭
 いしト又出掛そふにするを引提へ無理無能に羽織を脱せる、彌「イヤ羽織をどふするよこせく、
 ト言ひ乍ら父紙入責人を奪れる、彌「コレサおらア歸るく、初「情の強い人さんじやト言ひ乍
 ら帯をくつと引解き著物を脱がせよふとする、彌次郎は垢染たる越中褌をめてるたりしゆへ、
 褌にされては堪らぬと大きに辟易し著物を兩手に押へて彌「コレくもふ勸忍してくれ、初「そ
 じやさかい此所にゐさんすか、彌「居るともく、仲「初江さんもふ勸忍してやらんせ、藤屋「サ
 アサア宜ござりますこれへくト彌次郎が手を取り元の所に引据る、北「ハ、ハ、ハ、面白へく、彌
 次さん斯もあらうか、
 むくつけき客も今宵はもてるなり名はふる市のおやまなれども

○霞山 此杉本屋は白井清右衛門と言つて居りましたが、私が國に居る時分に廢業して、宿屋になつて居ります。それから備前屋の息子は太田助四郎といつて中學校で一緒に居りましたが、今は法學士で逡信省の參事官か何かやつて居ます。

○竹清 白井清右衛門は油屋のこつてすよ。こゝがお紺貢の家です。これは早く旅宿になりました。お紺貢の話も百人切は愚か一人も斬りはしなかつたのを、わざと傷けて訴へ出たことゝて、齋宮は母の勧めで自殺して、お紺さんは七十許で、松坂へ來てゐるなど、傳へてゐます。油屋へ行くとお紺さんの部屋だなんて見せるさうだが、吉原のおいらんぢやあるまいし、古市のおやまさんに部屋もないものだと思つてゐました。油屋も何か銀行に關係して、旅宿もやめたと思つてゐます。杉本屋も數年前にやめ備前屋もやめ、これで伊勢音頭は廢滅したのですが、此節再興したいといふ噂があるのです。時務を知るならば再興はしませんね。元來何と考へたのか外宮さんから内宮さんへ三つ往來を造つたのですね、一つは電車道、二つは御成道といふ、恐ろしい廣い通り、三つは舊道です。それでどれも淋しくなつた様です。乗合の馬車自動車これに人力車と電車とあるのです。駕籠があれば交通機關の展覽會ですね。自然古市を通る人が少ない。今ちや古市を知らずに參宮する人が多いでせう。

○仙秀 音頭の唄は時々誰か作つてやるといふと變るでございませうね。此間國技館でやつたあれを見て來ましたがね、一番最初に神風や伊勢の何とかと言ひましたがね、是ではないかといふ思ふ氣がしました。一番しまひに「ヨイノ、ヨイトサア」といふことを言ひましたがね。其間に何を言つて居つたか分りません。それから斯ういふ唄を書いたものを賣つて居りません。あつたら欲しいと思つて居りましたが、時々都踊のやうに違ふでせうね。

○若樹 本唄があるでせう。

○共古 それは川崎音頭を作つた人は、俳諧師で名高い人で、三村君が人名までも調べられて居ります。延年時分の人です。伊勢の川崎の人でせう。

○若樹 京都千木通り中立賣、ひよいと上る、邊栗屋與太九郎といふことに、何か意味があるのでせうか。

○霞山 「ひよいと上る」といふから、何かあるのでせう。「ひよいと」といふのと「邊栗」といふのと、何か關係があるのでせう。

○若樹 「ひよいとあがる」といふことを京都で云ひますかね。

○霞山 「ひよいと上る」といふことは、何か板面彌次郎兵衛みたやうなものがあるのでせう。

○二葉 伊勢の方の女郎は源氏名といふものはないですか。

○霞山 あります。

○仙秀 此頃はどうでせう。

○共古 初江といふのが本文にありますから源氏名があつたのです。

○若樹 此彌次が「それでおれが、盃をさしたにちがひはない、そこでわしがおやまかいな」と云ふ是はまだ京談が残つて居る所を見せる爲に書いたのでせうな。

○二葉 「ちとひねくつた奴さまだ」と云ふ……。

○若樹 「ひねくつた」といふのは、やはり面倒といふことなのではありませんか。ひねくつたんだから手数がかゝる奴さんだ……。

○霞山 麻吉といふのは、やはり女郎屋か何かでせうな。柏屋は大きなところですか。四軒の中ですか。

○竹清 麻吉は料理屋です。よく書畫會などのある家です。塗箸で頭を赤くぬつた丸い竹の箸を麻吉箸といひます。慶應頃のものには備前屋牛車樓、杉木屋菊壽樓、油屋油樓、柏屋柏樓と四大樓としてあります。千束屋は廢したのと思はれます。

○仙秀 「なんでもつゝみの間はおれがのだ。わるい敵役じやアねへか」といふ、是も芝居詞から來て居るのでせうね。

○若樹 是も何か臺詞にあるのでせうよ。——「むくつけき」といふのは、何かあるのでせうか、語原は……。

此一首に皆々笑ひを催し藤屋の亭主仲居どもが、そこら取片付けて、それ々に座敷を設け、酔倒れたる上方者を引たて、案内するに、北八も俱に出行ばあとに、彌次郎兵衛獨り残りたるに女「サア〜お前さんもちとあちらへ、彌「ドレ行やせう、どこだ〜ト云ひながら立て行、此彌次郎至つて見へものにて、かの煮しめたる如き禪締たるがことの外氣に掛りひよつと、見付られたら恥のかきあけならんと、懐中の中にて、そつとはづし、れんじの窓より庭の方へほうり出し、後先を見廻し人の見ざるに安堵して仲居の跡に引添ひ行く、斯くて夜も更渡るに奥の間の川崎音頭も自から靜り旅客の聲の喧嘩く鐘の音も早や七ツ響て鶏の聲萬戸に語り夜も白みかゝる明窓の障子に驚き起上りて目を擦り乍ら、京「サア〜どふじやいな起さんせもういのわいな北「彌次さん日が出たアけへらねへかト兩人、彌次郎が寢てゐる所へ來り起す、彌次郎起て「ヤレ〜ぐつと一寢入にやらかした、女郎「これいし今日もゐるさんせ、彌「途方もねへけへる〜皆

々支度して出掛る、女郎共送りて廊下に出、一人の女郎、櫛子窓より庭の方を覗き、「これいしく、アレ見さんせ庭の松に禪がかゝつてあるわいなア、彌次郎の相方女郎。初江のいてかんせ、ほんに厭いな誰じやいな。彌ハ、ア這奴は可笑い、羽衣の松じやアねへ。禪掛けの松も珍しい、北「彌次さんお前のじやアねへか、初「キンニそれいしあのさんの禪じやないかいな、ト彌次郎が顔を見て笑ふ、彌次郎は背に櫛子より捨たる禪庭の松に引掛りて吊下りるるを可笑く笑ひ乍ら流石それとも言れず平氣にて「ナニ途方もねへ彼様汚ねへ。禪をナニおいらがするものか、初「そじやて、ナ昨宵妾が此お客さんの著物を脱すとてなアよ見たが彼様な色の禪じやあつたわいな、京「ヲ、そふじやあるぞい、彌「馬鹿ア言はつせへ、おらア木綿禪は嫌ひだ、何時でも羽二重を締てるる、初「ヲホ、、嘘やの、あれじやいし、北「いかさまおいらも見覚えがある、確に彼だろう、それが嘘なら彌次さんお前今裸になつて見なせへ、今朝ア宿入の奴様で振てるるにちけへはねへ、初「そふじやいしヲホ、、これいし久助どん、その禪はお客さんのじや取てくだんせと庭に掃除をしてる男を呼掛て指圖すると、此男竹箒木の先にて彼禪を突掛て取り櫛子の前へぐつと差出し「さあらば禪をまるらそふ、ソレ取んせどふじやいな、初「ヲ、くさ、北「ハ、、彌次さん手を出しなせへ、彌「エ、情ないことを言ふ、おれがのじやアねへといふに

北「そんならお前のをまくつて見なせへト彌次郎が帯解にかゝれば振放して其儘逃け出して行く、皆々「ヲホ、、ワハ、、ト大笑ひして送り出る、三人共此所を立出ると、彌「エ、忌々しい北八奴がおれに赤恥をかゝしやアがつた、北「松に禪の吊下つたも珍しい、ふんどしをわすれてかへる浅間獄萬金たまをふる市の町

- 共古 「宿入のやつこさま」といふのは……。
- 若樹 奴が先供で槍を振つて参る、其事を云ふのではありませんか、毛槍を振る……。
- 二葉 宿へ入るときは、何かわけがあつて奴が毛槍を振るのですか、間は振つて居ないですか。
- 共古 間は振つて居ないです。足拍子を揃へてホンの儀式にやるのです。「さあらばふんどしをまいらそふ」、是は三番叟でせう。
- 若樹 三番叟の「さあらば鈴をまるらさふ」といふのをもちつたのです。「あないな色のまはし」まはし」といふと「ふたの」みたやうな物を「まはし」と云ふやうに思はれますが……。
- 共古 伊勢ではさう申しますかね。どうですか。
- 霞山 私は知りません。
- 若樹 けれども「まはし」と云ふのは、女の方のものから、總稱になつたのではありませんか。江

戸では「まはし」と云はない。

○二葉 私の國なんかでも、人に依つては「まはし」と云ひますがね。一般には云はぬやうです。

○共古 「アレ見さんせ庭の松にいもじがかゝつてあるわいなア」彌次郎のあひかた初江「のいてか
んせ」と云ふのはどうです。

○若樹 「のいてかんせ」は「おどき」と云ふではありませんか。見えないからおどきなさいと云ふ。

○二葉 「かんせ」といふ言葉はありますか。

○若樹 「やてかんせ」といふ詞があります。遣つて行かんせでせう。此かんせと同様でせう。

○霞山 「しまさんこんさん」、やはりあれで云ふでせう。「よつてかんせ」といふ所から、あんな所
から来たのでせう。

○若樹 道中で失策の多いのはやはり禪とか、大便だとか、小便だとか、身に附いてまはるものに
起るのは自然の理です、今の人でも免れないから……。ふんどしをわすれてかへる「朝」と「朝熊」
「萬金たま」と「萬金丹」と掛けて、萬金丹は朝熊の名物ですから、朝熊嶽から萬金丹とかける。
萬金丹から萬金たまをといひ、玉をふるのだから「古市」へ掛けて居る。

斯て妙見町に立歸りたるに、其日は空も景色いと長閑なれば急ぎ内外の宮廻りをせばやと支度あ

らましにして立出るに、行程なく今戻りし古市の上り口にはや見世出して、めい／＼小屋に引立
るいにしへのお杉お玉が面影を寫せし女の二上り調子「ベンベラ／＼、チャンテン／＼／＼」
トむしやうに引立る唄のしやうかは何とも判らず、往來の旅人、此女の顔に錢を投付る、それ
を顔にてよける、彌「あちらの新造がゑくほへぶつつけてやろうト錢二三文投るとちやつとよけ
て當らず」ベンベラ／＼、北「ドレおれが當て見せやう、ハアこれはしたり、京「なんとしてお
前方がどないにほり付さんしても、てき等が當さずもんじやないわいの、彌「こんどは見なせへ
ハアこれはいな、北「チャ／＼差くるみやらかしたな、それでも當らぬコリヤ仕様がある、あん
まり面が悪いトちいさな石ころを拾ひて投付ると、かの女口にてちよいと受、投返せば彌次郎の
かほへびつしやり、北「ハ、ハ、ハ、こいつは大笑ひだ、彌「ア、いてへ／＼、

とんだめにあひの山とや打付し石返したる事ぞおかしき
斯て爰を打すぎ中の地蔵町に至る、左りの方に本誓寺といふ勝景の地あり、又寒風といへる名所
もあり、五知の如來、中河原、さまざま／＼するすに違なし、夫より牛谷坂道にかゝれば、女乞食共け
はひ飾りたるが往來に錢を乞ふ、又十一二三の女子ども紙にてはりたる笠の色取れるを被りて「や
てかんせ、お江戸さんじやないかいな、さきな島さん、花色さん、頬被りさん、やてかんせ、ほ

うらんせ、彌「やかましい付なく、乞食「アノいわんす事いな、お江戸さんじや、ちやとくだんせ、彌「エ、ひつばるなソレまくぞくとよい加減にはらくと錢をほうりだせば乞食共各々ひろひて「よふくだんしたやトひとり〜禮をいふ、此先に又七八歳ばかりの男の子白き鉢巻をして袖なし羽織に、たちつけなどはきたる手にさいはい扇など持おどる後に編笠きたる男さゝらをすりて「ヤレふれ〜五十鈴川ふれや〜千早振神のお庭の朝清め、するやさゝらのゑいさら〜ゑいさらさソレてんちうじや、はりひぢじや、やてかんせ〜、彌「ソリヤやてかんすぞ、しかも四文錢だ、乞「四文せになら釣を三文くだんせ、彌「こいつ蟲のいゝ事をいふ、時にこの橋は宇治橋と云のか、京「さよじやア見さんせ、網で錢をよふ受てじや、北「ドレ〜ト橋の上よりのぞきみれば、竹の先に網を付旅人の投錢を受とめる、京「彌次さん小錢が有ばちよとかさんせト彌次郎が錢をかつてさつ〜とほうり付る下にはみな〜受止る、京「ゑろふ面白いな、よふ受くさる、もちつとほつてこまそかい、コレ北八さんお前もちとかさんせ、ソレ又ほろぞ〜、ハ、ハ、ハ、ゑらい〜、彌「コレ京のお人、お前人の錢ばかり取て投る、ちとお前の錢をも投なせへ、京「よいわいなお前方の錢ちやて、わしが錢ちやて、變りやせんわいの、彌「それだどつてあんまりあたじけねへ、京「ナニわしが此まい参宮した時はな、聞んせゑらいあほじや

あつたわいな、こゝで錢五貫か十貫ほつたわいの、あんまり面の悪い程よふ受おるさかい、何じやろと、こんどは網破つてこまそと、懐ろに丁銀が一まい有たをツイほつてこましたら、矢張網で受くさつたさかい、コリヤどふじやいな、丁銀ほつたら網が破りよかと思たに、ねからたわいじや、どうして網にとまりくさつたしらんといふたりや下におる奴めが、ソリヤとまる筈じやとぬかしくさる、なぜじやといふとハテ網の目に金とまるじやとゑらふわしをへこましくさつたわいのハ、ハ、ハ、サア〜いこわいな〜、

なけ錢を網に受つ、往來の人を茶にする宇治橋のもと

○若樹 是はお杉お玉の二人列んで三味線を弾いて金を撥で受けるといふのが名物で以て昔から流行つたらしいです。是は（本を示す）明和のお蔭参の時に出来た鳥居清經の畫いた黒本です。これにも出て居ります。

○仙秀 織留にも書いてありますからね、書いてきました。「又間の山の乞食共は遊女の如く小袖の色をつくして味噌漉さけたるもおかし、其姿には似ざりき、中にもお杉お玉とて二人の美女あつて身の色を作り三味線をひきならし、あさましや女の末と伊勢節をうたひける、毎日の参詣仇惚れをして爰に立ち止まり前なる眞紅の網の目より顔の内を狙ひすまして錢投げ付けたるに一度もあてた

る人なし自然と顔をよける事を得たり、ある時江戸より参りたる人百錢を投げつけしにお玉がかほにあたり額にすこしの疵をつけし由聞し、諸國より随分大氣なる人参りけれども錢百文なけつければ是が初め也、大方世の人の心さのみ變らぬ物ぞかし、それから今山中先生の抑しやつた京傳のお杉お玉二見の仇討といふ本を一寸見ましたが、やはりお杉お玉になつて敵を探す、といふ趣向になつて居つて、参宮名所圖會にある繪が其處に出て居りました。

○若樹 昔あつたのでせう。

○仙秀 西鶴のを見るとやはり昔お杉お玉があつたといふことがありますが、其前からあつたものと見えます。

○共古 初めだけらしいです、それが名高い女らしいです、間の山路が出来たのは天正頃、それから後彼處に人家が殖え——先程一寸申上げましたが、そんなやうなことでありますから、其頃お杉お玉といふ美女があつて評判になつたことかと思はれます。

○若樹 此狂歌ですな。とんだめに遇つた」と「間の山」と掛けて「とんだめにあいの山とや」といひ下の句の「石かへしたる云々」は「意趣返しにあつたやうなことがをかしい」といふ。それから牛谷坂道にかゝれば女乞食ども澤山に出て居る。其中に十二三の女が紙にてはつた笠のいろどれる



助の代千木鈴 玉お杉お

をかぶりて、やてかんせおゑどさんじやないかいな、さきなしまさん、はないろさん、頬かぶりさんやてかんせほうらんせ」是は皆道者の人を呼掛けるので、縞の著物を著て居るからしまさん、花色の著物を著て居るからはないろさん、頬被りして居るから頬かぶりさんと呼かけるので、しまさん、こんさん、はないろさんと云つたのはさういふやうな所から云つたので、それからおこん貢などの狂言に迄も探つたのだらうと思ひます。

○共古 しまさん、こんさん、なかのりさんは皆此處から出たのでせうね。それから男さゝらをすりて「ヤレふれ〜いす〜川ふれ〜」ちはやふる神のおにはのあさ清め

するやささらのゑいさらくゝゑいさらさソレでんちうじやはりひじややてかんせくゝ」

○若樹 それはさゝら唄とでもいふのでせうか、分りませんな。でんちうじやは殿中ちや、張肘ぢやで、殿中で、張肘をして威張つた形を云ふのではありませんかね。

○共古 彪のふり方でもあるのではありませんか。是は知りませんがどうでせう。

○霞山 やつはり張肘をして行く人のことをてんちう、そんなことはありはしませんか。

○若樹 それから、この橋はうちばしといふのか、さよじやアレ見さんせ網でせにをよふうけてじや」といふ、是は近年までやつて居つたですな。私が明治二十九年に行つた時まではありました。今の彼の有松法制局長官、彼の人が三重縣知事をして居つたときにそんなものを悉皆ぶつ拂つてしまつたのです。

○竹清 三十五年頃はまだあつた様です。

○共古 其網が四角な網になつて居ります。けれども是は違ふさうで、圓い網ですか。

○若樹 三角だと思つて居りました。

○仙秀 繪が出て居ります。

○共古 是は四角な網です、所が三村さんは是は橋も違つて居るし、網も違つて居ると云つて居られました。ました。

○若樹 長い棹ですよ。だから此處に下に立つて居ても随分先までズツと出して受けられるです。十間や十五間先のものまで、受けられてしまふ。それが三人も立つて居るから大抵何處から投げられ

ても外れつこはないです。
○竹清 畫といふのは馬琴の黄表紙臍ワカシ西遊記の畫のことでせう。橋も昔は反りが強くて、こつちから向うの鳥居の頭が見えぬとかいひます。此前の橋より今度の橋の方がいくらか反りが強いと思はれます。こゝへは参宮名所圖會の畫を入れたい。これには水へ落した錢を拾つてゐるらしい網受の故實もある様です。

○共古 「網の目にかねとまる」といふのはどうです。

○若樹 其洒落が分らない、どうも弱つてしまつた。

○共古 「網の目に風とまる」といふことがあるです。是は諺にあります。

○若樹 ではそれですよ。

○共古 餘り違ふではありませんか。

○若樹 京の人だもの……。



宇治橋 鈴木千代の助

○共古 それは古今六帖に「人の心をいかゞ
たのまん」といふ句に、人々上の句をつけ
たる中に、貫之の「網のために吹きくる風
はとまるとも人の心をいかゞたのまん」
といふ附句があります。「網の目に吹きくる
風はとまるとも」是から「網の目に風とま
る」といふ諺が生まれましたと思はれます。

○若樹 だけれどもマア兎に角古い言葉です
ね。やはり金と風で宜いのでせう。さうい
ふ諺を知らないから些とも分らない。そ
れから狂歌です。ね。「なげ銭をあみにうけ
つゝわうらいの人をちやにする宇治ぼしの
もと」唯宇治は茶所であつて宇治橋と同じ
だから往來の人を茶にする、是だけの話で
はないのでせうかね。

○仙秀 それで宜しうございますね。

是より内宮一の鳥居より四足御門さるがしらの御門を打過ぎ御本社に稽首奉る、是天照皇太神
にて神代よりの神鏡神劔をうつて鎮座し給ふ處なりと、

日にましてひかり照そふ宮ぼしらふきいれたもふ伊勢の神風

茲に朝日の宮豊の宮より始めて河供屋古戸の宮高の宮土の宮其外末社悉く記すに違なし風の宮
へかゝる道に御衣裳川といふあり、

引ずりていく代かあとをたれたまふ御衣裳川のながれ久しき

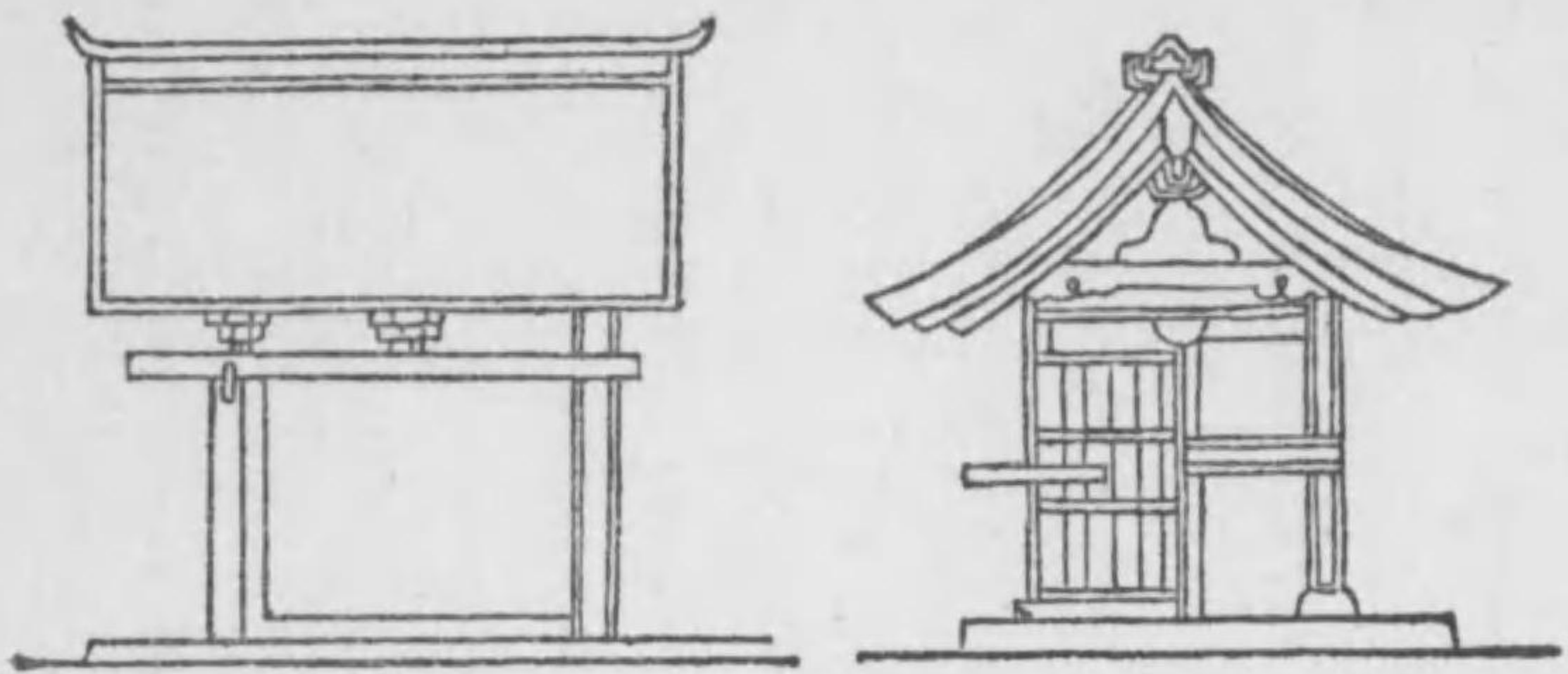
すべて宮廻の内は自然と感涙肝に銘じて有難さに眞面目となりて洒落もなくむだも言ねば暫くの
内に順拜了りて元の道に立出でやがて妙見町に歸り茲にて彼の上方者と別れ、彌次郎北八兩人の
み藤屋を畫立ちとして外宮へまいる、是即ち豊受太神宮なり、天神七代の始め國常立の尊と申せ
し御神なり、神樂の宮寶劍の宮其外茶多の末社を拜廻りて天の岩戸に登りたるに彌次郎兵衛如何
しけん頻りに腹痛て惱みけるゆゑさう、此所を立、傍に休みて丸薬など用ひ兎角するに堪難け
れば急ぎ廣小路に至り宿を借んと其處此處を見廻す内、或宿屋の亭主「モシ、御泊りじやおませ
んかいな、北「アイ連の者が少し蟲がかふるそふだから宿をお頼み申やす、亭主「サアお這入なさ

んせソレお鍋奥へお供せんかいやい、女「ようお著でおます、北「サア彌次さん上んなせへ、彌「アイタ、汚ねへ顔をする、お前コリヤア何ぞの罰が當つたのだらう、彌「ナニサ間を食た覚えはねへ、大方今朝の飯が中つたのだらう、亭「お飯もあがりつけなさんと申ることがおましよわいな、北「ア、コリヤ意氣地のねへこつた、サア〜奥へ〜、彌「アイタ、ト北八に介抱せられ座敷に通る、主も荷物を運び、「嚙御難儀でおましよ、お薬でもあがりましたか幸ひ私所の妻が今月臨月でおますがな、昨日からちとすぐれませんで今醫者様を呼に参じたが、貴客も見てお貰ひなせんかいな、彌「それはどうぞお頼み申やす、亭「畏まりましたト勝手へ立て行く、彌次郎は頻に苦がる様子に、北「どふだ湯でも茶でも酒でも吞たくはねへか、彌「馬鹿ア言なアイタ、無上に腹がごろ〜鳴る、北八雪隠は何處にある尋ねてくあるか見てくりやといふことよ、北「ハアそふかドレ見てやろう、あつた〜アレ縁側の先に落てる、彌「まだ吐しやアがるアイタ、ト漸々のことに立上り用達に行く、此内宿の女勝手より出「ハイお醫者様がおいでたわいな、北「サア〜これへ〜、此内近所の醫者の弟子と見へて焦茶の木綿紋付、黒縮緬の肩のひけたる羽織を引掛たる坊さま「エヘン〜、これは不順な天

氣合でござるドレお脈をト北八の側へ坐り北八が脈を見よふとする、北「イヤ私では御座りませぬ、醫「ハテ達者な人の脈から見比ねば病人の脈が分らんわいの、先貴様お見せなされト北八が脈を取り暫く考へ「ハ、ア成程貴様なんともないよふじや、北「左様でござります、醫「お食はどふじや、北「ハイ今朝程飯を三膳汁を三杯食ました、醫「そふである〜、平は大かた一杯じやある、替てはまいるまい、北「さやうでござります、醫「そふじやある〜、此脈體では何處も何ともないよふじや、北「さやうでござります、醫「ナントよう當りましたらう、凡そ醫は意なりと申て脈體をもつて勸考致す所が第一でござる氣遣ない最早お暇致そふ、北「モシ〜病人を御覽じて下さりませ、醫「ほんにさうじやあつた俺は變つた癖で兎角病家へ参つても病人の脈を見ることをどふも忘れてならんわいの、しかし見すとも知れたことじやが序でに見て進じやう、病人は何處にござる、北「ハイ只今雪隠へまいつて居ます、コレノ、彌次さんお醫者様がござつた、早く出なせへ〜ト大きな聲をすれば彌次郎雪隠の中から「イヤまだ出られぬ、お醫者様どふぞこれへお出下さりませ、北「エ、滅相なお醫者様が其處へ往れるものか無様なことをいふ、彌「そんなら今出る〜トやう〜雪隠より出れば醫者しかつべらしく彌次郎の脈を見て「ハ、ア貴公はコリヤ血の道じやわいの、兎角臨月杯には起るものぢや、彌「イヤ私孕だ覚えはござりませぬ、

醫「ナニ懐胎でない、ハテ面妖な、イヤコリヤ俺が師匠が悪い廣小路の伊賀越屋から呼におこした
 が、彼處の病人は産月じやさかい、大方血の道が起つたのじやある、其積で薬を盛るがよいと教へ
 ておこしたが、そりや貴公のことではなかつたわいの、北「さやうでござりませう、血の道は此所
 の内儀のことでござりませう、此男はそれではござりませぬ、醫「さよじやコリヤ俺が間違ひじや
 わいの、しかしなんなら貴様もそれにしておかんと薬盛るにも一緒にして面倒になふてよいが
 な、北「成程コリヤお醫者様のおつしやる通り彌次さんお前も血の道にして置がい、ねへ、彌「飛
 だことをいふ男に血の道があつてたまるものか、醫「イヤ／＼外の病氣も面白かる、何も俺が種
 古の爲じや、一體貴様は何病じや、彌「私は先刻から蟲がかぶつてなりませぬ、醫「大方ソリヤ
 腹の内をかぶるじやある、彌「ハイ仰る通り腹の外では御座りませぬ、醫「そふじやある、コレコ
 レ女中、供の者に薬匣おこせと言ふてくだんせ、女「ハイ／＼畏まりました、イヤもしお供の人
 は見へませんわいな、醫「見へん筈じや連て來んさかい、薬匣は俺が持てきたわいのト下けて來
 た風呂敷包を開き薬匣を取出す、女「ヲ、可笑、あなたは竹の匙で煮豆盛る様にしてじやわいな、
 北「ハア聞へた敷醫者様だから其處で竹の匙をお使ひなさると見へた、そして貴方のお薬袋には
 繪が書てござりますが、どふ致したことでござりますね、醫「イヤお尋ねで面目ないが生得手習

を致したことがないさかい、北「ハア、貴方無宿じやな、醫「さやう／＼、昔目字が讀ぬ無宿じ
 やさかい、それで斯様に薬の名を繪にかいて置ますじやて、北「これは面白い、左様なら其道成
 寺の繪は何んでござりやす、醫「コレハ桂枝じやて、北「聞應様は大方大黃でござりませうが、
 コノ犬が火にあたつておるのは、醫「陳皮々々、北「コノ産婦のそばに小便してゐるは、醫「し
 れたこと山梔子、北「印判に毛の生へたは、醫「半夏、北「鬼が尻を放ておるは、醫「それは根
 殺、北「ハ、面白く／＼時にお薬は、醫「煎じ様常の如し生薑一片お入れなさい、北「山葵
 では悪うござりまするか、彌「馬鹿ア言ふな、これは有難うござりますト此内何やら勝手の方俄に
 騒がしく人の足音とん／＼響き亭主の聲として「コリヤ／＼お銀やい／＼産婆殿へ人を遣れ
 ソレ久介は湯を沸せ催業はあるか早う／＼ト騒ぎ立つ内、此方には彌次郎が頻に腹痛み出して
 「アイタ、ハ、ハ、北「彌次さんどふしたん、醫「コリヤ堪らん／＼病人の側にはおられぬと久
 匆逃げ出して歸ると勝手の方にはヤレ産婆さまのお出と下女のお鍋がうろたへて婆の手を取りこ
 れへ／＼と彌次郎が布圍被つて寝てゐる處へ連て來ると産婆「これはしたり寝てゐるさんしては
 ならんわいの、サアサアおきさんせ／＼ト彌次郎を引きずり起せば顔をしがめて「アイタ、ハ、ハ、
 婆「辛抱さんせ、コレそこな人、菰はどふじやいな、彌「アイタ／＼、婆「そこじや／＼ト此婆



(り) 集雜屋家) 門 足 ツ 四

か、産婦が小便して居るのは山査子と云ふ。

○若樹 印判に毛かはへて居るから半夏、おにが尻をひつて居るのが枳殼。

○二葉 四ツ足門と云ふのも何だか喧しい門らしく思はれますが……また此猿がしらの御門といふのも、何か謂はれがあるのでせうな。

○竹清 さるがしらの御門といふのは、玉垣御門と瑞籬御門との間の板葺屋根の小さい御門で、屋根の上の押壓に打つた木の頭が圓く削つて猿の頭に似て居るので、猿がしらの御門といふさうです。四ツ足御門といふのは、内外玉垣御門をいふのと思ひます。今は此處の玉垣御門の處で拜するのです。

○共古 此處の地名と、それから外宮や何かの所、ふるどのみやとか、其外いろ／＼ありますけれども、之を伺ひたいのですが、實は是は知らないから、名所圖會か何かにあれば後で

書いて入れて戴くことにして、それから「くろちりめんのかたのひけたる」といふことは……。

○扇松 ぬけたこととせう、悪い物を「ひけた」と云ひます。

○共古 絲のひいてすいて来たこととせうね。

○扇松 さうでせう。こつちで云ふと能く肩のぬけたといふ奴ですな。

○共古 無宿は無筆の言葉の間違ですな。

○扇松 さうです。……此處にはやめといふのは。

○共古 お産の前に飲ます薬です。

○若樹 今の無宿は、是はどういふのです。

○共古 是は無筆の……訛言で、かう言つたのです。

○若樹 江戸なまりで「し」と言ふにしろ、無筆のことを無宿と云ひますか。

○共古 是は江戸言葉の無筆をまるで間違へて、無宿と云つたのでせう。

○若樹 そこな人、菰はどふじやいな。お産の時菰を敷いたなら菰だけですか、其上へ何か敷きま

すか。

○扇松 此薬箱は大きい箱のことですか。

○共古 一人で持つて行ける箱でせう。……それでは大抵そんなものでせうな。

ま は し

角力取の化粧マハシちふ名から推すとマハシはフタノの一名の様で、拙妻の祖母(今迄生き居たら百十歳)杯はフタノを専らマハシと呼だ。然るに紀州で今日マハシと呼ぶは必ずフンドシの事ぢや。(南方熊楠)

御師—ゾメキ

砂石集卷一上、上總高瀨の地頭一人娘を件て参詣せし熊野の師の房に某の阿闍梨てふ若き僧彼娘を見初た話有り。例年宿りて参拜に便にする坊を師の房と云たらしい。伊勢の御師は御壽師或は御詔刀師の略稱杯参宮名所圖會等に見えるが戦國時代神宮の事全佛制となり居た由明良洪範等に詳かなれば、御師なる語も師の房あたりから出たので有るまいか。

砂石集六卷三章淨通僧饒暎の釋迦堂再建の勸進の爲に説法する辭に「され共凡夫の心の拙さは、家に歸り給ひなば、云々、さし當り世間公私のぞきに打忘れて多くは空しき事なるべし」又七卷四章に「流轉生死のぞめきに身も苦しく心も亂れて、過る月日も覺えず近づく冥途を忘れん事、返すくも思かにながましくこそし今も東京で騒ぎといふを上方でゾメキといふ意によく合ひ居る。弘安の頃已に在た語と見える。(三月三日南方熊楠)

第十二回

六編卷の上

二葉 竹清 共古 仙秀

松更 鳶魚 煙崖

諺に旅の恥は書捨てゆく落書の國所は欄干に止まり自から往來同國の人の目を慰め被り行勢の笠印は、わざと己れひとりの心をよろこばしむるも皆共に、驛路のわざくれ相宿の木枕に結ぶ縁は出雲の帳外、二方荒神の隣り同士は長家の附合の外にして、其心々々に出る儘をしやべり、飽までに喰ひ、掛取道連にせざれば三十日の愁にあはず、米櫃背負て出されば鼠追ふ世話もなく、名にしおふ東男も薩摩芋に髭を撫、色まだき京女郎も團子の串に頭をかき、知らぬ火のつくすたはけに欠落して走るあれば、雲井路の道草くふ遊山旅の、のろつくあり、並松の根に腰打掛て金毘羅参りの樽をひらき街道の真中にひよくり出して諸社願拜の鈴口をふる霧中の有様、まことに命の洗濯もの引ばり股引草鞋に、何國までも足に任する雲水の樂しみえも云はれず、こゝに東の都神田八丁堀にすむ彌次郎兵衛北八と云へる二人連のなまけもの、神風や伊勢参宮より足曳の大和路を廻り青丹よし奈良街道を経て山城の宇治にかゝり此處より都に赴かんと急ぎける程に、

やがて伏見の京橋に至りけるに日も西に傾むき往來の人足早く、下り船の人を乗る船頭の聲々やかましく「サア、今出る船じや乗んせんか、大阪の八軒家じや乗てかんせんかい、彌、ハ、これが彼の淀川の夜船だナント北八京から先へ見物する積りで来たが、いつそのこと此船に乗つて大阪から先へやらかそふか、北、夫れもよからうモシ乗合もありやすか、船頭「そふはかいの乗なら早う乗んせ、いつきに出すさかいコレ、草鞋解いて乗んせ、蒸らいへけたれじやな、北「エ、何をぬかしやアがる、きのつゝ、籠棒だ、彌「コレ北八手前の包も一緒にそれが風呂敷に包んで置ふ、北「船頭さんコリヤアどけへ坐るのだ、船頭「そこな坊様のねきへ刺込んせ、彌「御免なせいヤアゑいとナト二人ながら艫の間へ刺込みすわる、乗合「コリヤアゑらう詰めくさつた船頭さん蒲團一つ貸んせ、船頭「ソレ取らんせサア、みなゑいかな、下にゐてくだんせ苦ふくさかい、商人「錢買なされ錢はよござりますかな、同「みづから砂糖餅砂糖餅、同「かん酒よござりますかいな、あんばいよし、ト此内船頭も船にとまをふいてしまひさほ差出して、

○共古 旅の恥は掻捨と云ふ諺がある云ふ處からして、書捨て、行く落書の欄干にとままりと云ふのは、東海道などの橋の欄干に矢立を取出して旅人が自分の國所名前などを書いて行く事があるのです。掻く書くと掛けて申しました。一體恥を何故掻くのかといふことはチョツと分らぬ話です

が、恥かしいと頭を掻くといふ事があります。これがどうも事實で、繪などにも何か恥かしいと頭を掻いて居る處の畫などあります。申譯がないといふ時には頭へ手を當て居ります。夫はつまり恥かしいと逆上せると云つたやうなもので、夫で頭に痒味を持つて来るから頭を掻くと云ふ事は恥を掻くといふ事になります處からして、恥を掻くと云ふ言葉がありますけれども、旅の恥といふのは旅では色々恥かしい事をして、通り過ぎて了ふから、旅の恥は掻捨といふ事も喰付いて居る。そこでも矢立を取出して國所名前を橋の欄干などに書いて行く事に掛けて、所謂同國の人を慰める、武藏國なら武藏國の者が通つたとすると後から来た者を慰める。夫から「被り行脚の笠」は何か國所を書いてある、夫が人の目に當つて自分を見まして己一人の心を喜ばしめる、豊で聞えなくても笠印に書いてあるので自分の心では國所の事が書いてあるのを見て喜ばしめる事を申しました。「相宿の木枕に結ぶ縁、出雲の帳外」、相宿をして其處でをかきなことなど出来れば夫は出雲の縁結での帳外の話だ。「二方荒神」三方荒神のやうに馬に乗つて道申しますると隣り同士でも長屋附合の様に附合は入らずとて長屋附合の外だといふのです。夫は各と勝手な事を道中で饒舌つて歩いて行くし、掛取は一緒に行くもので無いから、晦日の心配も無い。米櫃は背負つて歩かないから鼠に喰はれる、米を喰ふ所の鼠の心配も無い。それから「しらぬ火の盡すたはけ」は不知火の筑紫へ引掛け

て駈落して走る、「雲井路の道草」はぶらく行く所の道草で以て遊山旅をする所の道樂者と言つたならば宜いか、勝手次第な事をして暢氣に行く所のものもある。それから「諸社順拜の鈴口をふる」鈴口と云ふのは龜頭の口を云ふ、夫を諸社の鈴に引掛けて鈴口を振ると云つた。「命の洗濯もの引張り股引草鞋」で何處の國までも足に任かして行くのが雲水の樂みだ、雲水は何處と定めず彼方此方行く坊さんの事でありますが、是はさうでない、彼方此方と旅をする心の樂みである。神風や伊勢の參宮、此神風は此前に講義があつたと思ひます。さうして足曳の大和路、大和といふことの枕詞で足曳の大和路とした、是も足曳の大和は色々な説がありまされども、どちらが宜いのか知りません。山の足の長く曳く、つまり富士の裾野の長くなつたやうなのを云ふ、夫で足曳の山と云ふのを大和路とし、奈良の方も青丹よしといふ枕詞がある。此青丹よしは青い土の處だと云ふ事を和學者が申して居りますが、是はどう云ふものかチョツと解せない事でありまされども、青丹よし奈良といふのは事に依たら奈良の都の造られた當時直ぐに斯う云ふ枕詞があつたといふ事はどうだかと思ひます。思ふに奈良の都が出来た時に佛教の感化を受けて、さうして宮殿或は佛寺などが所謂丹青の彩色を以て色取つて居る建物が出来たから、青丹よしとしたものかと思ふ。奈良街道を経て山城の方へ出て参り是より都へ入らうかと云ふ伏見の京橋へ著いた處が地理は一向知りません。夜

船へ乗つてからの處、此「へけたれ」と云ふのは存じませんが、氣の利かぬ奴だといふやうな言葉ぢやないかと思ひます。それから船の周圍に色々な商人が來ます、兩替の錢を買ひなされと云ふのは兩替屋だ。夫から「みづから砂糖餅」是はこんぶを結びて山椒を入れ昆布でむすんだ菓子です、佛語の自繩自縛の意で名付たといふ。「かん酒よござりますかあんばいよし」これは豆腐料理です。○煙塵 ちよいと今の「青丹よし」は家など建てる時に土を搗きならす所から「なら」と云ふのに掛けたといふ事を學者が云つて居ります。古への奈良には青丹といふ土が多かつたといふ事を學者が云つて居る。

- 鳶魚 「被り行躰の笠印」はどう云ふのですか、
- 共古 躰の笠印に「つんほ」と書いてありますから往來の人が躰だといふ事を見て、言葉が聞えないといふので夫で以て憫みを加へるやうな譯でせう。
- 竹滑 能く躰で無い者が故意と笠に「つんほ」と書いて道中で他人から話し掛けられるのを避ける……夫は道連になると困るから故意と「つんほ」と書いて居つたといふやうな事が書いてあります。
- 鳶魚 巫山戯てやるのですな。
- 仙秀 本當のもありませう。是は本當の躰でなければならぬ。人に話し掛けしないで、自分が自分の

國所を見て自分の心を喜ばしめるのだから。

○共古 夫で故意とに聞いて居りますがさうでせう。

○鳶魚 金毘羅樽でございませうが、此金毘羅樽は後に天狗様の假面を着けて、夫に神酒瓶の附いたのを背負つて歩くのがあつたですが、あれを云ふのですか、あれでは樽ぢやない。

○共古 あれぢや樽ぢやありませんが、樽もあつたのぢやありませんか。

○竹清 此道中記に斯う書いてあります。金毘羅へ参る者、神酒として徑四寸ばかりの酒樽を持つて行つて夫を納めた、小さい樽を海へ流すのもあつた。

○二葉 海へ流して海へ浮いて居ります。尤も此事は何だかウロ覚えで分りませんが、御詣をして歸つて来る時に神酒を徳利へ盛つて来るといふ事が有つたかと思ひますが、どうでせう。さうすると、是は歸路になるのではないかと思ひます。

○共古 さうでせうな。

○竹清 金毘羅樽は海へ放つて置くと先へ届く。其樽を金毘羅様へ奉納して居る時に船頭が途中で飲む。向うへ自分が行く時に新しくして納めて置けば宜い。夫を持つて行くのぢやない。夫をひとりで置くのでもない。樽に有れば夫を飲んで向うへ行つてあれを納めて置くといふ事を聞きました

が、是は又違ふ話だけれども、東京の方では餘り見掛けないが伊勢あたりでは遠州の半僧坊といふやうな處へ轍を上げる。あれは往來へ能く出して居ります。小さい轍が、さうすると伊勢の津とかいふ處で、夫を江戸橋のやうな處の近所へ立て、置くと、誰か知らん其次へ持つて行く、又其邊へ立て、置くと他の人が又其次へ持つて行く、終ひに向う迄著くといふ事です。

○共古 布切か何かで見事ですか。



金 藤一 栗卷 毘 毛よ 羅 續り 樽 篇

○竹清 布切で張つてあつて、私など往來に在るのを序に持つて行つてやる、いゝかけん先きまで持つて行つてやる。

○二葉 金毘羅さんへ上げる酒といふのは、流れて居る間に酒が美味くなるといふ事を聞いて居ります。夫で流行るのだけれども、さう言つて跡で詰

めて向うへ納めるといふ事を聞いて居ります。

○竹清 水に揉まれて。

○二葉 ハイ。

○竹清 私共の本には「京阪の八軒家」と書いてあります。

○鳶魚 「八軒家」の方が宜いでせう。

○仙秀 今の京橋は四丁目だといふ事でありませう。昔八軒の宿屋であつたから八軒家と云ふ俗稱が有つたといふ事でありませう。

○松更 淀川の夜船はどうして夜にきまつて居るのですか。

○鳶魚 夜間の利用・宿賃を助ける意味でせう。晝は荷を積んで来た船が、次は人間を積んで往くのでせう。

○松更 悉く大阪の船ですか。

○共古 つまりこれは三十石船であります。

○竹清 「錢買なされ」と云ふのは兩替でせうな。

○共古 さうでせう、錢を換へるでせう。

○竹清 「みつから」と云ふのは、前に斯う書いてあります。「昆布を結び山椒を入れた菓子」だから、「みつから」と云ふ菓子が有るのでせう。

○鳶魚 夫から「あんばいよし」源平浮世草の中に「淡雪の長暖簾あんばいよし」と書いてあります。山あらしに「しつほをきつた錢でおでんあんばいよしをかつてくつた中間」ともあります。皇都午睡に江戸と大阪の言葉を比較した中に「あんばいよしを田樂」とあります。

○二葉 淀川邊で綱を曳いて居りますのは登りも下りも綱を曳くのでせうか。

○共古 登りだけでせう。つまり川下へ行くのですから……。

○松更 淀川の夜船は小説や淨瑠璃に色々な處に引いてありますな。

○共古 「みつからさとうもち」はどう云ふ物ですか、昆布を……。

○竹清 昆布を結んで山椒を入れた菓子です。

○二葉 其時分の砂糖餅はやはり砂糖が這入つた餅でせうか。

○共古 這入つた餅ぢやありませんが、附けたのでございませうな。確かにには知りませんよ。それから「あんばいよし」と云ふのは、豆腐料理でせう……。

○松更 關東の者が上方見物をするに伊勢から大和へ通つたものですか。

○竹清 何でございます、近いのは大和へ出て行かねば工合が悪いでせうし、夫に優劣はありませんが、元へ歸つて行つては大變です。六軒あたりから伊賀へ出て行くか、兎に角大和路へ出て行つた方が近いでせう。

○二葉 伊勢參宮から大和巡りと云ふ事があります。

○竹清 大和の長谷に出るのでせう。今では大阪へ行つた方が、京都へ行くより近いやうな心持がし

ます。

○二葉 商ひ船の來るのは、ウロ／＼船のやうなものでせう。

○鳶魚 伏見の天王寺屋長右衛門の先祖、越後浪人只右衛門が通ひ船を拵へて淀川の夜船へ鰻鮓蕎麥切を賣り始めたことが立身大福帳（元禄十六年刊）に書いてある。越後騒動で浪人した男なのでから天和貞享の話でせう。それが仕出したとすれば古くもない。

唄「船は追風に帆かけてはしる、我はこがれて身をあせる、ソウレソレ／＼／＼なんぞいコリヤゑらう空がわるなつた、ふろかしらんわい、乗合船頭さん、ゆうべはちうじやう鳥じやある、精進が悪いさかい、コリヤ雨じやあるぞいのハ、、時にどなたも平座かいてるなさらんか、今の内味能せんと後に工合がわる成さかい、京の人「コレお前ちどのいてかさんせ、粽の上にいしかつてじやわいな、大阪の人「コレヤ不調法鬼かく乗合はお互ひに何じやあると不肖して呉なされ京「よいわいなお前大阪はどこじやいな、大阪「わしや道頓堀、京「かいな、道頓堀の衆はみな藝者じや、ナント此處で何なと一つやりなさらんかいな、長崎の人「コリヤよたかい、船中の睡り目醒しにあんだ衆ひとつづ、藝能やらしやつたらよかたい、うんどもは長崎の者じやが、能毛川島の南瓜枕で、弄ほつきりでもやろふばいよヲ、越後の人「コリヤゑい事んし、わし共は越後

の者だが長崎の兄にやさが、やらしやつたら、わしも國風のおけさ松坂でも語るべいとこと、

北八「こいつは面白へマア長崎のお客から始めなせへ、長崎の人「よか／＼これしこやろふばいトむしやうに手を打た、き、うた「お前よかはた、わしよ振りすて、大分色女、とちぎらんすコリヤ蛙が飛なら桶かぶせ、それでも飛ぶならきねおけ／＼、コリヤ／＼／＼、なんじやいな、乗合「イヨ／＼ゑらでけじや、越後の人「わしもやるべい、皆それからトコトン／＼と囃して呉れさつしやい、長崎「よか／＼合點あるふ、乗合皆々手を打た、き「トコトン／＼、越後うた「お長なよつばらかんだまめでたかお長な、乗合皆々「トコトン／＼、越後唄「新潟一番水牛の櫛を、乗合「トコトン／＼、越後「主にさつくれべいと六百文で求めた、乗合「トコトン／＼、彌「ハ、、面白へ／＼、京「イヤ江戸のお客に何ぞ所望しよじやないかい、彌「ソリヤもふ琴三絃鼓弓何でもちつとづゝはやりやすが此所にやアそんな物はねへからはじまらねへ、京「お前のこうせきでは假聲が出るじやあろ、誰なと江戸役者やりなされ、彌「假聲も二十や三十斗りは遣ひやすが、誰にしよふ、源之助か三津五郎かイヤ高麗屋にしやせう、しかし江戸役者はお前方にや分らねへから詰らねへ、大阪「ハテゑいわいの一つやりなされ、彌「みそじやねへが假聲は江戸でも一番といふ男さ、誰でもうしろを唄ふ人があるとすつぱりやつて見せるがなア、京「うしろを唄ふとは呼出

しのことかいな、俺やろわい口三味せんじやチ、ツ、ンチンシヤン、唄「これはお江戸の堺町や葺屋町に名も高き役者假聲はどふじやいな、たれじやいな松本幸四郎でせいチ、、チン、乗合「イヨ松もとヲ、彌「まんまと奪ひ取つた此の一卷是さへありやア出世の手掛り大願成就忝ない、京「コリヤやくたいじや、俺や江戸に五六年居て此間戻つたわいな高麗屋はそないな口せきじやないもせんもの、大阪「俺一つやろわいの、京「是はねつからでせぬ、扱又次の役者名は誰じやいな、大阪「矢張今のじやト此大阪者は江戸にもゐて假聲も満更でなければ態と文句も其儘にていふ、「まんまと奪取た此一巻これさへありやア出世の手が、り大願成就忝ないトハ無調法、乗合「イヨ高麗屋ア、京「コリヤきよとい、大阪のお方がほんまじや、お前のは高麗屋とは聞えんわいな、彌「聞へん苦だ、コリヤア信州松本の者で幸四郎が弟子の駒四郎が假聲だ、京「そんなこつちやあろぞいなハ、、と舟中彌次郎の凹んだのを可笑がりどつと笑ふ、彌次はしよけてだんまり。

○共古 「ちうじやう島」と云ふ處は女郎でもありませんか。

○竹清 さうらしく思はれます。

○二葉 中書島と云ふのがあります。女郎屋のある處に違ひない。

○松更 伏見でございませう。

○竹清 昨夜女郎買に行つて精進が悪いから今日雨が降るかも知れぬ、時にどなたも胡坐を掻いて居ないと、今の内に、あんじようせぬと、工合よくないと跡で工合が悪いと、斯う云ふのです。

○二葉 長崎の歌ですな、是には閉口した。

○竹清 粽のうへにいしかつては坐つてとか、腰掛けてとか云ふのでせう。又是は不調法、とかく乗合は御互に何であらうと了簡して呉れと云ふのでございませう。どうも長崎のは分りません。「ほうぶらまくら」と云のは南瓜ですか。

○共古 簪がボツキリ折れたのでせう。

○竹清 「ほうぶら枕、かみさしほつきり」と云ふ事がありますから女郎でせう。

○鳶魚 ほうぶらは南瓜の方言です。

○共古 是は名高い歌でございませう。

○竹清 こつちは越後のおけさ。

○鳶魚 「おけさ松坂」とあります。

○共古 松坂音頭とくつ附いたのでせう、伊勢の松坂。

○竹清 上方の松坂ぢやありませんか。

○鳶魚

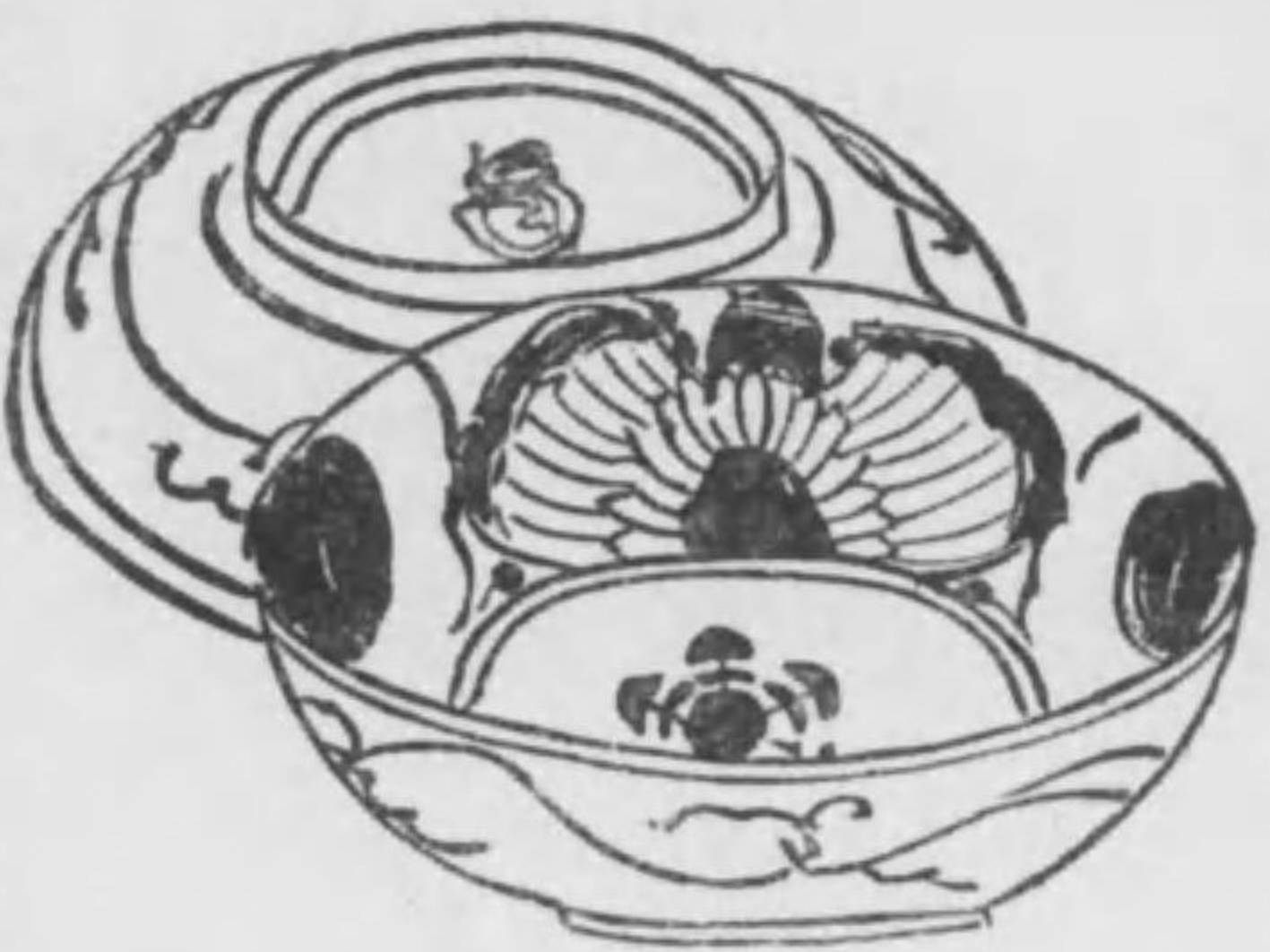
上方の松坂ぢやありませんか。 舊観帖に「わしらが國のおけさ松坂甚句などは、よくどこの國でも人がやれども、越後者のやうには出来ぬ」とあります。

○竹清 何でも松坂は上方の方に近いのがあります。それは有名で伊勢の松坂はどうですか、松坂節といふのは聞きませんけれども……長崎の歌「お前よかはた」と云ふのはお前は好い風といふ事です。上方で云ふいかの事でありま

す。彼方で紙鳶の事を「はた」と云ひます。「よか」は好いと云ふ事です。よんによう」は大分「しやんす」は色女です。

○鳶魚 是は大變だ、長崎語だから。

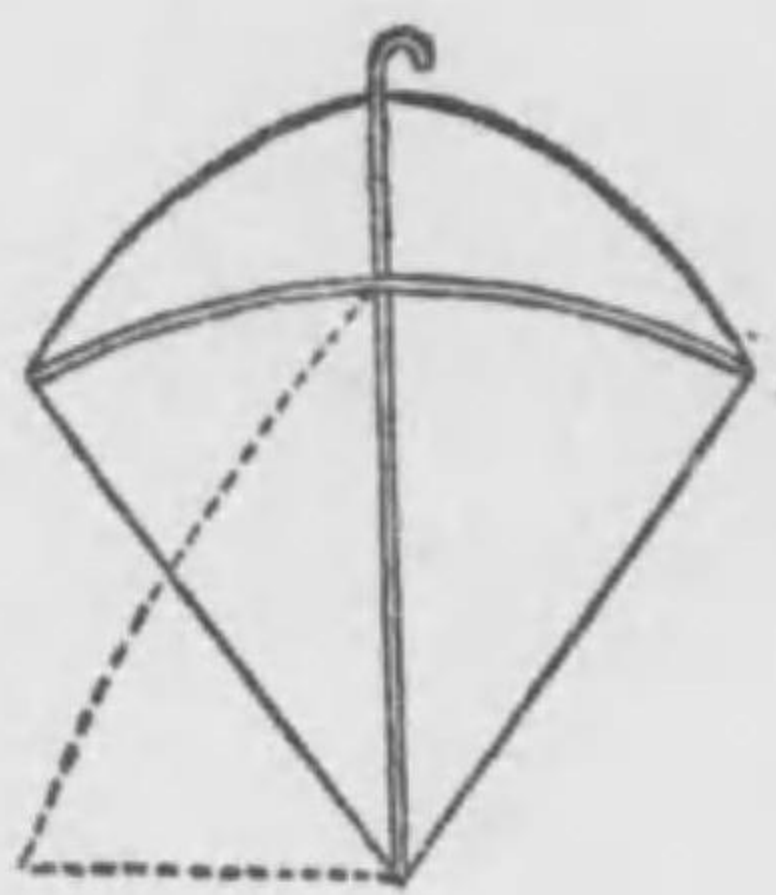
○竹清 たいへん色女と中が好いと云ふのでせう。彼方では、紙鳶を見まして知つて居りますから、紙鳶は小さな物で



皿るたし用使てに船かんばらく

紙鳶を切りつこします。年中行事の中で紙鳶を見まして知つて居りますから、紙鳶は小さな物です。東京の二枚風みたやうなものであります。大抵大さは皆同じものでございます。一寸圖を描き

ませう。骨は二本で其骨を上の方を曲けて引かけて置かれる様にしてあります。ヘリへは絲を貼り込んであります、夫で紙鳶の絲目は二本でなければ動きません。絲目に近い絲は皆硝子を粉にしてさうしてつけてある。東京で見るとやうなガンギリなどで引掛けるのではなく、だからズツと兩方から引いても切れます。早く絲を引いた奴が勝てあります。斯うやつた奴がズツと遠くまで行きます。若し其紙鳶を取られると其絲は誰が取つても構はない。紙鳶も誰が取つても構はない。夫ですから皆駆けて絲を取りに行きます。夫は賭けになるのです。紙鳶揚は大さう喧ましいです。私が参りました時に巡查が一間置位に立つて居ります。其處へ紙鳶屋が二三軒出張して、其紙鳶は東京で云ふと童子格子とか九紋龍とか云ふのでいろ／＼



長崎風

二ヶ所絲目其長

の型が書いてある、其畫によつていろんな名があります。此風はアゴハタといひます。なんでもバラモン、劔舞争、胃婆羅門、入道ハタ、奴ハタ、百足ハタ、障子ハタ、蜻蛉ハタ、蝶ハタ、蝙蝠ハタ、海尾尻、なんて名を聞きました。絲の事をヨマと云ひ、硝子の粉のついてるのを硝子ヨ

マ、たゞの糸をネヨマと云ひます。夫はナカ／＼盛んなものです。又巧いです。斯う云ふ風に糸を持ちまして其糸を斯うやつて紙鳶を斯うやつて居るだけではありません。夫で紙鳶が右にも左にも自由になります。其揚手の技術に依つて上から敵の紙鳶の上をおつ被せて糸に觸れさせてさらうとする。此方も下から擲ひ上げるとか種々の技術がありますやうです。大勢紙鳶を持つて居る連中が自分の番組の來るのを待つて居る、たしか「ツルハカシ」といひました。「カ、ルバイ」「ソウデガンス」なんてつて見てゐます。なか／＼面白いです。夫は説明を聞かうと思つても一向言葉が分らん。

○鳶魚 何月頃ですか。

○竹清 私共が参りましたのは未年で、明治四十年水産共進會の時に一年中の年中行事を皆やつて觀せた。だから何とか云ふ船の競争もやるし、例の蛇踊もやるし、紙鳶場もやる、色々やつた。私の行つたのは秋でして實は五月頃ぢやありませんか。

○二葉 四月五月です。

○竹清 私の行つた時には特別にやつて觀せた。揚げる場所は極まつて居る、此風は一枚が十六七錢昔は八十文の定めだつたと年寄が云つてゐました。ヨマは一斤七八十錢。

○共古 歌の處ですが「おまへよかた」、好い紙鳶だといふと何だか跡の文句が紙鳶に當らぬやうで、

此「よかはた」と云ふのは何か外の事ではありませんか。

○仙秀 是は囃ですから上方歌と關係が無い譯ですか。

○二葉 「どんくが飛なら桶かぶせ」の此囃しといふものは何でも二十年前も以前でしたか、此方で蛙の目玉に灸据ゑると云ふのがありました。あの時に長崎の人から初て聞いたのですがね。あの蛙の目玉に灸据ゑると云ふのは長崎のはしから夫を捻つたものだとか或人が申して居りました。是で見ると似寄つて居りますから。

○鳶魚 是も越後言葉でございます。「お長なよつばらかんだ」に良久と云ふ字が充てゝあります。

○竹清 久し振りといふ事でございます。

○鳶魚 成程さうだ。

○仙秀 「お長な」はお長さまと云ふ事です、久し振りだ、健全で居つたかお長さん。

○竹清 新潟一番水牛の櫛をお前にやらうと思つて買つて置いた。

○二葉 水牛の櫛は餘程古くからあつたでせうか。

○鳶魚 商人職人懐日記に水牛の角の曲りを鐵鋏を以て焼き延ばして櫛に引かせぬとあります。だから實永位から有つたのぢやありませんか。夫から安永の踊子歌仙の中に「大き過たる水牛の

櫛」とあります。近世女裝考を見ますと朝鮮の水牛で櫛を拵へたものを日本で朝鮮籠甲と言つて居つたと書いてあります。水牛は此頃盛んに行はれたでせう。

○共古 「誰にしよふ、源之助か三津五郎かイヤ高麗屋にしやせう」この源之助は、四代目を澤村宗十郎訥子と云つた、夫らしい、文化八年に宗十郎と改名しました。改名しません前まで源之助と申しました。夫から三津五郎は三代目であります。寛政七年に三津五郎となりました。夫から高麗屋は松本幸四郎です。

○仙秀 是は高麗屋鼻で名高いのでございませう。

○竹清 大變に聲色が此時分流行つたでせう。

○鳶魚 さうでございませうね。

○竹清 十方庵の遊歴雜記、文化十二年でせう、傳通院の大黒の南の縁側に江戸中の聲色遣ひが酉の半から亥の中頃まで、大勢集つて聲色をやる、それをき、手が批評する、賑ひどよめくさま顔見世の夜の如しとありました。

○共古 當時こわいろの流行で、不忍の辨天四谷湯屋横丁の薬師など、こわいろの名高い場所であつた。

○竹清 何でも大阪の者は知らないと思つて胡魔化すつもりでやつた處が……

○共古 口せき。

○二葉 舞臺言葉。

○仙秀 聲を真似る。

○竹清 「みそ」と云ふのは何です。自慢ですな。手前みそとかみそを上げるとか云ひます。一やくた「い」といふのは何ですか。

○共古 「みそ」は鹽加減といふ事から轉じて味噌になつた、鹽を云ふ。自慢のことです。

○竹清 「しほや」と云ひます。「きよとい」は偉いのです。

○鳶魚 氣疎いでせうな。

此内船ははや淀を過て、彌とくに北八飛んだ事を忘れた、船に乗る前に小便すればよかつたものを例の通り船ではどふもあぶなくてにくい、困つた物だコレ船頭さん、ちよつくり舟を付て貰ひてへの、船頭上るのかいの、彌小便々々、船頭「エ、ふねべりへちよくこなつてひよくらんせく、彌夫ができりやア言分はねへア、もふく出そふになつて來たトうろくする此彌次郎北八ともの間とどうの間の境の所にゐたるが、どうの間三人まへ借切にして十二三の前

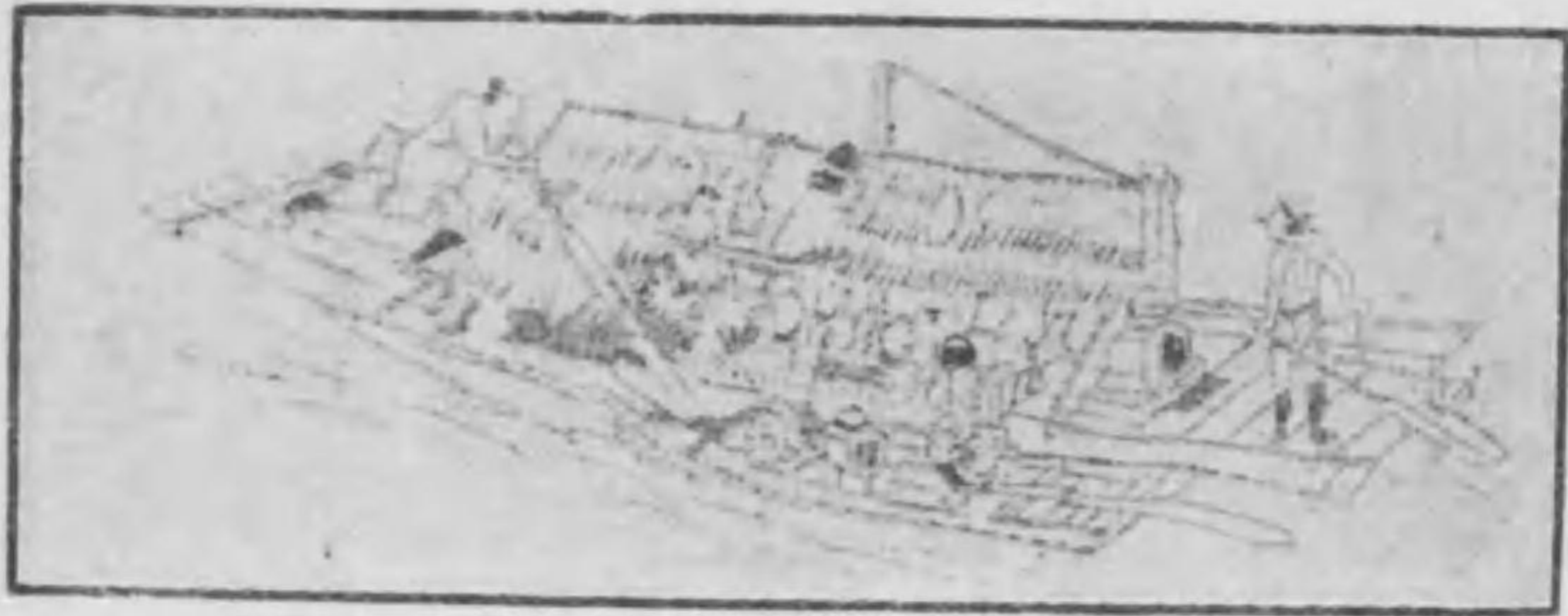
髪つれたる隠居らしい爺様背より彌次郎北八と話杯してゐたりけるが、先刻より蒲團かぶりてねころびながら、「隠居モシ／＼お前小用にお困りならぶしつけながら俺がしびん貸してあぎよかいな、コレ／＼長松よ／＼イヤこいつもふ寝くさつたそふじや、モシそこらにあらぞいの、だんな



いそつちやへもてかんせ、彌「それは有難ふムりやすト暗がりまぎれに隣を探廻せば箱火鉢の後に圖の如くの土瓶あり上方にては是をきびしよと云、急にもたまさか見へたり、彌

次郎是をしびんと心へとり出して、彌「ハアこゝにござりやした、こいつはじんじやうなしびんだはへト手の所を口と心得前に當てがへ共穴なければ、さてはくちにこめてある栓が奥の方へひつこんだ物であろふと指を入れて突き廻はすうち頻りに小便が濡る様になり心はせくふたの落たを幸いハ、ア此處にも口がある上の方からシウ／＼と小便をしてしまい、彌「ハイ有がたふございやしたト隣へそつとやつておく。隠居やがて起きなをり「コリヤゑらう寒なつた長松起きて火をともさんかい、酒なとやろわいコレ目イさまさんか／＼コリヤやくたいじやトそこらざぐりまわして火ばちの火をつけ木にうつし小提灯をともしてふなばりにぶら下きびしよをとつて「ヤアコリヤ何じやいハ、茶をたくつもりで水かな入れて置きおつたそふじやトい、つゝとももの間からきびしよを出して彌次郎がしこんだ小便を川の中へ打開てしまひすぐに樽の酒を入れ火ばち

の上にかけてながら、「モシ江戸のお客酒一口どふじやいな、北「コレハおたしなみでございやすね、隠居「もふでけたそふじやトさいうのにしめなどだし隠居さかづきに少しついで「ドレおかん見まよかいイヤこれはけいたいな香がする、ベツ／＼／＼コリヤ酒がわるなつたのかよもやそじやあろまい、一つお前呑んで見てくだんせト北八にさかづきをさす、北「ハイこれはヲト、ト引うけてぐつと飲でしまひしが何とやらしほはのき様にて變なほひのする酒だと心に思ひながら胸を悪くしてなでさすり／＼、北「ハイいたゞきました、隠居「お連のお方に上げてくだんせ、北「そんなら彌次さんソレトさかづきを廻す、彌次郎は先刻より之を見て不思議に思ひ何でもあれはおれが小便をしたしびんだが夫で酒のかんをすると云はどうした者だ、但しは己がそ、うでしびんと思つて小便をしたのか、何にしても飛んだ事をしたと心の内に二人が顔をしかめるを見ておかしさこらへられず、それと知らずにあの内の酒をば北八がのみたるを吹出程おかしくじつところへいたりし所北八さかづきを差ければ、彌「イヤおらア御免だなぜか今宵は酒が呑みたくねへお盃ばかりハイ夫れへあけませう、隠居「あがらんのかいな、北「ナニあびるくらいさ、彌次さんなぜ呑まねへ、酒といふと一番に咽をぐい／＼するお前がコリヤ何でもへんちきだは、隠「ハ、ア聞へた事があるわいの、今そつちやのお方が暗がりでしびんと間違へて此中へ小用し



くわらんか船の図

こみやさんせんかいの、どうも小用臭いと思ふたがコリヤおまい、
 そふじやさかい呑んのじやあろぞい、北「ソリヤしれやせん桑名の
 渡でも此人が船の中で小便して大さわきをやりました、其の位のそ
 さうはしかねん人さ、エ、きたねへゲエイ、隠居「どうりこそき
 びしよに何か一ツばいあると思ふたが、俺やまた此わろめが水入れ
 て置きおつたと思ふて川へほつたがどふも小用のおともりが残つて
 あつた物じやあろぞい、北「とんだこつた、胸がむか／＼する、隠居
 「ア、こりやゲエイ、彌「これはお氣の毒なモシ何ぞ薬でもあ
 がりやし、併し小便にあつたには何がよかるふしらんモシ／＼ど
 なたぞ丸薬でも御所持なら少し下さいましな、乗合「ハイどふも小
 便のあたつたによい薬は持ちませんわい、彌「ソリヤア困つたもの
 だ、北「彌次さん苦をちつと捲くつて呉んな、彌「どふする小便を
 するのか、北「はくのだけはな、彌「ドレ船べりへぐつと顔を出して
 やらつし、おれがつかまへてゐてやろう、ソレよしか、シイ引く／＼

／＼どふだまだかエ、川の中だから犬がいねへでわりい、北「ナゼ犬がいるとどふする、彌「手前
 小便をはくの白コイ／＼／＼と呼んでやるに、北「エ、馬鹿つくなゲエイ、隠居「長
 松よ脊中たゝいてたもア、むさやゲエイ／＼ト此内隠居は漸々にはいて仕舞川の水にうがひし口
 を洗ひて「どふじやそつちのお方はゑいかいの、北「どふやらこうやら、よくなりやしたト口をこ
 ぎてまじめ顔、彌次郎は心の内におかしさ隠している隠居けつかう人と見へて格別腹も立す。

○二葉 此處も何も無いやうでございますな。

○共古 急須を知らなかつたですな、丁度足は兼葭堂の雑録に急須の事が書いてあります。兼葭堂雜
 録に書いてありますには、支那人の急須、又は宜興鐘といふので、清人の吳成允と云ふ人が和客金
 右衛門を饗せる八僊卓式記に書いてあります。夫を高芙蓉が見出したので其圖を大雅堂に贈つたの
 です。夫は寶曆の六年でそれから木米が作り、道八も夫に據りまして急須を作りました。つまり其
 時代が急須を作り始めた時らしいのであります。此兼葭堂の當時は寶曆六年であります。高芙蓉が
 見出したのを大雅堂が木米へ贈りました其年代から一九が書きましたのは五十年程後でありますか
 ら、まだ京都の急須を一般の人はさう知りません。北八や何かも急須なんといふ物は知りませんが
 ら上瓶の急須を尿瓶と心得たのでせう。夫で享和元年に鹽屋燕路の作りしました標客三體誌に春野と

云ふ部屋持女郎の部屋の處に書いてあります。夫に焜爐急須が備へてあつたといふ事でありませう。吉原の部屋持女郎の中に、享和より尙前でありませうが洒落れた奴は持つて居ります。急須焜爐など使つて居りましたけれども、北八や彌次などは知りませうから之をやつたのだと思ひます。

○鳶魚 「キビシヨ」と云ふ名前です。是は何から來て居りますか。

○竹清 急燒といふ字があります。

○鳶魚 三餘隨筆の中に「古人酒を温むる器を呼んで急須となす。急須は其急に應じて用ゆるを以て也」とあります。高芙蓉が急燒を見出したといつて大雅堂が吹聴したのは寶曆六年です。煎茶仕用書中に、注春、雪融、急須、糝盆、是皆茶入也と書いてあります。吉原大全の序、此の本は明和五年の版です。「此中とつた山吹とこころにきびしやうもつてこい」とある、其の頃は焜爐と組んで居る。今とは模様が違ふ、福地櫻痴はキビシヨは葡萄酒語だと云つて居ます。

○竹清 是は本當は湯を沸かす物でせう。湯を沸かす物で御茶を煎じたりします。今日我々が御茶を出して居る風に出した出シ茶ぢやございませう。だから此中でも酒を沸かして居ります。

○鳶魚 三餘隨筆には酒を温める道具だと云ふ風にございます。處が併し之を煎茶仕様書で見ると茶入也とあります。

○共古 煎茶の方ではさう言ひません。

○竹清 併し酒に使つて差支ない道具です。

○鳶魚 一體酒の道具でせう。

○竹清 酒もやるし湯も沸かす。

○鳶魚 湯罐みたやうな物があります。

○竹清 丁度今日で言へば粟田燒のやうなものではありませんか、ポーフラといふので、素燒の物でせう。

○共古 東山義政公の御所藏急須の圖といふがありまして圖も出て居ります。あれは急須と稱へたかどうか知らんが、形はあんな物であります。お酒か何か燒物の古い物だ、あんな物であつたのでせう。だから急須は式に加へたものでありませう。今のやうに煎茶式は無論無いですから……。

○二葉 急に沸かすと云ふ方から言ふとどうしてもポーフラですな。

○鳶魚 アツ此處（煎茶仕用集）にございますよ。高麗物で尋常といふのは一體讀んで字の如く、御尋常と云ふのは小さいといふ事でありませう。

○共古 書く意味は尋常の道具と言ひます。小さい事でありませう。

○鳶魚 讀んで字の如しといふと尋常の道具と言つたら宜い。
 ○竹清 斯んなやうな事をして酒を沸かすと云ふ事は、關東の人のしない事で、是は確かに上方の事です。此風流と言ふか物數寄と言ふか、斯んな事は關東ぢや決してしませんな。
 ○鳶魚 さうです。



籠 采

生から戴いたアレです。

○二葉 竹で編んだ辨當箱です。

○鳶魚 是はさいろうを圖入にせねばいけません。

○竹清 古いのから搜した方が宜しうございませう。それに急須、此處にもありますけれども、兼葭

○竹清 「さいろう」はどんな物ですか。

○二葉 竹で編んだ辨當箱であります。今でも四國の人は炭取などを「さいろう」〜と言ひます。

○竹清 さうすると蓋の有る下物籠です。

○鳶魚 それは提蓋ですな。

○竹清 提蓋とは違ひます。丸味があります。私が山中先

堂か何かに上の凹込んだ工合の好いのがあります。

○仙秀 此時「胴の間三人前借切」とありますが其前にドン／＼乗客が押詰めて来るからと、今の内に工合好くしないと困るといふと、一人前とか二人前とか借切といふと其間だけは他の乗客の席と間が隔たつてゐる譯で、所謂上等の間とでもいふのでせうか。

○竹清 さうでせう。

○二葉 此下の「しびん」はどんな形ですか。

○共古 圓い、茲に蓋の明かない。

○竹清 口の太いのでせう。

○鳶魚 「しびん」の圖も入れなくちや不可ませんな。今「しびん」を知らない人もあります。



瓶 尿

○竹清 今は硝子で工合の好いのがあります。

○共古 横にやつたのがあります、……「心の内の可笑しさ」

○竹清 小便する時に犬を呼ぶのは、子供に小便させる時に犬を呼びます。

○仙秀 やらない處もあります。小便に犬は付き物と見えます。

○共古 子供は喜んで犬を見ながらするのでありませう。

○竹清 落語があります。オイ呼んで居るから行つて見ろ、白犬だ斑だ、ナニ馬鹿を言へ、アレは子供に小便やるのだつたよ、さうだつたかな、なんて何でもそんな事があります。此處がチョツと面白いですよ。……

○鳶魚 結局自分に祟つて色々にする處がなか／＼面白い。

「イヤモウお互ひにどえらいめに逢たこつちや口直しに残の酒やりたいが燗をする物がなふなつたどふせうぞいの、長松」そしたらこつちやにあるはんまのしびんで酒の燗致しましよかい、
「隠」ホンニそふじやほんまの尿瓶の方がきれいじや藤の森で今日買うて来たまゝで未だ一度も小用せんさかい夫れで燗せうわい、北「滅相なあやまりやすね、彌馬鹿アいな茶は土瓶の茶がうまし、酒の燗は尿瓶のことだ、北ナニ尿瓶の酒が呑るものか、彌」そんならモシ御隠居様やつぱり今のきびしよとやらになさいませ、隠「きびしよは川へほつたわいの、尿瓶の方が新しいさかいきれいじやわいの」樽の酒を尿瓶にかけて火鉢の上にかける「長松其處な茶碗おこせ、サア／＼正眞の酒じやソレお前方差そかい」茶碗を差出す、彌次郎、ちやつと引取り、「戴きやせう隠」蟲のゑいお人じや、肴あぎよかい煎殺あがるかいな、彌「ハイ／＼これは何でござりやす、

彌「ソリヤ鯨の油とつた跡の身じやさかい煎殺といふわいな、隠「好物でございやす、サア北八差さうかと北八へ茶碗を廻し尿瓶を取て注ぐ、新らしき尿瓶と聞きて成程大事もあるまいと一杯引受てぐつと呑でしまひ」小便のまさらぬ酒はまた格別だハイ上げやせうか、隠「皆乗合のお衆へ一ツづゝあけてくだんせ、北「さよならお隣のと次にゐた越後の人に差す、越「ヤレふとついた／＼くべいとこと茶碗を取、北八尿瓶から注にかゝる、ソリヤ小便のする焼桶じやアござらないか、北「ナニ此尿瓶は新しいからきれいさ」注でやればぐつと乾して「ア、ゑいことんしサア長崎のあんにやさやらつしやるか」茶碗を廻せば長崎の人受て、「ナイコリヤ氣のどんくうなことばよヲ、隠「段々其方のお方へ上げてくだんせ、長「しからば貴方へ参じましたいと其次の人へ差す是は病人と見へて色の蒼白たる垢だらけの男襟に眞綿を巻て布團に寄りかゝり尤とも四人前斗借切にして介抱の親爺と二人連にていたるが、病人「俺や酒はいかさかいこなん一つ戴だかんせ」子供の親爺に譲る先刻より尿瓶の清潔なる事も聞居たることなれば一向かまはず「モシ／＼憚り乍ら其尿瓶此方へ下んせ、手酌にやりましよかい」此親爺酒好と見えて續けて二杯やらかし段々茶碗を元へ送り返せば彌次郎兵衛取次で、彌「サア隠居様上げませう、隠「イヤお前ま一つ呑でおこさんせ、彌「ハイ／＼左様ならモシ其尿瓶此方へ、病人の所の親爺「ハイ／＼それへト尿瓶

を送り戻すと北八取つて彌次郎へ満々と注いでやる彌次郎一息にくつと呑で茶碗を投出し、彌「エ、こりや飛んだこつたゲエイ〜」、北「彌次さんどふした、彌「どふした所かコリヤ酒じやアねへ小便だ〜」、親爺「ハ、アこれはしたり龜相しました俺が所の御病人の尿瓶と取違へましたサア〜」酒のは此所にあるソレ取替へてくだんせ、北「ハ、這奴大でき〜」、彌「エ、もうどふしたらよからう此位なら俺が小便を呑は未しも彼の病人奴がエ、惡臭いゲエイ〜」ベツ〜ベツ、北「ハ、彼の病人の顔を見な瘡と見へて頭から首筋の邊までじく〜」、彌「エ、もふ言つてくれるな咽が裂るやうだエ、苦しいゲエイ〜」、北「兎角お前は小便が祟る船ではもう禁便にするが、其處で一首浮んだがどうだ〜」、小便を人に呑せたそのむくい己ものんでよいきびしよなり

○鳶魚 一卷の大出来でせうな。そこで隠居は「結構人」其當時では好い人といふ事でございませが扱結構人といふ者が、好い人といふ事はどうか、是は少しくどからうと思ひます。いゝ品物を結構な物と言ふ、其處等から人に夫を使つて好い者といふ事になるのだからと思ひます。夫から土瓶の茶がうまいと言たのは茶釜の茶に對して言つたのでせう。

○竹清 藤の森と云ふのは伏見の方でせう。

○煙崖 藤の森は伏見街道に在ります。帝國地名辭典に「山城國紀伊郡深草村の地名、村の南部伏見町に近き邊をいふ、藤森神社あり、祭神及創立年代を詳にせず、旗を收めたる所にして、軍神なるべしとの説信に近し、或は秦氏の祖を祭りし所なるべしともいふ、毎年六月五日撰甲騎馬の祭禮あり」とあります。一説に祭神は素盞鳴尊とあります。處で華洛細見圖繪には「五月五日藤森祭略圖」と云ふがあつて「早良親王蒙古征伐の時當社に祈り敵を破り玉ふ行粧也」としてある。此邊は梅の名所と見え「帝都雅景一覽」には頼山陽が「紀來

去歲探梅路、直目祠邊左折行」と題して居ります。

○竹清 「煎穀」といふのはどんな物ですか。

○鳶魚 下の言葉で説明はしてありますけれども、どんな物か分りませせん。出喰はせませせん。



藤の森の牛

○共古 「結構」はどうなりましたか。

○鳶魚 結構は少々むづかしいのです、どうか旨い事を御教へを願ひます。普通に好い人と云ふ事に使つて居りますが、どうして好い人が結構人か少々困つたです。夫から此處に限つた事ぢやないが一つ御教へを願つて置きたい事があります。夫は此藤栗毛の何處でもですけれども、言葉を地の文

へ續ける處に行つて「ト」といふ字で繋いでズツと受渡しをして居りますが、是は例の天明頃の落語を見るとやはり言葉の地の文へ「ト」で受渡しをして居るが、夫がモウ少し前へ行かれますかどうかと云ふ事の御説がございましたらば、是非御聽かせを願ひたい。芝居の方ではト書と稱して臺詞の受渡しは皆「ト」と云ふので受渡しを致します。芝居の方が些と古いと思ひますから、今の天明頃の落語の本の「ト」は芝居のト書から来て居はせぬかと思ひます。落語から膝栗毛が採つたとすれば、芝居のト書の孫に當る譯です。天明の落語、夫れ前にモウ少し古い處に何ぞさう云ふやうな地の文と言葉の文と受渡しに「ト」を使つて居るやうな例がございますならば、どうか御教へを願ひたい。

○共古 「と云ふ」と云ふ意でせうな。「と言つた」と云ふ事。

○鳶魚 さうではない。「と言つた」とか「さう云ふ」でなしに「何々ト」と言つて直ぐに地の文に續く、丁度芝居のト書と同じ形で行きます。是は芝居のト書から來たのぢやないかと思ひます。

○共古 茲に「お前方さそかいト茶碗を差いだす」とあります。「さそかい」と言はれたてでありませんか。「左様ならお隣へト」といふのも、隣りの御方へと言はれたのでといふやうな意味ではありませんか。

○鳶魚 だから言葉で直ぐ身體の動く方になります。其使方が丁度芝居のト書と同じ事でありませぬ。

些とも違つて居りませんが、芝居のト書の外にさう云ふものを使つて居るのは、落語の方にあります。すが、一番古いやうに、私はチヨイとマア思ふのですが、それをモット前にさう云ふ風にトを使つたのは無いか。芝居のト書の方は何時頃でございませうか、古い脚本の現存したものが少いから容易には按じられませんが、寶曆の頃からありますやうか。

○二葉 尤も臺帳の出る時代は後ですから……。

○鳶魚 臺帳は未だトの受渡しになつて居りませぬ。さうするとトといふ事は芝居傳來のものだといふ事になるだらうと思ひます。斯かる落語が以前に無いとすれば夫が言へるだらうと思ひます。

○共古 夫は知りませぬけれども、やはり是は其言葉を承るだけの事でありませぬ。夫から「結構」ですが、是は結構人だといふ事を俗に申します。是は結構な物を頂きましたと言ひますが、一體文字から申しますと夫を形容した入物だらうか器だらうか何か籠だらうかといふ物が美麗な物だと言つたやうな事から起つては居りませぬか。何か綺麗な器に這入つて居る、其周圍を見て是は結構だと言ひます。其如何にも綺麗に出来て居るのを綺麗な物又は見事な物と言ひます。

○鳶魚 讀んで字の如くなれば組立つた物、拵へた物といふ事になりますから、精巧といふ方の意味

でございませう。

○共古 さうすると内の物で無く御菓子折なら御菓子折全體を見た、或は菓物なら菓物籠を……。

○鳶魚 建築から来て居りは致しませんか。

○竹清 結構といふ言葉は支那にありますか。

○鳶魚 支那に無いではありません。

○竹清 結構莊嚴なりといふ事はありませんか。

○鳶魚 さう續けたのは知りません。

○竹清 満洲で支那の學校教員に結構といふ字を聞いた事があります。さうすると結構とは男女が抱

き合ふ事だといふ、夫ぢや大變な事が始まつて了ふ。

○鳶魚 それは悪い事ぢやないかも知れません。

○竹清 それも結構だけれども、一番最初の意味はやはり結構建築の方から来た、結構が宜いといふ

事から轉じたのぢやありませんか。景福殿の賦かにあつた、段々轉じて結構と云ふだけで宜いと云

ふ意味になつて了ふのでありませんか。

○鳶魚 さうでせう。唯結構だけぢや宜いも悪いも分らない。……日光を見ない中は結構と言は

れない。

○竹清 此處の淀川の船を彌次郎と北八が乗違つて伏見へ来た、来る處を見ると荷物を積んで来たの

ぢやありません。乗合船です。

○鳶魚 朝出るですか。

○竹清 どうだか知りません。途中で間違へてまた伏見へ来て居ますから乗合船です。

○鳶魚 僕の心得違ひかな。

○竹清 最初はどうか知らない、終ではさうなつた。

○鳶魚 さうすると涼菴の譚海の中に淀川の船を三十石といふのは堂上の青侍雜掌の給俵は一人前

三十石宛で、公家衆も祿高のないのは玄米三十石つゝ、賜はる。其の輸送をするからの名だと書いてあ

ります。

○共古 三十石船の起原ですな。

○竹清 發達した後は乗合だけでせう。

○鳶魚 成程、さうすると古い奴だけを見た杓子定規だ。

○共古 「煎殼」は鯨の身の白く晒したのでせう。

○竹清 鯨の油を取った後の物と書いてある、細く切つて綺麗な物です。菓子ぢやありません、白い身ですな。

○共古 白い身はさうぢやありませんか。

○竹清 白い身と赤いのと來ますが、東京ぢや餘り食べません。

○仙秀 弘前の方では寒いから白い脂身を好む、一遍ゆでる、さうすると脂がぬける、其儘ぢや迎も喰へません。

○竹清 伊勢あたりでは糠で洗ひますよ。

○共古 煎殻は乾物屋に賣つて居ります。干してあります。

○仙秀 弘前あたりは鯨が生身で來ますから。

○竹清 伊勢あたりも生です。

○共古 三杯酢にやると旨いさうだ。

○竹清 赤い奴は。

○仙秀 赤い方の身が弘前あたりへ來たのは後の事です。

○竹清 赤い奴は伊勢あたりでは牛肉のやうにして煮て食ひます。が私共が食ふと臭いですな。迎も

私共の趣味には適さない。

○二葉 赤いのは房州の人が食ひます。房州のは何とか言ふ鯨、ゴンゾーが大さう採れます。あの身を取つて一度ゆがいてスツカリうで、置いて、さうして煮る時に生姜を磨つて煮ます。さうすると臭味が消える、さう云ふ事を聞きました。

○仙秀 私などは幼い時は鯨といふ物は白い物だと思つて居りました。鯨を食ふと冬温まるから食ふのですが、鯨は白い物と思つて居る。繪でみるばかり正物はみた事がない。東京から初めて鯨の罐詰が來た、明けて見たら赤い鯨が來たと言つて大笑した事があります。これも本物を見た事が無いからです。

○鳶魚 煎殻はどんな物です。

○共古 東京の乾物屋にあります。白く綺麗になつて居る。

○鳶魚 あれを煎殻と申しますか。

○共古 どうか知りません。何しろ油を抜いてあります。

○二葉 肉とも違ひますか。

○共古 違ひます。熱湯に入れて三杯酢にして食べると旨いと言ひます。

○竹清 越後のやきたごと云ひますが、たごと云ふと大きな物らしく思はれますね。

○共古 焼物のしよんべんたごと云ふものでありませう。

○鳶魚 成程は大變な物だ、越後人の……。

○竹清 私が知つて居る、和蘭陀屋のお上さんは越後のおかみさんだけれども、斯んな事は言ひませ
ん、越後も廣いから……。

○仙秀 越後の人に笑談に角兵衛がお國の名物だなど、いふと、イエ角兵衛の出る處は一村別だと言
ひますから。

○鳶魚 狂歌は是は「よいきびしよなり」が落であります、「よい氣味」と云ふ處から引掛けた作では
ございませうが、此人の狂歌といふものを拜見して狂歌と云ふものゝ詰らぬものだといふ事を感心
した譯であります。

○二葉 下劣なものですな。

此騒動に船中おのゝ睡を醒し大笑ひとなるうち船はひらかたと云へる所近くなりたると見へ商
ひ船此處に漕ぎ寄せ、商人「飯くらはんかは酒呑んかいサア、皆起くされ、よふふさるや
つらじやなト此船に付て遠慮なくとまひきひろけわめき立る、此商人船は物云がさつに云を名物

とする事人の能知る所なり、賣言葉に買言葉なれば、乗合「コリヤ飯もてうせい、ゑい酒があるか
い、北「いかさま腹がへつた、爰へも飯を頼みます、商人「我も飯喰ふかソレくらへ、そつちやの
わろはどふじやいやい、ひもじそふな顔してけつかるが、錢がないかい、彌「イヤ此籠棒奴何を
ふざきやがる、乗合「此汁はもむない代りにねからぬるふていかんわい、商「ぬるかア水まはし
て喰ひおれ、乗合「何ぬかすぞい、そして此芋も牛蒡も腐てけつかる、商「其管じやゑい所は皆
うちで焚てくてもふわい、長崎の人「イヤこやつふとうなつたよヲ、いかな、ちうつるばつて
ん、そのぬかしよふばい、越後「つくにう、打してやつくれいか、商「ちよございぬかさすと
はやう錢おこせいやい、コレそこな親爺錢どふじやい、親爺「この奸盗めらは、たつた今取りく
さつてコリヤ早ういねやい、定めしおどれが女房は晝は袖乞して生米がな喰ふさかい、今頃はぶ
つぶつと腹ふくらして白い泡ふいてるよぞい、商「ヲ、われがうちは大方四條の蒲鉾じやある、
雨が降りそふぢや水の出ん先早ういにくされ、彌「イヤこいつらア云せて置やア途方もねへ奴ら
だ、横面ア張りとはすぞ、乗合「コレ、お前腹立さんすなアリヤこゝの商賣船はあないに物を
ぞんざいに云ふのが名物ぢやわいの、彌「それだとして餘りな、商「ワアアあほよ、トござだ
してのく、彌「コリヤ待やがれあほうたア誰が事たト一人りきんでおもはず立上る拍子に乗合の

膝をふんでどつさりこける。越後の人「あいた、ム、ム、コリヤわしが膝頭ふんだ、長「うんどもが頼ふうよんによううつたアイタ、ム、ム、彌「コリヤ御免なせへトやうくすわる、かくて船はひらかた過ぎたるころ雨催ひの空俄に暗くなり降りだしあはやと見るまに篠をつく大雨となり苦をもれば乗合は上を下へと騒ぎたち船頭もかくては働らき自由ならず、やがて堤に船を漕ぎ寄せ暫らくかゝりて見合けるがこゝは伏見と大阪の半途にして登り船も下り船も皆落合混雑し、がたびしと岸によりて今やと霧を待いたるに、凡そ一時あまり過たると覺しき頃漸く雨止み雲切れて月の影八はた山に差出たるに船中おのゝ勇み立ち彌次郎北八も苦引きあけ顔さし出して此景色眺めいたるが、彌「ハアもう何時だろふな、時に北八又困つたことが有るはい、雪隠へ行き度なつた、北「エイきたねへことばかりいふ、彌「どふでも船ではできぬイヤ幸い此處にかゝつてゐるうちちよつくり土手をへ上つてやらかしてこよふ、北「ホンニよその船でも人が手水に上る様子だ早くそふしなせへ、イヤわつちもお相伴がしたくなつたモシ船頭さん、ちよつとあがつて来たいがい、かねへ、船「用たしになら早ういてごんせ、わしが今飯くてもふといつきに船を出すさかい、彌「草鞋はどこだ、北「ナニはだして上らふ乗るとき足をす、けばい、にト兩人船よりつみに上りて、彌「ナントい、景色だな、どこらでやらかそふ、北「ラットそこには水溜りがある

もつとそちらへア、なるほどい、月だ、

一刻を千金ヅ、の相場なら三十石のよど川の月

○鳶魚 此船は世間侍婢氣質（明和八年刊）に「浪花津に咲やこの花の都より十三里、夜の間に寝ながら往來して牧方のくらわんかも夢うつ、ともある、例の「くらはんか船」でありませう。私が祖父から聞いて居るに牧方と云ふ處に向つて、此處に悪い息子を持つた親爺があつた、家康公が何處かへ逃ける時に其爺イが御救をした、其時に何か褒美をやり度いがどうだ所望が有るかと言つた百姓の事だから侍士などにして貰つても困るから、どうか私の俸は物言ひが悪くて仕様が無いから言ひ様が悪くても通るやうにして頂きたいと云ふ事を願つた、さうしたら無禮差許すぞと云ふ事を家康公から許されたと云ふ話であります。が、頭も尻尾も無い、斯う云ふ事らしい。何かに書いてある話かと思つて少し調べましたが未だに見附かりませんが、夜船への物賣りは天和貞享からの事として見れば家康公を持たせ義理ではない。

○仙秀 徳川時分だから、家康公が御許しになつたら一番有難いものになつてゐたでせう。

○鳶魚 けれども本當かどうか分りません、夫からづくにうは。

○竹清 天窓と書いてあります。

○鳶魚 天窓の事には違ひないが、坊主の事として「づくにう」は可笑しい。「にう」といふのは入道の「にう」だから宜いが「づく」は困る。「づく」はどう云ふものでございませう。

○竹清 づくはみづづくで木兎入道でせう。

○二葉 「ちよござい」と言ふ言葉はどんな事でございませう。

○竹清 大變色々方言が這入つて居る。

○仙秀 「奸盜」と言ひますかな。

○鳶魚 強盜の事でせう。

○竹清 「もむない」は味ないでありませう。

○鳶魚 大阪では「ももない」と言ひます。んもないの詛呼でせう。夫から生米を食つて居るから腹を膨らして白い泡を吹くといふのは癩癩病みですか、四條の蒲鉾、是は四條河原の蒲鉾小屋で乞食でございませう。

○共古 それから「ぞんざい」は存在其儘でせう。

○松更 「あはや」は「あゝはや」であります。今日の言葉でいふと「あゝもう」でせう。

○鳶魚 「一石を千金ヅ、の相場なら三十石の淀川の月」是は………。

○仙秀 是は誰かの狂歌に「一刻に千金づゝの相場なら一夜三千兩國の船」といふのがあります。

○鳶魚 一石千兩とすれば三十石だから幾らになるだらうとも言ひさうな處です。

○共古 此處の一刻は時の一刻です。

○煙崖 蘇東坡の「春宵一刻直千金、花有清香月有陰」の句から月の字は著想したものでせう。

○鳶魚 さうすると一刻が千兩づゝなら三十刻で幾らありませう。算術の問題のやうなことになるでせう。

○共古 其位月が良い。

○松更 固より一刻を船の三十石へかけたただけでありませう。

○竹清 三十石が淀川に著くでせう。

○鳶魚 少し骨が折れますな。小學校の子供が考へる數學みたやうなものだな。

○仙秀 大分苦しいな。

○竹清 好い加減なものですな。

○共古 チョットと一つかけたきりでせう。

○鳶魚 是などは却つて繫けてある爲に分らん。

○仙秀 是などは本當に考へると意味が取れません。

○共古 一刻が千金なら淀川の月は餘程良いから安いといふ事でありませう。

斯く口吟みて思はず勝景に見惚るたるが此内岸に繋りたりし船も追々漕出す様子に北八彌次郎が乗たる船も今出ると見へて船頭ども繋ひ綱を解き棹差し伸て二人を呼立るに何れの船にも乗合の内土手に上りたる者共一時に下り立ち混雜し彌次郎北八やうくの事に人を押分飛乗たるは大坂八軒家の登り船なり此二人餘り船頭に呼立られて大にうろたへ今迄乗て來りし伏見の船と心得其次に並びてかゝりたりし大坂の登り船に飛乗たるが苦の内暗く間違たる船とも心付ず殊更此船にも乗合の内堤に登りたる者も二三人あれば夫等かと思ひて船中にも互ひに顔も形も知れざれば是を咎むる者もなく其内船は出るに任せ各々背より話し疲れたるにや押合へし合互ひに足を遣違ひとなし臥たりけるが彌次郎北八も暗がり紛れ其邊搜り廻して手觸り能似たればとて人の風呂敷包を我包と心得引寄せ直にそれを枕として打臥それより前後も知らず高船なり去程に船は右に押さし左に綱引登るに早くも八幡山崎を跡になし淀堤を打過夜も明近くなりたる頃伏見にこそは著たりける苦漏る影も白く鳥の聲告渡るに船著たりと乗合皆々目を覺し立騒げば北八彌次郎も苦打開きて笠風呂敷包を手引下け船頭が歩み板渡すを打渡りて岸に登り船宿に至るに乗合の人

人續いて爰に來るを見れば見知たる顔一人も無し是は不思議と其邊うろく見廻しながら彌「ナント北八俺に酒を呑せた隠居殿はどふしたの、北「去ばのそしてアノ長崎者や越後道者共は來そふなものだが大方爰へ寄すに行つたと見へる俺等はゆるりと爰で支度して出掛やうさと元の伏見に著たこと一向に氣が附ず、船宿の女「誰方もお仕度あぎよかないな、彌「タイ爰へ二膳頼みます、女「ハイくと焚立の飯に八杯豆腐の平を附て持て來る是は伏見の船宿のお定まりなり此兩人始めてなれば這樣なことは知らず素より大坂へ著たと斗り心得平氣にて、彌「今日は斯う致そ是から長町の分銅河内屋とやらいふ宿屋へ行て彼も大和の初瀬の茶屋でよこした書付の所だからあそこへ泊つて直に芝居でも見よふじやアねへか、北「俺等アまた新町とやらを早く見てへ、彌「チ、それも満更でねへのア、アツ、、、豪的に熱い汁だべツツ、此傍にも船上りの四人連同じく支度しながら「太兵衛さんお前虎屋の饅頭はどうしたぞいの、太「六兵衛さん聞んせ怪體なこつちや昨日態々彼處へ往て買ふて來てとんと河六に忘れたわいの、連「つい一走り行て取てごんせ茲からわづか十里ほかないもせんもの、太「ハ、、、そふ言てもくれんがよいハ、、、此話を聞て彌次郎不思議そふに「モシあなた方が今言ひなされた虎屋といふはたしか大坂でございやすね、六「さよじやわいの、彌「其虎屋の饅頭を忘れたと仰やつた河六とやらは何處でございます、

六「コリヤ日本橋北詰東へいく處じやわいの、彌「その日本橋北詰東へいく所迄は爰から幾干程
 マささいやすね、六「此所から十里じやわいの、彌「はてなア大坂は思の外廣い所だノウ北八、北「ナ
 ニサ好い加減に聞てゐなせへわつちらを冷かすのたはな爰から十里有てたまるものか途方もねへ
 太「イヤお前は此所を何處じやと思ふてじや此所は伏見の京橋じやがな、彌「ナニ伏見だコリヤ
 北八が言ふ通貴様達やア人をはくらかすなおいちア昨宵伏見から船に乗て来たのだはな、太「何
 言んすやら桃山の狐になつたまゝれたもんじやあろぞい皆此方退てゐやんせ、北「退いてゐるも
 凄じい、そして俺等を狐つきたア何のこつた江戸つ子だぞつがもねへといさくさななば此大坂者
 の連と見えて二三人駈來り「何じやい、何せり合てじや其様事より此方やどえらい目に逢たわ
 いのこちとらが包を船で失ふたさかいいんまのさきまで其せいらくしておつたが根から葉から知
 れんわいのト言ふ内一人が彌次郎の傍にある包を見つけ「イヤ權介さんあこにあるわいの、そ
 じやさかい俺が言ふまいことか先へあがつた衆を問ふて見やんせといふたじやないかい、權「ホ
 ンニこれじやわいなト取にかゝれば彌次郎ちやつと控へて「コリヤ何ひろぐ此包はおいらがのだ
 は、權「ナニ吐しくさるおどれらやばなこと働さくさるなコリヤ見い風呂敷の端に此方の名が書
 いてあるわいと言はれて彌次郎吃驚しよくく見れば自分の包でなし臆を潰して「ホンニコリヤ

間違つたソレ戻すぞおいらがのは何處にある、權「あんだら盡せナニおどれらが包を誰が知ぞい、
 彌「這奴は語らねへ北八どふした、北「お前おれがのも取て一所に包んで側に置たじやアねへか如
 何しておいらが知るものだ、彌「ハテ面妖なモシ愈々此所は伏見に違ねへかね、皆「ハハハハ、
 何吐しくさるやらアノ頼見やんせ怪體なつらじやな、北「イヤ這奴等は太へ奴等だ、皆「太いも細
 いもあるこつちやないわい、たかでおどれら奸盜じや包に別條ないさかい許してこますとつと、
 出ていにくされ、彌「コリヤ飛だ目に逢ふが薩張分らぬ北八どふしたのたろふ、北「さればわつち
 も分らぬ全體昨宵は何日だつけ、彌「ム、かうと昨宵あの時分に月が出たから大かた廿四五日あ
 たりだ、北「今月は太か小か昨日は何の日だねへ、彌「さればかうと此間ソレ何處でか泊つた時
 甲子だといつたじやアねへか、北「ソレノ、あの茶飯はうまかつた、彌「平の牛蒡の大きさは彼奴は
 珍らしい、皆々「ワハハ、コリヤどふでも的等は木氣じやないわいワハハハ、と腹筋をよつて大
 笑ひする此中でも年配の太郎兵衛暫く考へて「ハ、ア聞へたところあるわいの成程餘り賢うも見え
 ん和郎達じやさかい人の物盗る程の働きはありやせんわいコリヤこうじやコレ其處な和郎達昨宵
 伏見から乗んして途中で船の泊つた時用たしにかな堤へでもあがらんしたことがあろがな、彌「左
 様でござりやす、太「ソレ見やんせこちとらが乗た船にも彼時上りおつた人が大分ありおつたが